

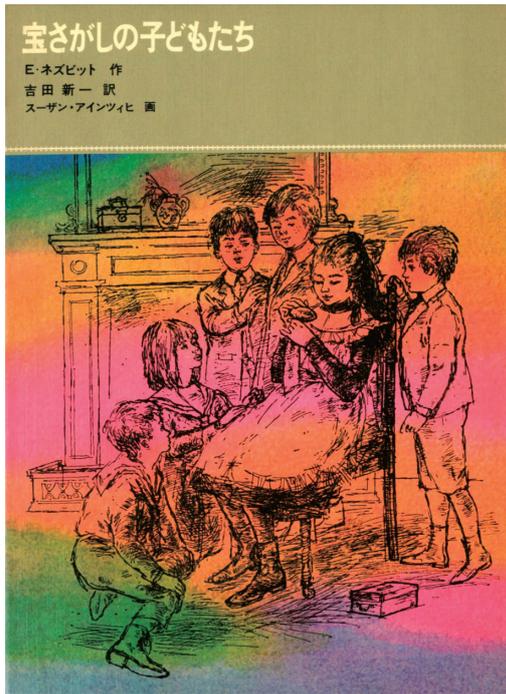
イギリス児童文学の原点と展開

家庭小説・冒険小説・創作童話・学校物語

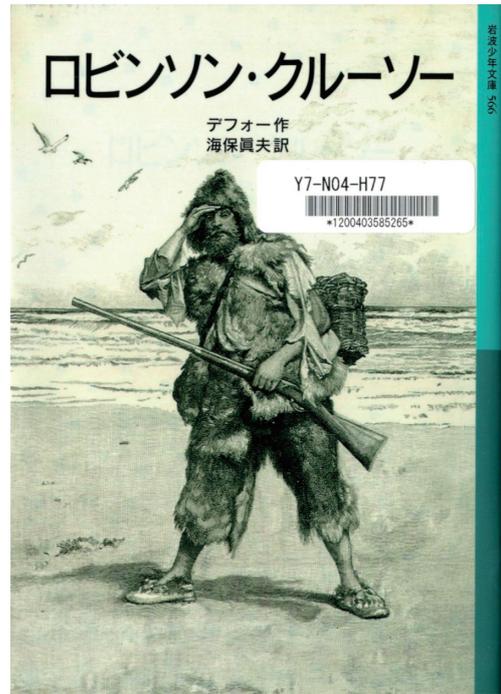


2013年10月

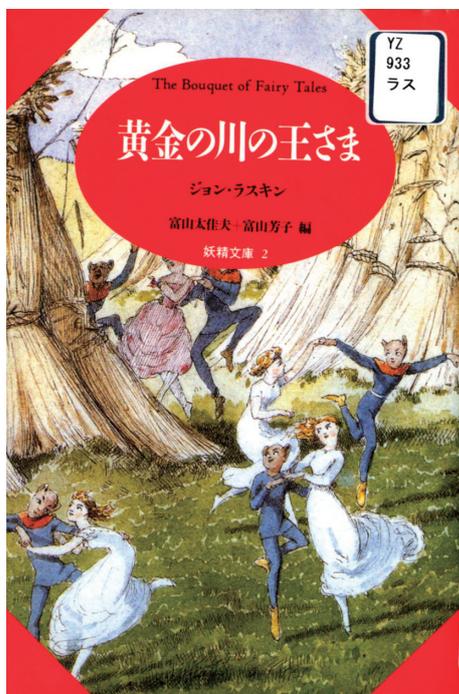
国立国会図書館 国際子ども図書館



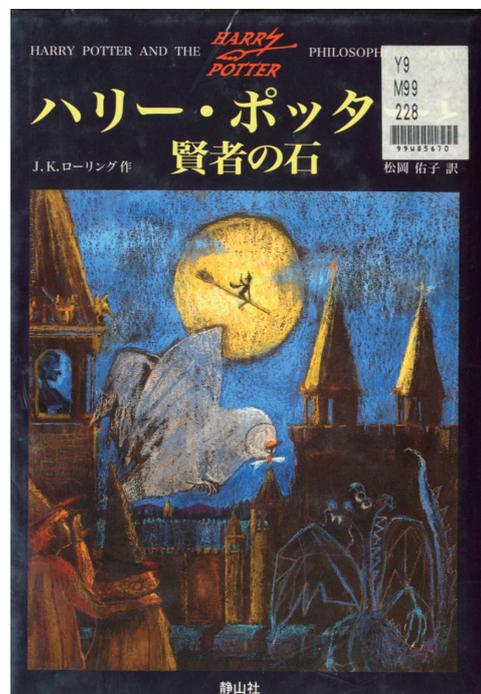
『宝さがしの子どもたち』E. ネズビット作、吉田新一訳、スーザン・アインツィヒ画 福音館書店 1974 (当館請求記号 Y7-4179) p. 21参照



『ロビンソン・クルーソー』ダニエル・デフォー作、海保眞夫訳 岩波書店 2004. 3 (当館請求記号 Y7-N04-H77) p. 32参照



『黄金の川の王さま』ジョン・ラスキン [ほか] 著、富山太佳夫、富山芳子編 青土社 1999. 8 (当館請求記号 KS141-G77) p. 57参照



『ハリー・ポッターと賢者の石』J. K. ローリング作、松岡佑子訳 (絵：ダン・シュレシンジャー) 静山社 1999. 12 (当館請求記号 Y9-M99-228) p. 80参照

平成24年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録

「イギリス児童文学の原点と展開
—家庭小説・冒険小説・創作童話・学校物語—

目 次

「児童文学連続講座講義録」の刊行にあたって	坂田 和光	……	3
凡例		……	4
はじめに：イギリス児童文学の始まりとジャンルの分化	川端 有子	……	6
シャーロット・ヤング『ひなぎく的首飾り』（1856）から始まる系譜	川端 有子	……	15
食から見る「ロビンソン変形譚」の系譜	水間 千恵	……	32
創作フェアリーテイルの起源と現在	芦田川祐子	……	57
学校物語の伝統からみる「ハリー・ポッター」シリーズ	菱田 信彦	……	80
結び	川端 有子	……	112
参考資料紹介—黄金期のイギリス挿絵画家から日本の童画作家へ	西尾 初紀	……	115
講師略歴		……	125

「児童文学連続講座講義録」の刊行にあたって

国際子ども図書館では、児童サービスに従事している図書館員等の方々を対象に、「児童文学連続講座」を毎年開講しています。平成16年度の「ファンタジーの誕生と発展」を嚆矢として、昨年度までに9回の連続講座を行ってまいりました。

平成24年度の児童文学連続講座は、「イギリス児童文学の原点と展開：家庭小説・冒険小説・創作童話・学校物語」と銘打って、平成24年11月5日、6日に実施いたしました。

9回の連続講座のうち実に3回について、イギリスを取り上げております。このことは、児童文学に占めるイギリスの重要性を表しているといえます。

平成24年度の連続講座は、広範なイギリスの児童文学を、ジャンル別に、特にリアリズムの系統について解き明かしていこうというものでした。開講に当たって、日本女子大学教授で当館客員調査員の川端有子先生に連続講座の監修をお願いいたしました。

各講座では、川端先生に『ひなぎくの首飾り』から始まる家庭小説・冒険小説・キャリア小説の展開を解説していただき、水間千恵先生には『ロビンソン・クルーソー』に始まるサバイバルストーリーの系譜を「食」に着目しつつ分析していただきました。芦田川祐子先生には広範なフェアリーテイルをテーマ別に分類して御紹介いただき、菱田信彦先生には「ハリー・ポッター」を素材に、学校物語そしてその系譜をお話いただきました。

家庭小説が包含するジェンダーの態様とその展開、サバイバルストーリーに見られる真の主題の変遷、フェアリーテイルの多種多様な展開、学校物語に内包された階級社会・上下関係と「ハリー・ポッター」の放つ伝統的価値観への痛烈な批判などなど、それぞれ学識や経験に基づいた御講義で、認識を新たに、改めてイギリスの児童文学の奥深さを体感いたしました。

また、当館職員西尾初紀が、19世紀末から20世紀初頭の「挿絵の黄金期」に活躍したイギリスと日本の挿絵画家たちを紹介しました。

本書は平成24年度児童文学連続講座の講義録です。各講師の魅力的な語り口を紙面上で味わっていただければと思います。また講義で紹介された資料のリストを収録し、当館所蔵資料には、請求記号を付しましたので御参照ください。

当方の施設的な制約から、あるいは様々な御事情で受講することができなかつた方々のために、本講義録が少しでもお役に立てば幸いです。

末尾ながら、監修及び講師をお引き受けくださった川端先生、そして講師をお引き受けくださった水間先生、芦田川先生、菱田先生に厚く御礼申し上げます。

平成25年10月

国立国会図書館国際子ども図書館長

坂田 和光

凡例

- 本書は、平成24年11月5日と6日の二日にわたって国際子ども図書館で開催した「国際子ども図書館児童文学連続講座—国際子ども図書館所蔵資料を使って（総合テーマ：イギリス児童文学の原点と展開—家庭小説・冒険小説・創作童話・学校物語）」を元に編集した講義録です。
 - *次ページの日程表もあわせて御参照ください。
- 講義当日に各講師が配布した「レジюме」、「紹介資料リスト」もあわせて掲載しました。「レジюме」は講義本文の前に、「紹介資料リスト」は講義本文の末尾に掲載しています。
- 「紹介資料リスト」は、講義の中で紹介された資料についてリスト化したものです。書誌事項は、原則として国立国会図書館の目録の表記を採用しました（所蔵資料を掲載しましたので、書誌事項は初版本とは異なる場合があります）。
 - *所蔵のない資料の書誌事項については、国立国会図書館サーチ等を参照しました。
- 「紹介資料リスト」の「請求記号」の項には、国際子ども図書館の請求記号を記載しました。国際子ども図書館が所蔵しない場合は、国立国会図書館東京本館の請求記号を記載し、（本館）と付記しました（所蔵状況：平成25年7月現在）。
- 講師の肩書きは連続講座当時のものです。

平成24年度「国際子ども図書館児童文学連続講座—国際子ども図書館所蔵資料を使って」
総合テーマ「イギリス児童文学の原点と展開—家庭小説・冒険小説・創作童話・学校物語」
日程表

総合監修 川端 有子（日本女子大学家政学部児童学科教授、国立国会図書館客員調査員）

○1日目 11月5日（月）

時 間	内 容	講 師
9時30分～ 10時10分	館内見学	
10時10分～ 10時15分	開会、諸注意	
10時15分～ 10時30分	はじめに：イギリス児童文学の始まり とジャンルの分化	川端 有子
10時30分～ 12時10分	シャーロット・ヤング『ひなぎくの首飾り』(1856) から始まる系譜	川端 有子
13時10分～ 14時50分	食から見る「ロビンソン変形譚」の系譜	水間 千恵（川口短期大学こども学科専 任講師）
15時00分～ 15時50分	参考資料紹介	西尾 初紀 （国際子ども図書館資料情報課長）
16時～17時	研修生意見交換会 I （グループ討論）	

○2日目 11月6日（火）

時 間	内 容	講 師
10時～11時40分	創作フェアリーテイルの起源と現在	芦田川 祐子（文教大学文学部英米語英 米文学科准教授）
13時00分～ 14時40分	学校物語の伝統からみる「ハリー・ポッ ター」シリーズ	菱田 信彦（川村学園女子大学文学部国 際英語学科教授）
14時40分～ 14時55分	結び	川端 有子
15時05分～ 15時55分	研修生意見交換会 II （グループ発表・講評）	
15時55分～ 16時00分	修了証書授与、閉会	

レジュメ

はじめに：イギリス児童文学の始まりとジャンルの分化

川端 有子

伝承文芸 → チャップ・ブック → 昔話の復活 → 創作童話 → **ファンタジー**

福音主義の影響

ロマン主義の台頭

想像力の重要性

宗教的な物語

あの世の物語

教育的な物語

いい子・悪い子

日常の物語

女の子

男の子

歴史物語

家庭小説

学校物語

冒険小説

児童文学の中で続く二つの目的 instruction
entertainment

- ① 伝承文芸 口承で語られた神話・伝説・昔話
- ② チャップブック 行商人が売り歩いた安価な木版画の物語 中身は色々だが昔話ものも多かった。
- ③ 福音主義 聖書に基づく厳格な教えを強調するプロテスタントの一派。子どもに嘘を教えるとして、昔話を罪悪視した。一方、日曜学校運動を興して貧しい階層まで識字率を高めた。
- ④ 宗教的な物語 福音主義の教えに基づき、厳格な神の教えを説き、原罪をもって生まれてきた子どもを救うために、罪と罰の物語を語った。
- ⑤ 教育的な物語 子どもは「タブラ・ラーサ」(白紙状態)で、そこに何でも書き込める未知の可能性を持つとして、様々なことを教えるために物語を利用した。
- ⑥ ロマン主義の台頭 それまでの原罪を負った子どもという福音主義的な思想から一転して、子どもに神に近い聖性を認め、おとなを救ってくれる天使のような存在として崇め、「美しい子ども」カルトをつくった。想像力の力、個性の重視をもって、昔話の復活、ファンタジー誕生の基礎を作る。

創作童話

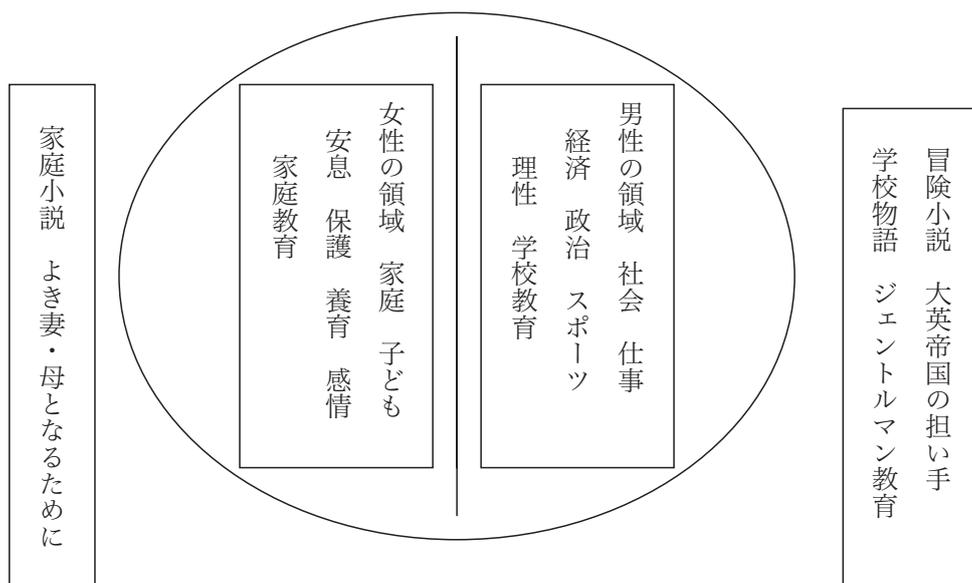
アンデルセンの英訳の影響から、おとなの小説家はその可能性を認め、昔話の形式を借りて、風刺や娯楽の短編を書き始め、やがて子どものための創作童話へ

ファンタジー

創作童話の短い話形から、長さや深さを獲得し、子どもを楽しませるための長編空想物語へ

日常の物語

ジェンダーによる分化
19世紀イギリスの中産階級の子どもの生活



～20世紀以降の展開をふまえて～ 2日間の構成

家庭の崩壊・多様化
冒険小説・学校物語への女性の進出
創作フェアリーテイルの流れ
ファンタジーの多様化・広範化・深化

- ①『ひなぎく的首飾り』から始まる系譜
- ②「ロビンソン変形譚」
- ③起源と現在
- ④学校物語と〈ハリー・ポッター〉

はじめに：イギリス児童文学の 始まりとジャンルの分化

川端 有子

本講座について

御紹介にあずかりました川端でございます。よろしくお願いたします。

全体の統合テーマということで、『はじめに』というレジュメで、まずお話しさせていただきます。

今回は、児童文学の伝統をイギリスにおいて探ってみようという試みで、最初に全体像を少しお話ししておきたいと思ひまして「イギリス児童文学の始まりとジャンルの分化」という題名を付けました。皆さんも御存じのとおり児童文学の伝統というのは、ほぼイギリスから始まったといってもよろしいかと思ひます。そしてこのイギリスにおける児童文学の発展は、日本の児童文学にも大きな影響をもたらしています。今までこの連続講座ではファンタジーの歴史が扱われたことがあります。そのほかのジャンル、特にリアリズムの系統について、どのように生まれ、どのように変化して今に至るかということについての文学史的なアプローチというものがないので、今回は2日間の限られた時間ではありますが、このリアリズムの系統である家庭小説、冒険小説、学校物語と共に、創作フェアリーテイルとファンタジーとの交錯点も含めて歴史をたどってみたいと思っております。

伝承物語とチャップ・ブック

そもそも児童文学や小説などが生まれるよりもずっと昔の話ですが、口承で伝えられた神話、伝説、昔話といったような伝承の文芸は、語り手、聞き手ともに老若男女の区別なく、どのような人も語り、そしてそれを聞くというような物語の形をしておりました。しかし、これが書き下ろされて本となり、売られるようになり、商品となり流

通するようになると、おのずとその読者層というのが分化していきます。まずはそれが大人と子どもというふうに分化し、そして児童文学というのが生まれてきたわけですが、それに先立つものとして、レジュメの伝承文芸の隣に書いてあります、チャップブック (chapbook) というものがあります。これは呼び売りの行商人が売り歩いた、非常に安価な、質の悪い紙で作られた木版画の挿絵の入った物語で、中身も様々なものがありますが、大人向けのものもあり、子ども向けのものもあり、子ども向けのものには昔話のものが結構含まれていました。「巨人退治のジャック」とか「赤ずきん」とか、そういったようなものです。昔話は書かれたものとして、まずここで保存されていたと言えます。

宗教的な物語と教育的な物語

そして18世紀頃、子どもたちに物語を読ませたいという動きが始まってきましたが、これは宗教的な理由が非常に大きかったのです。キリスト教の中でも、レジュメにあります「福音主義」というのは聖書に基づく厳格な考えを強調するプロテスタントの一派で、この人たちは子どもというのは生まれながら原罪を引きずってきた罪深い存在であり、この子どもたちには何とかきちんとしたキリスト教徒になるように宗教教育を施さなければならないというふうに考えておりました。それでこの福音主義の人々はボランティアの日曜学校運動というものを始めまして、貧しい階級の子どもたちにも読み・書き・算数・宗教教育を施す、そういったような運動を展開していきます。この日曜学校で使われた教科書、それから皆勤賞をとったときにご褒美としてもらう本、こういったような形で、宗教的な短い物語が子どもたちのために書かれていきます。しかし、この福音主義の人々は、昔話やおとぎ話というものを非常に罪悪視しました。これらは、子どもたちに嘘を教えることに他ならないということで、この世にはない妖精や巨人といった話を子どもに聞かせるのは絶対にいけないとして昔話を排斥したのです。そしてこの宗教的な物語は、福音主義の教えに基づき、厳格な神の教えを説き、原罪を持って生まれ

てきた子どもたちを救うために「罪と罰の物語」を語りました。この作家たちのなかには、シャーウッド夫人 (Mary Martha Sherwood) やバーボールド夫人 (Anna Laetitia Barbauld) といった女性作家がいます。この人たちの書いた物語は、現在翻訳で出ているわけではありませんし、ほとんど読む人もいなくなっておりますが、宗教教育としての児童文学の重要性という点で大きな意味を持っておりました。そしてまた、この頃、教育学者のジョン・ロック (John Locke) が、子どもは何も書かれていない白紙状態で生まれてくるので、ここには何でも書き込める、未知の可能性がある—これをラテン語で「タブラ・ラーサ」と申します—というふうに考えておりました。ですから、子どもたちにいろいろなことを教えるために物語を利用したわけで、教育的な物語というのが出てきました。このロックの教育論を地で行く作家たちにマライア・エッジワース (Maria Edgeworth)、セアラ・トリマー (Sarah Trimmer) といった女性作家がおりました。

ところで、こういった宗教的な物語とか教育的な物語には良い子と悪い子というのがはっきりと区別された形で登場してきます。そして良い子は必ず死んだ後、神に召されて天国でこの世でもずっと幸せな生活を送る、そんな物語が書かれます。これはもちろんクリスチャンにとってはファンタジーではなく、実際の物語なのですが、この天国の描写というのがやがては『北風のうしろの国』 (*At the Back of the North Wind*)、『ナルニア国物語』 (*The Chronicles of Narnia*) の別世界の描写へとつながったのではないかと、いうふうに思われます。それから良い子と悪い子を書いた場合、良い子は大体種類しかいないわけですが、悪い子の悪さは様々で、書けば書くほどいろいろな悪ガキたちが登場してまいります。そして皆さんもお分かりかと思いますが、良い子の話を読むよりは悪い子の話を読むほうがよっぽど面白いわけですし、この様な悪童たちの物語が、実は実際の子どもの姿に肉薄していった、そしてリアリズムの物語へとつながっていくという、意外なつながりが生まれていくわけです。

ロマン主義からファンタジーへ

そうしますうちに19世紀の初め頃からヨーロッパ全体を巻き込んだロマン主義という文学上の風潮が広まっていきます。このロマン主義というのは想像力の大切さ、そして昔話の空想性、個人の重要性、そういったものを非常に重視しましたので、ここで一旦追いやられていた昔話に復活の兆しが見えます。そしてこの昔話の形を使って、皆が創作を始めましたのが創作フェアリーテイル、つまり明日、芦田川先生がお話しされるフェアリーテイルの創作版というものにつながっていきます。そしてその創作フェアリーテイルがさらに長くなり、深くなり、幅が広がってファンタジーが生まれていくわけですが、その一番初めのものの一つが『不思議の国のアリス』 (*Alice's Adventures in Wonderland*) ということになります。そしてこのファンタジーは今に至るまでイギリスで大きく展開を遂げ、21世紀には「ハリー・ポッター」シリーズのブームとして、イギリスといえどファンタジーと言われるような伝統を築いていったわけですが、実は振り返ればファンタジーがイギリスで始まったのは19世紀の半ばという時期に当たるわけです。

リアリズムの物語の分化

これは少し置いておきまして、日常の物語、リアリズムの方に目を向けてみますと、歴史物語のほうは、綿々と教育的な物語の中に続いているのですが、日常の物語は、女の子向けのものと男の子向けのものと、ジェンダーによって分化することになります。これはちょうどこの頃、19世紀イギリスの中産階級—これは児童文学の書き手でもあり読み手でもあった社会階層に当たりますけれども—の社会の中で女性の役割と男性の役割というのがきれいに二つに分かれる、そんな時代であったからです。社会は女性の領域と男性の領域の二つに分かれて、女性は家庭で子どもを育て、家庭教育を施します。家庭というのは安息と保護の場所であり、子どもたちはここで生まれ、そして大きくなるという場所です。これに対して男性の領域というのは社会に出て仕事をし、経済的な活動や政治に従事することになりますので、

スポーツや知性、理性を重んじる学校教育というものが必要になります。

そうしますと、男の子の場合は学校に入る年齢になるとパブリック・スクール（寄宿制の学校）という形で男性の領域へ入っていき、そしてそこで大きくなって仕事に就くこととなりますが、女の子はそのまま家庭にとどまり、お母さんの手伝いをしながら大きくなって、やがて結婚して自分自身の家庭へと移動していくというかたちになります。男の子は将来の大英帝国の担い手となるために、様々な未知の地方へ探検に行ったり冒険を重ねたりするような冒険小説を読み、または日常の場であるパブリック・スクールでジェントルマン教育を受ける、そういうような舞台で日常の物語が展開していった、ということで冒険小説、学校物語というのは少年向けのジャンルとなったわけです。それに対して、生まれた時から結婚した後も家庭を離れることがない女の子には家庭小説というのが良き妻、良き母となるための教科書として用意された、ということになります。

そして、この冒険小説につきましてはこの後、水間先生からお話していただくこととなりますし、学校生活がさらに発展し続けた後にファンタジーと合体したのが「ハリー・ポッター」シリーズ、というふうに考えられます。そしてこの後私は専ら、女性の領域の教科書となりました家庭小説の方の流れを追っていきたいというように考えております。

こうして19世紀にこの萌芽が確立した様々な

ジャンルは、20世紀以後様々な展開を踏まえて今に至るのですが、家庭は様々な形に変わり、多様化し、または家庭の崩壊というようなことも言われるようになりました。また冒険小説や学校物語へは女性が進出していきます。創作フェアリーテイルというのは綿々と続きながら様々な形で今に至っております。ファンタジーも多様化し、広汎化し、進化し、今に至るものとなっています。このような歴史というのを見ていただきたいと思い、プログラムを用意いたしました。

ここまでが「はじめに」ということで、児童文学の中では、当初からインストラクション、教えるということと、エンターテインメント、楽しむ、楽しませることが二本の柱となってどの時代にも続いている、ということの一つ強調しておきたいと思います。いくら児童文学で子どもを教えようと思っても、面白くなければ読んでももらえない、ということが、初めの頃から児童文学の作家たちには意識されてきました。それで、日本では「面白くてためになる」とどこかの出版社がモットーにしておりましたけれども、どの時代でもどちらが上位に来るかということとはともかく、このインストラクションとエンターテインメントが二つの柱となって児童文学の中を続いて行ったということが確認できると思います。

（かわばた ありこ 日本女子大学家政学部児童学科教授、国立国会図書館客員調査員）

「はじめに：イギリス児童文学の始まりとジャンルの分化」紹介資料リスト

(本館) → 国立国会図書館東京本館で所蔵

※ → 国立国会図書館東京本館にも所蔵

デジタル化図書(館内) → 「国立国会図書館のデジタル化資料」でデジタル化資料を閲覧可能(館内限定)

デジタル化図書(インターネット) → 「国立国会図書館のデジタル化資料」でデジタル化資料を閲覧可能(インターネット公開)

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号	ジャンル	備考
1	ロビンソン・クルーソー	D. デフォー 作 坂井晴彦 訳 ベルナルド・ピカール 画	福音館書店 1975	Y7-4602	冒険 小説	
2	びっこのジャアバス	マリア・エッジウォース 作 前田晁 訳 志村直信 絵	童話春秋社 昭和25	児933-cE23bM	冒険?	デジタル化図書 (館内)
3	トム・ブラウンの学校生活 (『少年少女世界の名作文学. 4(イギリス編 2)』所収)	ヒューズ原作 後藤樞根 訳	小学館 昭和40	Y7-102	学校 小説	デジタル化図書 (館内)
4	さんご島の三少年	バランタイン 原作 大泉一郎 著 松田穰 絵	講談社 昭和31	児933-0395s	冒険 小説	デジタル化図書 (館内)
5	水の子どもたち：陸の子どもの ための妖精の物語. 上	キングズリー 作 芹生一 訳	偕成社 1996. 6	Y9-2790	ファン タジー	
6	水の子どもたち：陸の子どもの ための妖精の物語. 下	キングズリー 作 芹生一 訳	偕成社 1996. 6	Y9-2790	ファン タジー	
7	不思議の国のアリス：愛蔵版	ルイス・キャロル 作 ジョン・テニエル 絵 脇明子 訳	岩波書店 1998. 11	Y9-M99-79	ファン タジー	
8	若草物語	L. M. オールコット 作 矢川澄子 訳 T. チューダー 画	福音館書店 1985. 3	Y8-2433	家庭 小説	
9	北風のうしろの国	G. マクドナルド 作 田谷多枝子 訳 真島節子 絵	太平出版社 1977. 12	Y7-6444	ファン タジー	
10	ケティー物語	クーリッジ 作 三木澄子 編著 武部本一郎 絵	偕成社 1973	Y7-3852	家庭 小説	
11	ジャカネーブス	ユーイング 作 松原至大 訳 宮木薫 絵	同和春秋社 昭和29	児933-cE95jM	冒険?	デジタル化図書 (館内)
12	わたしたちののほら	ジュリアナ・ホレイシア・ ユーイング 原作 バーリー・ドーアティ 再話 ロビン・ベル・コーフィールド 絵 佐藤見果夢 訳	評論社 1996. 5	Y18-11455	家庭 小説	
13	クリスマスの天使	ケイト・ウィギン 原作 谷村まちこ 編訳	偕成社 1989. 12	Y8-7721	家庭 小説	
14	宝さがしの子どもたち	E. ネズビット 作 吉田新一 訳 スーザン・アインツィヒ 画	福音館書店 1974	Y7-4179	家庭 小説	

はじめに：イギリス児童文学の始まりとジャンルの分化

15	よい子連盟	イーディス・ネズビット 原作 酒井邦秀 訳	国土社 1978. 4	Y7-6651	家庭小説	
16	少女レベッカ	ウィギン 作 関七美 文	ポプラ社 1979. 1	Y7-7182	家庭小説	
17	小公女	フランシス・ホジソン・バーネット 作 高樓方子 訳 エセル・フランクリン・ベッツ 画	福音館書店 2011. 9	Y9-N11-J287	学校小説	
18	鉄道きょうだい	E. ネズビット 著 中村妙子 訳	教文館 2011. 12	Y9-N12-J84	家庭小説	
19	赤毛のアン	ルーシー・モード・モンゴメリ 著 西田佳子 訳	西村書店 2006. 12	Y9-N07-H20	家庭小説	
20	秘密の花園	バーネット 著 グラハム・ラスト 絵 野沢佳織 訳	新装版 西村書店 2006. 12	Y9-N07-H38	家庭小説	
21	小さい公爵	シャーロット・マリー・ヤング 原作 蘆谷蘆村 著 村山知義 絵	婦人之友社 昭和5	児乙部30-A-1	歴史小説	デジタル化図書 (館内)
22	少女ポリアンナ	エリナー・ポーター 作 谷口由美子 訳	岩波書店 2002. 12	Y7-N03-H36	家庭小説	
23	ツバメ号とアマゾン号	アーサー・ランサム 作 岩田欣三, 神宮輝夫 訳	岩波書店 1995. 7	Y9-2340	冒険小説	
24	大きな森の小さな家	ローラ・インガルス・ワイルダー 作 ガース・ウィリアムズ 画 恩地三保子 訳	福音館書店 1972. 7 (56刷: 1997. 9)	Y9-M98-155	家庭小説	
25	月あかりのおはなし集	アリソン・アトリー 作 こだまともこ 訳 いたやさとし 絵	小学館 2007. 3	Y9-N07-H111	創作 フェアリーテイル	
26	ファミリー・シューズ	ノエル・ストレートフィールド 著 中村妙子 訳	すぐ書房 1983. 9	Y8-1407	家庭小説	
27	ムギと王さま	ファージョン 作 石井桃子 訳	改版 岩波書店 1987. 3	Y8-4145	創作 フェアリーテイル	
28	マリアンヌの夢	キャサリン・ストー 作 猪熊葉子 訳	富山房 1977. 1	Y7-5784	ファンタジー	
29	ピクトリアの青春	ノエル・ストレートフィールド 作 野々瀬協子, 新田由香子 訳	すぐ書房 2003. 7	Y9-N04-H38	家庭小説	
30	しずくの首飾り	ジョーン・エイケン 作 猪熊葉子 訳 ヤン・ピアンコフスキー 絵	岩波書店 1975	Y7-4873	創作 フェアリーテイル	

31	わんぱくタイクの大あれ三学期	ジーン・ケンプ 作 松本亨子 訳 キャロライン・ダイナン 絵	評論社 1981. 9	Y7-9190	学校 小説	
32	丘の家のセーラ	ルース・エルウィン・ハリス 作 脇明子 訳	岩波書店 1990. 6	Y8-7469	家庭 小説	
33	マチルダは小さな大天才	ロアルド・ダール 著 クエンティン・ブレイク 絵 宮下嶺夫 訳	評論社 2005. 9	Y9-N05-H392	学校 小説	
34	バイバイわたしのおうち	ジャクリーン・ウィルソン 作 ニック・シャラット 絵 小竹由美子 訳	偕成社 2000. 3	Y9-N00-41	家庭 小説	
35	ハリー・ポッターと賢者の石	J. K. ローリング 作 松岡佑子 訳	静山社 2003. 11	Y9-N03-H373	ファン タジー	
36	イギリス女流児童文学作家の系譜. 1 (翔くロビン)	ニュー・ファンタジーの会 [著]	透土社 1990. 4	KS74-E56 ※	研究書	
37	イギリス女流児童文学作家の系譜. 2 (ひなぎくの首飾り)	ニュー・ファンタジーの会 [著]	透土社 1992. 4	KS74-E56 ※	研究書	
38	イギリス女流児童文学作家の系譜. 3 (野に出た妖精たち)	ニュー・ファンタジーの会 [著]	透土社 1993. 5	KS74-E149 ※	研究書	
39	イギリス女流児童文学作家の系譜: Frances H. Burnett の世界. 4 (夢の狩り人)	ニュー・ファンタジーの会 著	透土社 1994. 5	KS112-E32 ※	研究書	
40	イギリス女流児童文学作家の系譜. 5 (イバラの宝冠)	ニュー・ファンタジーの会 [著]	透土社 1996. 8	KS74-E56 ※	研究書	
41	子どもの本の歴史: 英語圏の児童文学. 上	J. R. タウンゼンド 著 高杉一郎 訳	岩波書店 1982. 1	KS74-207 ※	研究書	
42	子どもの本の歴史: 英語圏の児童文学. 下	J. R. タウンゼンド 著 高杉一郎 訳	岩波書店 1982. 2	KS74-207 ※	研究書	
43	子どもの本の歴史: 写真とイラストでたどる	ピーター・ハント 編 さくまゆみこ, 福本友美子, こだまともこ 訳	柏書房 2001. 10	KG411-G52 ※	研究書	
44	The life and adventures of Robinson Crusoe: now first correctly reprinted from the original edition of 1719	Daniel Defoe 作 Ernest Grisct 画	F. Warne [1878?]	VZ1-671		
45	The daisy chain, or Aspirations	Charlotte M. Yonge 作	Reprint trade hard-cover ed. Norilana Books, 2009	Y8-B12685		
46	Tom Brown's school-days	Thomas Hughes 作 Edmund J. Sullivan 絵	[1st ed.] Macmillan 1896	VZ1-26		
47	The coral island	R. M. Ballantyne 作	Collins' Clear-type Press [18--?]	VZ2-1010		
48	The water-babies	Charles Kingsley 作 Jessie Willcox Smith 絵	Dodd, Mead c1916	Y8-B11404		

はじめに：イギリス児童文学の始まりとジャンルの分化

49	Alice's adventures in Wonderland	Lewis Carroll 作 John Tenniel 絵	Books of Wonder [1992]	Y8-A5267		
50	Little women	Louisa May Alcott 作 Jessie Willcox Smith, Frank T. Merrill 絵	2002 ed. Gramercy books 2002	Y8-B2301		
51	At the back of the North Wind	George MacDonald 作	[1st ed.] Blackie [1890]	VZ1-687		
52	What Katy did : a story	Susan Coolidge 作	F. Warne [1891]	VZ1-267		
53	The story of the treasure seekers : being the adventures of the Bastable children in search of a fortune	E. Nesbit 作 Cecil Leslie 絵	Penguin Books 1994	Y8-A175		
54	The wouldbegoods : being the further adventures of the treasure seekers	E. Nesbit 作 Cecil Leslie 絵	Penguin Books 1995	Y8-A176		
55	A little princess : being the whole story of Sara Crewe now told for the first time	Frances Hodgson Burnett 作 Harold Piffard 絵	F. Warne 1905	162-211 (本館)		
56	The railway children	E. Nesbit 作	Post-War ed. Wells Gardner, Darton & Co. 1906	VZ1-793		
57	Anne of Green Gables	Lucy Maud Montgomery 作	Puffin Books 1994	Y8-A325		
58	The secret garden	Frances Hodgson Burnett 作 Charles Robinson 絵	D. Campbell c1993	Y8-A921		
59	Pollyanna	Eleanor H. Porter 作 Neil Reed 絵	Puffin Books 1994	Y8-A321		
60	Swallows & Amazons	Arthur Ransome 作・絵	New ed. J. Cape 1958 (1997 printing)	Y8-A5266		
61	Little house in the big woods	Laura Ingalls Wilder 作 Garth Williams 絵	1st Harper Trophy ed. HarperTrophy 1971, c1981	Y8-A1079		
62	Family shoes (The Bell family)	Noel Streatfeild 作 Shirley Hughes 絵	Collins 1954	所蔵なし		
63	Marianne dreams	Catherine Storr 作 Marjorie-Ann Watts 絵	Lutterworth 1984 c1958	Y8-A5821		
64	A vicarage family	Noel Streatfeild 作 Charles Mozley 絵	Collins 1963	所蔵なし		
65	The Suitcase Kid	Jacqueline Wilson 作	Doubleday 1992	所蔵なし		
66	Harry Potter and the philosopher's stone	J. K. Rowling 作	Bloomsbury 1997	Y8-A4722		

レジュメ

シャーロット・ヤング『ひなぎく的首飾り』(1856) から 始まる系譜

川端 有子

『ひなぎく的首飾り』(1856) シャーロット・ヤング作

第一部は雑誌『マンスリー・パケット』に連載

第二部はそののち執筆

読者対象：家族のファミリー・リーディング

①作者について

②簡単な内容紹介

③含んでいる様々なジャンルの萌芽

- A 家庭小説
- B 冒険小説
- C 創作フェアリーテイル
- D 学校物語
- F キャリア小説

④直接的な影響関係

- A 『若草物語』(1868)
- B 『宝さがしの子どもたち』(1899)
- C 『マリアンヌの夢』(1958)

⑤家庭小説の英米差

- A オールコット～クーリッジ～ウィギン～モンゴメリ～ポーター
- B オースティン～ヤング～モルズワース～ネズビット～ストレートフィールド

⑥モチーフとしての広がり

- A おてんばな女の子
- B 男女逆転の双子
- C ベッドの中の天使
- D 将来の夢と現実
- E 女の子の夢の行く末

⑦家庭小説の現在

一つの例

ジャクリーン・ウィルソン『バイバイわたしのおうち』(1992)

図1 『ひなぎく的首飾り』登場人物

メイ医師 = マーガレット・メイ

メイ	トム	ハリ	エセル	ノーマン	フローラ	マーガレット	リチャード
オーブリー							
ブランチ							
マーガレット (デイジー)							

アラン	ジョージ	ミータ
-----	------	-----

図2 『若草物語』登場人物

マーチ牧師 = マーチ夫人

ローレンス老人

エミ	ベス	ジョー	メグ
ハンナ			

ローリー	ジョン・ブルック
------	----------

図3 『宝さがしの子どもたち』登場人物

バスタブル氏 = バスタブル夫人 (故人)

H・O	エイツキー	アリス	ノエル	オズワルド	ドローラ
エレン					

トム	デイジー
----	------

図4 『バイバイわたしのおうち』登場人物

キャシー = パパ = ママ = ボブ

ゼン	クリスタル
----	-------

アンディ

ポーラ	グレアム	ケイテイ
-----	------	------

シャーロット・ヤング
『ひなぎく的首飾り』(1856)
から始まる系譜
川端 有子



『ひなぎく的首飾り』とその作者

ここでは「シャーロット・ヤング『ひなぎく的首飾り』(1856) から始まる系譜」ということで、家庭小説の系譜をお話ししていこうと思っております。

『ひなぎく的首飾り』というのは原題を *The Daisy Chain* といひまして、1856年、シャーロット・ヤング (Charlotte Mary Yonge) という女性が書いております。この物語は、人気は非常に高かったのですが、あまりにも長かったのと、それから宗教色がかなり強いということで、翻訳もありませんし、今読まれているとは到底言えないのですけれども、様々な点で家庭小説や少女小説の原点となった作品です。しかも読み直してみますと、この長い物語の中には冒険小説も学校物語も少女小説も創作フェアリーテイルもキャリア小説も含まれており、非常に広範囲なジャンルにわたる物語構成になっております。またこれは11人の子どもたちが登場するというので、とても広範囲な読者層をも持っております、家族のファミリー・リーディングとして親しまれたということが分かります。この『ひなぎく的首飾り』から後の変遷を見ることで、イギリスの家庭小説というもののジャンルの範囲がだんだん狭まっていったり広がっていったりした様子、そして受け継がれたものや逆転したもの、今に続くものや廃れたものというのが見えてくるような気がいたします。とりわけ家族の在り方、その中でも男女の役割の在り方を見るのに適切なのではないかと考えた次第です。

この小説は、第一部は『マンスリー・パケット』(*Monthly Paquet*) という雑誌に連載されていまし

たが、この『マンスリー・パケット』というのはイギリスで最初の思春期の10代の少女のための雑誌で、このシャーロット・ヤングが編集しておりました。そして第二部はこのきょうだいたちが大きくなってからの話ですが、その後に単独で執筆されたものです。

作者のシャーロット・ヤングは1823年から1901年に生きた人です。イギリスのハンプシャー州のオッターボーンというところで生まれ、両親からマリア・エッジワース (Maria Edgeworth) 風の教育を受け、自制心、克己心、自己修練ということ非常に強く叩き込まれた人でした。また非常に質素な子ども時代を送っており、子ども時代の食事はパンとミルクだけだったと、そんなことも書いているほどです。母親から家庭教育を受け、その後、父親から教育を受け、当時男性にしか教えられなかったラテン語やギリシャ語、幾何や代数などといったようなものまで教わっています。そして、なんと7歳で既に日曜学校の教壇に立っていたという、天性の教員のような人で、牧師や医者、地主や校長などかなり裕福な層の方々と付き合いがあったのですが、とにかく貧しい労働者への惜しみない援助に生涯尽くしてきた人でした。

この時代、英国国教会の高教会派 (The High Church) の宗教運動があり、オックスフォード運動というのを指導していた、キーブル牧師 (John Keble) という人の深い影響を受け、彼女は日曜学校で教えるトラクト (tract) 本という本から始めて、小説を書き出しました。原稿料は専ら教会建設用の基金や慈善に使うということで、全て教会の基金であるとか、ニュージーランドへの伝道、宣教などに費やしています。

彼女の作品の中で最も有名なのは1853年に書かれた『レッドクリフの跡継ぎ』(*The Heir of Redclyffe*) という歴史小説ですが、これは大変人気があり、クリミア戦争に行った兵士は必ず持って行って夜読んでいた、という話があるくらいです。また、10代の少女のための読み物の教育効果というのを非常によく考えた人で、先ほどお話ししましたように『マンスリー・パケット』という雑誌を編集していました。この『ひなぎく的首飾り』も、国教徒としての女性の生き方の理想を日常生活に沿って教える読み物として書かれております。そしてこの『マンスリー・パケット』からは、様々な優秀な女性作家が生まれてきたということも大きな功績でした。

シャーロット・ヤングは、父親、母親そして親戚を次々と先に亡くし、78歳で160冊以上もの本を残して独身のまま亡くなっています。

物語と登場人物

まず『ひなぎく的首飾り』という本の内容を簡単に紹介しておきます。

この『ひなぎく的首飾り』は、メイという一家の物語、7年間にわたる家族の年代記となっています。レジュメの図1に家系図のようなものを書いてみましたが、父親は人望のある医師で、母のマーガレットは美しくて威厳のある女性、そしてこの子だくさんの幸せな秩序ある家庭が、理想的な家庭として最初に登場してきます。『ひなぎく的首飾り』というのは、一人一人の子どもたちをひなぎくにたとえ、これをつなぎ合わせた首飾りが父親と母親の周りを取り囲んでいるという、幸せな家庭の象徴となっています。それまでの宗教的な物語とは違い、この中に出てくる子どもたちは血肉兼ね備えた、欠点もある子どもたちの肖像で、その子どもたちがそれぞれの道を歩みながら成長していく姿が描かれています。

しかしこの物語では、冒頭で大きな事件が起こります。馬車の事故で母親のマーガレットが亡くなってしまい、長女のマーガレットも大怪我を負うという事件です。このために一家は大騒動に巻き込まれてしまいます。

医師でありながら妻の命を救うこともできず、

娘の怪我を救うこともできなかった父の困惑と心配。そして母親の事故を目の前で見てしまったがために神経症を発症したノーマンという少年。そして母親を亡くした小さな子どもたちをいたわる上の娘たち、エセルやフローラ、マーガレット。このような家族の物語がここに始まります。

寝たきりになってしまうマーガレットを中心に、リチャード、ノーマン、フローラ、ハリー、エセル、トム、メアリ、オーブリー、ブランチ、そして生後数ヶ月の末の娘のマーガレット—彼女は区別のためにダイジーと呼ばれます—、そして通いの家庭教師のミス・ウィンターが加わり、物語はこのそれぞれの主人公がそれぞれの形で成長していく姿を描くのですが、まずこの死んだ母親が叔母に宛てて残した手紙というのが発見され、その手紙の中から、母親の目から見た子どもたちの長所や短所、特徴というのが端的に表されます。

長男のリチャードは聖職者を目指す穏やかで温厚な青年で、勉強はあまりできないのですが大変に優しい、弟や妹達を思いやるお兄さんです。マーガレットは、自分は半身不随になってしまったけれども、精神的な中心となってこの家庭の中でその役目を全うするのだと決心します。フローラは一番の美人で非常に有能な女性です。そしてほぼ主人公役となるエセルですが、この子はおてんばでおちょこちょい、どこかに本当にいそうな、男の子だったらよかったのと思われるような少女です。そして繊細で勉強好きなノーマン、学校が肌に合わずに船乗りを目指すハリー、気弱で人の言いなりになりがちなトム、そして母親にはトムとは男女逆に生まれてくればよかったのと言われる元気なメアリ、その下の子どもたちは、ほとんど性格は書かれなくて小さい子がいるな、という程度ですが、そのような子どもたちが登場してきます。

そしてこの子どもたちがそれぞれに心に抱いた野心はというと—*The Daisy Chain* の副題は *Aspirations* といい、子どもたちが大きくなったらこうなりたいというような望みを表しているのですが—リチャードは優しい、人に尽くすという性格を生かして牧師になります。ノーマンは非常に頭が良かったので大学教授にもなれると言われて

いたのですが、野心を宗教的な目的に振り替えてニュージーランドへ行く宣教師となります。マーガレットは病身のまま寝たきり生活を送っているのですが、恋人の死を悼んで亡くなってしまい、ハリーは初心を貫いて船乗りとなります。エセルは近隣にあるコックスモアという貧しい地方に学校と教会を建てて、これを盛り立てていくという事に生涯を費やし、父親と共に家に残ります。フローラはその美貌を生かして村の名士と結婚し、政治に乗り出しますが、残念ながらその出過ぎた振る舞いのために子どもを亡くしてしまうという罰を受けねばなりません。トムは様々な可能性が待っている海外へ行きたいという夢を持っていたのですが、それを諦め、父親の後を継いで家業の医師となります。

家系図の横に書いてありますのがその兄弟たちの伴侶となる人たちです。ミータというのがノーマンの奥さんになる人で、経済的に恵まれた名家のお嬢さんでしたが、メイ家の影響を受けて精神的に大きな成長を遂げ、ノーマンの良き伴侶として精神的な支えとなり、さらにミータの経済的なバックグラウンドがあってこそノーマンの宣教師としてのニュージーランド行きが可能になるという結果になっております。アラン・アーネスクリフというのはマーガレットの婚約者だったのですが、彼が叔父さんから受け継いだ遺産が、エセルが建てたいと思ったコックスモア教会の財源となります。アーネスクリフは南洋の島で亡くなってしまいますが、この結ばれなかった二人の婚約指輪がこのコックスモア教会の土台として一精神的な土台として一埋められることとなります。フローラが結婚したのはジョージ・リバーズという人で、この人はフローラに地位と社会的手腕を發揮する場を与えることとなります。これは残念ながらフローラには辛い経験とつながっていくのですが、これはまた後でお話することにします。

様々なジャンルの萌芽

それでは次に、この物語の中に含まれている様々なジャンルの萌芽を見ていきたいと思えます。

まず、家庭小説はここから始まりました。その

特徴として幸せな家族の助け合い、そして兄弟同士の競争や葛藤、いたずら、そして何より家庭が成長の場となるということが挙げられます。それは、とりわけ女性の居場所としての場で、ここでは天使のようなマーガレットが精神的な支柱として君臨し、そして有能なフローラがいろいろな切り盛りをします。そしておてんば娘のエセルがおてんばを矯正され、やがてはこの家庭の場にふさわしい女性として育てられていくこととなります。

またこの物語の中に冒険小説の萌芽があるというのは、ハリーという少年が船乗り志望だったということによるのですが、ハリーは家を出てアラン・アーネスクリフと共に南洋に船出していきます。ところが二人の乗った船は難破し漂着して、サバイバル生活を送ることとなります。そしてアーネスクリフは亡くなってしまいますが、ハリーは死んだものと諦められていたところが、奇跡的にニュージーランドにたどり着いて助かります。しかもそのニュージーランドで、実はそこに宣教に来ていた叔母さんと再会するという話があり、無事に家に帰ってきて喜んで迎えられるという辺りに、この後水間先生にお話しいただく冒険小説の要素も含まれているわけです。

創作フェアリーテイルとしては、この兄弟姉妹がお互いにお話ごっこをして、即興の物語を語り合うという場面があります。これはこの後『若草物語』(*Little Women*)であるとか、『宝さがしの子どもたち』(*The Story of the Treasure Seekers*)でも、兄弟同士でお話を作り合って語り合うような場面があり、そのような伝統があるのかと思えますが、それが創作フェアリーテイルになっているのも面白いと思えます。

また、この物語は少年達が出てきますので、当然学校というのも重要な舞台となっていきます。長男のリチャードは学業が苦手で、試験に落ちたりしていろいろと悩むことも多く、一方ノーマンは非常に優秀で、奨学金を目指し必死に勉強するのですが、奨学金を得たとたんに母親の死を体験したトラウマで心を病んでしまうという事件も起こります。そして学校物語に最もよく出てくるパターンとして、トムという気の弱い少年がいるの

ですが、この子は悪い友達に引きずられて飲酒に走り、さらには自分がやったのではない借金まで背負わされて非常に苦勞することになってしまいます。これを兄弟たちが支え、厳しい父親が指導していくわけなのですが、この辺りに学校物語の要素というの大きく入り込んでいます。

最後にキャリア小説ですが、それぞれの家族のメンバーがそれぞれ自分の特性を生かしつつ、世の中のために身を立てる道を模索する、というのがこの物語の一つのテーマとなっており、それぞれが最も尊い仕事へもちろんその尊さには時代が大きく反映しているのですがーという形で人生を考える契機にもなっていると思います。

直接的な影響関係―『若草物語』

今はもう読まれなくなってしまったこの『ひなぎく的首飾り』ですが、この物語が20世紀の初めぐらいまでは確実に読まれていたという証拠が、いくつかの児童文学の作品から発見できます。直接的な影響関係として次にお話しするのがその辺りです。

まずオールcott (Louisa May Alcott) の、『若草物語』を御存じない方というのはおそらくいないと思うのですが、これは1868年、『ひなぎく的首飾り』から10年ぐらい経ってからアメリカで書かれた作品で、ほとんどストレートな後継物語と考えることができます。この『若草物語』の中で、登場人物のほぼ主人公役にあたる、本が大好きな次女のジョーがシャーロット・ヤングの『レッドクリフの跡継ぎ』を読んでぼろぼろ泣いている、というシーンがあります。覚えていらっしゃる方はおられるでしょうか。明らかに作者のオールcottはシャーロット・ヤングを愛読していましたし、もしかするとライバル視していたかもしれません。というのは、共通点が非常に多いからなのです。

『ひなぎく的首飾り』の中では、中心になる一家の苗字がメイ (May)、5月でした。オールcottの『若草物語』の中の一家はマーチ (March)、これは3月です。これは何か張り合うところがあったのではないかと思われるのですが、さらに見ていきますと、マーチ家というのは父が不在で母が

いる家庭です。しかし不在の父というのが一家の精神的なバックボーンをなしており、この父のいう理想の女性になろうと、4人の姉妹はいろいろと苦勞をしていくわけです。そして『若草物語』には女の子、姉妹しか登場しません。家庭小説がさらに女の子のものへと向かう方向性を示していると考えられると思います。ただし、若草物語にはマーチ家の隣にはローレンス家というお金持ちの家があり、こちらが男性ばかりの家族構成となっていて、これがちょうどバランスをとるような形で『ひなぎく的首飾り』の男の子キャラクターがそちらに振り分けられたというように考えてもよいかと思います。

さらに共通点はまだあります。長女の名前が同じマーガレットです。ただし『若草物語』のほう为爱称でメグと呼ばれています。さらに次女のジョー、これは主人公格になりますが、『ひなぎく的首飾り』のほうでもエセルというおてんば少女が主人公格で、この二人には非常に多くの共通点があります。さらに一人の寝たきりの女の子が、美しいともし火のようにその家庭の中の支えになるというパターンも同じで、『ひなぎく的首飾り』の中ではお姉さんのマーガレット、そして『若草物語』の中ではしょう紅熱で倒れるベスがこの役割を引き継いでいます。そして身の程知らずに社交的で学校仲間引きずられる、ちょっと虚栄心の強いキャラクターというのが『ひなぎく的首飾り』ではフローラ、『若草物語』ではエミーです。

こういった共通点が見られる上に、宗教的な枠組の中ではありますが、人間的なきょうだいの成長の物語になっているという点も似通っています。野心に燃えているのは、『若草物語』では専ら作家になりたいジョーと画家になりたいエミーなのですが、姉妹はそれぞれに伴侶を得て、しかしその中の一人は天使として天国に召されてしまいます。このような点も共通点と言えます。さらに『若草物語』では叔母のマーチ未亡人と隣のローレンス家のジェイムズ老人という人が経済的な支えとなっておりますが、『ひなぎく的首飾り』においても子どもたちが様々なことに成功するのが実は遺産のおかげとか、結婚した相手がお金持ちだったからとか、そういうところから来ています。

直接的な影響関係―『宝さがしの子どもたち』

次に、19世紀の最後の年にイギリスのイーディス・ネズビット (Edith Nesbit) が、『宝さがしの子どもたち』というイギリスの家庭小説といえる作品を書いております。これは家庭小説といいますが、イギリスの場合はお父さんお母さんの影が非常に希薄で、兄弟姉妹の関係を描くというのが主になるのですが、この『宝さがしの子どもたち』とその続編の『よい子連盟』(The Would-Be-Goods) という本において、『ひなぎく的首飾り』は一ひねりしたからかいの態度で言及されています。つまりネズビットは『ひなぎく的首飾り』の宗教性やモラル性というものを偽善としてすっぱ抜いているわけなのです。

例えば、この『よい子連盟』の中では―『よい子連盟』は翻訳があるのですが、全訳ではなく、私が引用したいところが日本語になっていないので残念なのですが―ここに登場するデイジーは―デイジーと言うのは『ひなぎく的首飾り』を意識しているわけですが―本好きでおとなしくて『ひなぎく的首飾り』を愛読していて、すごくいいお話なの、みたいな感想を言うのですが、兄はそれを、その本はそんないい本じゃないよ、男の子が女装してお姉さんを死ぬほどこわがらせて罰を受けるとかそんなすごい話なんだよ、とすっぱ抜きます。確かにそういうようなエピソードはあるのですが、そう言われてみなければそんな「すごい話」とは、私も気がつきませんでした。

他にも、『宝さがしの子どもたち』の作者ネズビットは『鉄道きょうだい』という本も書いているのですが、この中では、男の子が自分の姉に向かって、寝たきりになって、悩める天使みたいな顔をして家中の同情を一身に受けて、その家のともし火は私よ、みたいな顔をされちゃ迷惑だ、みたいなことを言っています。これは明らかにマーガレットやベスへの批判というか皮肉と考えられます。それに対して、『宝さがしの子どもたち』の長女であるドーラはどこかそういう「家の中の精神的なともし火」とか「寝たきりの美しい天使」というのになりたい願望がかいま見えて、そんな感じが面白いのですが、それを男兄弟にすっぱ抜かれてしまいます。

この『宝さがしの子どもたち』の中にはノエルとアリスという双子のきょうだいが出てくるのですが、ノエルという男の子は詩を作るのが大好きで女の子のように優しく繊細で病弱な少年で、アリスというのは非常に活発で木登りもすればいたずらもする、服は破くというようなおてんばな女の子です。これがちょうど男女の役割を逆転させた、『ひなぎく的首飾り』のトムとメアリのよう存在として考えられると思います。

『宝さがしの子どもたち』は母が死んでいて父が多忙な家庭の家族、兄弟姉妹の群像であるという点で『ひなぎく的首飾り』に似ているのですが、大きな違いは『宝さがしの子どもたち』は、それぞれが本の中に出てくるようなよい子になろうと思って本当に一生懸命頑張るのですが、その頑張りには全て裏目に出て、余計に厄介ごとが起こって周りを散々な目に遭わせてしまうというところですね。その意味で『ひなぎく的首飾り』の全く逆を行く、非常に皮肉の効いた風刺となっていることが分かります。そしてさらに、この『宝さがしの子どもたち』の中では子どもたちは成長しません。いたずらっ子のままです。そして成長もしなければ完成もしない子どもの群像である、という点でも『ひなぎく的首飾り』のアンチテーゼになっていると考えられます。ネズビットはこうして『宝さがしの子どもたち』のなかで『ひなぎく的首飾り』をひっくり返し、宗教性も教訓性も全くない子ども時代の楽しさのみを描くことができたようです。

しかしこの『宝さがしの子どもたち』が最後に経済的に豊かになり、幸せをつかむのは金持ちの隣人のサポートのお陰であるという点では『ひなぎく的首飾り』と何ら変わっておりません。子どもたちがお金儲けに成功するわけでも何でもないのです。子どもたちが本当に経済活動に参加し、そして職業というものを真剣に考え出すのはノエル・ストレットフィールド (Noel Streatfeild) の『ファミリーシューズ』(Family Shoes) や『バレエシューズ』(Ballet Shoes) といったキャリア小説で、20世紀になってからの話となります。

直接的な影響関係—『マリアンヌの夢』

さらに意外なところに『ひなぎく的首飾り』への言及が見つかります。それが『マリアンヌの夢』(*Marianne Dreams*)という物語です。これは1957年に書かれ、しかも家庭小説というよりはファンタジーのジャンルの中で語られているもので、10歳の誕生日を迎えたときに何か分からない病気のために寝たきりになってしまったマリアンヌという少女が主人公です。そして彼女が、実は病気の少女というのはそんなに心が美しくて周りの人に感化を与える、天使のような存在ではなく、退屈や抑圧、苦しさなどから非常に意地悪なことも考えてしまう、心の闇を持っていることに気が付く、という非常に現代的なテーマを持つ作品です。

面白いことに、この病気で寝たきりになったマリアンヌの本棚には—それは母親が読んでいたのかも知れませんが—一手に取る気になれない本が何冊か並んでおり、そこにしっかり『ひなぎく的首飾り』が置かれているのです。これは『ひなぎく的首飾り』の中身を知っている人に対しては、明らかに大きな意味を持っています。『マリアンヌの夢』は、『ひなぎく的首飾り』に出てくる寝たきりの少女のマーガレットの心の美しさに対して、マリアンヌが自分はどうしてそうなれないんだろう、自分の中に自分でも気が付かなかったいやな部分がある、ということを認めざるを得ないという、子どもの心の闇から生じるファンタジーを描いた点で大きく評価されているのですが、そこにも『ひなぎく的首飾り』への言及があるというのは大変面白いことだと思います。

英米における展開の違い—アメリカの場合

このように家庭小説は『ひなぎく的首飾り』から始まり、『若草物語』や『宝さがしの子どもたち』といったような形で展開していくのですが、この後には英米に大きな差が生じていきます。家庭小説というのは、イギリスよりもむしろアメリカのほうに受け継がれ、そして大きな発展を見ていくことになるからです。

『若草物語』はもちろんなのですが、そのあとスーザン・クーリッジ (Susan Coolidge) が、『ケティーがしたこと』(*What Ketty did*)という本を書

いております。これは『ケティー物語』とか『素敵なケティー』というような題名でダイジェストの翻訳を今でも買うことができますし、図書館などにも並んでいるものと思われまます。この『ケティー物語』というのは、父親がお医者さんで、母親がいない家庭という点で『ひなぎく的首飾り』と似ているのですが、この長女のケティーは大変ないたずらっ子のおてんば娘で、そのいたずらとおてんばのせいでブランコから落ちて大怪我をして寝込み、半身不随になってしまいます。そして4年の間苦しみのベッドの中で悩んで、後に生まれ変わったように女らしい女の子に変身します。この物語の中にも『ひなぎく的首飾り』の片鱗を見て取ることができます。

スーザン・クーリッジはアメリカの作家ですが、『ひなぎく的首飾り』は英米ともに広く読まれた作品ですので、明らかにここにはつながりがあると考えられます。さらにこの『ケティー物語』は続編がありまして、学校へ行くケティーという形で学校生活が描かれる2作目があります。これはケティーが寄宿制の女子学校に入学しますので学校物語の女性版—19世紀の終わりから20世紀の始め、パブリック・スクールが専ら男の子だけのものだった時代とは違って女性にも教育の機会が開かれてから、女の子のための学校物語というのが花開いていくのですが—その中の一つと考えられます。そしてこの辺りに生まれた女の子の学校物語で今でも読まれているのが『あしながおじさん』です。これは本当に最初に大学教育を受けたアメリカの女性の物語です。

そしてアメリカの系譜はさらにケイト・D・ウィギン (Kate Douglas Smith Wiggin) に引き継がれていまして、この人の書いたものには『少女レベッカ』(*Rebecca of Sunnybrook Farm*) それから『クリスマス天使』(*The Birds' Christmas Carol*) などといった作品があります。『少女レベッカ』というのは子だくさんの家からレベッカという子が一人叔母さんの家に引き取られてそこで暮らすという物語ですし、『クリスマス天使』というのは、今でも抄訳がおそらく古い図書館の隅にあるかと思うのですが、愛読された「寝たきり少女の物語」で—この病弱少女の系譜というのはずっと続いて

いるのです。クリスマス之夜に生まれてキャロルという名を付けられた女の子の物語です。

こうした物語が続いた後、今でも読まれているものとして、これはカナダのものになりますが、モンゴメリ (Lucy Maud Montgomery) の『赤毛のアン』(Anne of Green Gables) が登場してきます。1908年のことです。この『赤毛のアン』は家庭小説の系統を受け継ぎながらも、孤児を主人公とすることで、理想の家庭を外からの目で見、その中に入っていかうとする、逆の視点を持っています。今までの家庭小説というのは家庭の中に生まれた女の子がいかにかその家庭を作っていくのにふさわしい女の子に成長するかという物語、またはそこから出ていくかという物語だったのですが、『赤毛のアン』は引き取られたときから、その家の中に何とか入って行こうとして、女の子らしい女の子になろうとして苦労を重ねていきます。そして『赤毛のアン』の中には、やはり昔ながらの家庭小説の中の決まりごとというものを転覆させるような様々な要素が詰まっているのですけれども、それは後ほどお話しようと思います。

次にもう一人、エレナ・ポーター (Eleanor Hodgman Porter) という人が『少女ポリアンナ』(Pollyanna) —もしくは『パレアナ』という題名でも知られています— を書いています。これは何でもプラス思考に考えようという主人公の物語で、テレビでアニメーションでも有名になりました『愛少女ポリアンナ』ですが、これもまた、『ひなぎく的首飾り』からの家庭小説の系譜につながっていくものとして数えられると思います。

英米における展開の違い—イギリスの場合

アメリカではこのように多彩な展開を見せた家庭小説ですが、イギリスではあまりぱっとしなかったというのが現実です。もちろんシャーロット・ヤングよりも前からジェーン・オースティン (Jane Austen) が家庭の物語を書いておりましたし、そのような伝統が確かにあったにはあったのですが、シャーロット・ヤングの後には19世紀にメアリー・ルイーザ・モールズワース (Mary Louisa Molesworth) が登場してきました。いろいろな意味でイーディス・ネズビットの先駆者と呼

べるような人ですが、ファンタジー、リアリズムの両方に活躍しております。この人が書いた『ニンジン』(Carrots) という物語は残念ながら翻訳がないのですが、6人きょうだいの末っ子のフェビアンという男の子が子ども部屋にいる4つ年上のお姉さんのフロスといっしょにいろいろと日常生活を送る様を描いているものです。この物語を見ますとイギリスでなぜ父親・母親の影が薄かったか、そして父親・母親含めた上での家庭小説というのが発展しなかったかということの理由も分かります。

イギリスの中流家庭にはナーサリーという部屋があり、ここで子どもたちは朝起きてから食事、そして勉強、遊び、そして寝るまで全ての時間を過ごしました。そして子どもたちの世話をするのがナニーと呼ばれる乳母で、もう少し大きくなれば勉強も教えるナーサリーガバネス、そしてもう少し大きくなるとガバネス (いずれも家庭教師) というように、子どもたちは使用人、世話をしてくれる女性と共に時を過ごしていました。遊ぶ相手は自分の兄弟で、外に出てよその子どもたちと遊ぶことを禁止されていることが多かったようで、これはベアトリクス・ポターの伝記を読んでも分かります。そして父親や母親が子どもたちにどういう関わりを持っていたかと言いますと、ほとんど持っていませんでした。子どもたちが父親母親に出会えるのは日に一度だけ、大人の食卓でご飯を食べている間、デザートのとときに乳母が子どもたちの顔を洗ってドレスを着せて、さあお父さんお母さんに御挨拶に行きましょうと下に連れて降りていく、その時だけだった、というようなことがモールズワースの日記にも書かれています。こうして食事のときも寝るときも、全て子どもたちは両親とは離れたところで生活しておりましたので、一番近い大人はやはり乳母、ナニーということであったわけですね。『メアリー・ポピンズ』(Mary Poppins) などはこのナニーの系譜に当たります。また、例えば『不思議の国のアリス』(Alice's Adventures in Wonderland) でアリスが見知らぬ不思議な国にさまよい出て、家のことを思い出そうとしても猫のことしか思い出さない、お母さんのところに帰りたいたいはひとことも言わな

い、というのもそんなところから来ていると考えられます。『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-glass and What Alice Found There*) になっても、やはりアリスが思い出すのは乳母と猫のことだけです。ネズビットの時代に至っても家庭小説の中では父親・母親の影は非常に薄く、兄弟姉妹の間での遊びというのが事細かに描かれています。

こういった形でイギリスでは父母不在の兄弟姉妹だけの物語というのがモールズワース、ネズビットの辺りで発展していきますが、その後20世紀に入ってから、例えばノエル・ストレフィールドのような人が家族全て、牧師の父親とその伴侶の母親、そして貧しいながらも二人のもとで暮らしている子どもたち、というような形の家庭物語を書いていくこととなります。ノエル・ストレフィールドの作品はもう絶版になってしまいましたが、翻訳はかなり出ており、その中でも『ヴィクトリアの青春』(*Vicarage Daughters*) は牧師館に生まれた子どもたちの20世紀の生活がよく分かる家庭小説になっております。彼女はさらに、才能のある少年少女がその才能を伸ばして、バレリーナになるとかピアニストになるとか、といった将来を目指すために経済的な問題をどうするか、ということ非常に現実的に解決していくキャリア小説というジャンルを開いた人でもあります。

このようなアメリカ、イギリスの家庭小説の展開の差は、やはり両国の家庭の在り方というものの違いにあったと思われます。階級社会であったイギリスでは中流階級であることを証明するためには必ずナニーや使用人、メイドを雇わなければ体面が保てず、子育てを自分ですするというのは中流階級の女性としてはふさわしくないという規律がありましたが、それに対してアメリカは階級制がない自由な社会というのを標榜し、家庭の中でも平等、自由を非常に強調しています。そして女の子の行動の自由度もイギリスに比べてアメリカのほうがより強調されていたという事情があります。もちろんアメリカでも一旦15歳を過ぎ、髪の毛を上げて長いスカートをはくようになると『若草物語』のジョーのように窮屈な思いをさせられてうんざりするおてんば娘がたくさんいたわけで

すが、この当時アメリカを旅行したイギリス人は、アメリカの女の子のあまりにも奔放な様子に驚いたというような手記を残しております。そして、アメリカはさらにイギリスへの対抗心から自由ということをさらに強調します。

『若草物語』の中でこんなエピソードがあるのを覚えていらっしゃるでしょうか。ローレンス家のローリーのところにイギリス人のきょうだいがお客に来て、マーチ家の姉妹たちとピクニックに出かけるという場面です。そこでイギリス人の女の子のケイトがメグに向かって絵を習うことを勧めて「あなたも家庭教師にたのんでそうすったら？」と言いますと、メグは「家庭教師なんていませんのよ」と答えます。するとイギリス人のケイトは「そうでしたわね。アメリカではお嬢さんがたは、わたくしたちとちがって、学校へいらっしゃるのよね」。ところが、メグはまた「いえ、どこにも。自分が家庭教師ですもの」と答えます。すると、ケイトはいっぺんに見下げたような態度をとり、「ああ、そうでしたの！」という感じになるのですが、そこに助け舟を出したローリーの家庭教師のジョン・ブルック氏が「アメリカの若いご婦人がたはご先祖とおなじ、独立が好きですからね。自分で身を立てることがりっぱだとされて尊敬されてるんです。」と説き聞かせています。

アメリカ人の少女の自由さと自立心、独立心、そしてイギリス人のカチカチの階級制度というのがアメリカ人のオールコットという作者の目から皮肉な形で批判されている、そんなエピソードになっています。

モチーフの広がり—おてんばな女の子

次は家庭小説の中にずっと続いているモチーフの系譜、広がり、そして逆転などといった問題を見ていきたいと思えます。

家庭物語の中では必ずおてんばな女の子というのが登場します。『ひなぎく的首飾り』からはエセルという主人公の女の子が、不器用で部屋の中をどたばた走り回って先生に怒られるというような女らしくない女の子として登場します。このエセルというのは本名がエセルレッド (*Ethelred*) で、実はエセルレッドという王様がイギリスにお

りまして、これは男の子にも使える名前であることから、ある意味中性的な名前とも言えると思います。エセルは着るものに無頓着ですし、おしゃれにも無関心、そして本が大好きで、本を読み過ぎて弟のオーブリーをもう少しで死なせてしまうという事件も起こしています。そして女だてらに自分でギリシャ語やラテン語の勉強をし、兄のノーマンと張り合います。実はノーマンよりはギリシャ語やラテン語が得意なのですが、この競争を姉のマーガレットに厳しくたしなめられ、そして「あなたはそろそろギリシャ語やラテン語に夢中になるのではなくて、家事や家のこと、そういうようなことに身を入れなければいけません」¹とと言われて、この学問への憧れの気持ちを教会と学校建設という、女性にもできるような社会貢献へと向けていくのに一生懸命になります。けれどもエセルはやはりニュージーランドに宣教師として行くお兄さんのノーマンに、うらやましくてしょうがないという気持ちを表現しております。

こういったおてんばで男勝りの女の子というモチーフは『若草物語』の中ではジョーに受け継がれていますが、この子はジョセフィンという古めかしい女らしい名前をジョーという男の子のような愛称に替えて使っており、やはりエセルのように不器用、衝動的でかんしゃもち、そして着る物には無頓着と、非常によく似ています。おしゃれには全く無関心ですし、エセルと同じように、彼女の場合は本を書くのに夢中になって妹を死なせそうになってしまうという事件を起こしています。例えば妹のベスをそれと知っていて、危険な病気の流行っている貧しい人の家に行かせてしまったり、氷の張った川の上でエミーを見捨てて、もう少しで溺れ死にさせそうになってしまったりする、これらは全て彼女の本を書くという情熱の末の事件でした。そしてジョーはいたく反省して女らしくなろうと努め、頑張るのですけれども失敗する、というところが話の面白さになっています。どうやったらこんなに下手に作れるのかと思うぐらい料理は下手ですし、男の子になりたいというその気持ちはずっと強く続き、やがて彼女

は続編の中でその気持ちを男の子の学校を経営するという方向に向けていくことになります。

さらに『ケティー物語』(または『素敵なケティー』)ではこのケティーという一番上の少女がおてんばです。母親のいない医者で娘で、おてんばでいたずらで無頓着で、服を破く、言いつけを破る、やりたい放題の明るい女の子なのですが、乗ってはいけないと言われた壊れたブランコに乗って落ち、そして4年間寝たきりになり、すっかり力を失ってしまいます。この間やはり下半身不随で車椅子に乗っているヘレンという美德の鑑のような親戚の女性をロールモデルとして、ベッドの中の天使のように振舞うことを覚えていき、この苦しみという学校の中で清められて、もう男の子になりたいとは言わず、この怪我のお陰で立派な少女として成長していくことになります。

さらに『赤毛のアン』の中で、もちろんアンは桁外れにおてんばで型破りな女の子なのですが、さらに面白いのは、アンが実はもともと男の子が欲しかった家に間違っやってきた女の子であり、男の子であることを期待されていた少女だったということです。この子は赤毛でそばかすでやせっぽちで、女の子らしい特徴は何一つ備えておらず、しかも女の子らしさの象徴であるピンクという色が決して似合わないというのを生涯のコンプレックスだと思っています。他のおてんばの女の子たちと大きく違うのは、このおてんばさを何とかして抑えたい、いたずらはせず、とても女らしい女になりたいと希求しているところで、お嫁さん願望というのが非常に強いのです。家庭の中の愛されるかわいらしい女の子になりたいというのがアン強い願いです。けれどもこのアンも、今まで自分が読んできた本の中に出てくるような崇高な目的のために髪の毛を売る少女にはなれないという自覚があります。これは密かに『若草物語』のジョーがお父さんのために髪の毛を売るエピソードを指しているのではないかと思われますが、アンが髪の毛を切るのは皆さんも御存じのとおり、偽の毛染めを使って緑色に髪の毛が染まってしまったためで、虚栄心の果ての事件でした。さらにアンはベッドの中の天使、寝たきりの天使にもなれないということも自覚しています。彼女

1 川端講師による仮訳

がくるぶしを怪我して寝付いたとき、ベッドに寝たきりになるというのはそんなにすばらしい経験ではないということを身をもって自覚するわけです。

さらに『鉄道きょうだい』の中でもいたずらでおてんばな女の子というのが登場してきます。これは長女のポビーという女の子で本名がロバータというのですが、ポビーという愛称で呼ばれています。これはロバートという男名前の愛称でもありますので、ポビーというのは男の子でも女の子でも使える名前ということになっています。このポビーは長女としてお母さんの代わりになろうとするしっかり者のお姉さんなのですが、その夢がちよっと変わっていて、機関手になりたい、つまり汽車の運転手になりたいという望みを持っており、非常に器用で機械を直すことなどがとても得意なのです。この勇敢でリーダー的な役割を担うお姉さんのポビーは、あるとき、鉄道事故を未然に防ぐために汽車に警告しようとして、自分のはいていたペチコートを破ってそれを赤い旗にして振り、英雄的な目的を遂げますが、実はこの赤いペチコートというのは女らしさの印でもあり、そして女の子が、暖かいから、身だしなみのために、として強制的に身に付けさせられていた非常に窮屈な枷でもあったわけです。

このようにおてんば少女の系譜というものを見ていきますと、それぞれに個性はありますが、家庭小説の中では重要な役割を果たしている縦糸であると考えられることができます。

モチーフの広がり—男女逆転の双子

さらに次に挙げましたのが、男女の役割を逆転したような双子、または年の近い兄弟、というものです。これは『ひなぎく的首飾り』中のトムとメアリ、そして『宝さがしの子どもたち』におけるノエルとアリスのように、非常によく似た年頃でありながら、まるで男の子のような女の子と、女の子のような男の子のペアで、家庭内での男女のジェンダーの役割というのが生まれついでのもではなくて、社会的に刷り込まれていくものだというを示す生きた証拠になるかと思えます。このような例は現代の小説にもいくつも見付けられると思えます。

モチーフの広がり—ベッドの中の天使

今までにも何度も言及いたしましたが、ベッドの中の天使、病弱少女の系譜というのは、明らかに大きな糸となって家庭小説の中を流れております。『ひなぎく的首飾り』のマーガレットは冒頭の事故で寝たきりになったまま家庭内では全く力を持たない、肉体的な力を持たない、非力であるということで、逆に精神的に優位な立場にあります。そしてその家族の精神的な導き手となり、暮らしていくのですが、恋人の死が伝えられるとその痛手のあまりだんだんに体が弱って消えるように死んでいってしまいます。「家庭の天使」というのは19世紀のイギリスの中流家庭の女性の理想像でしたが、家庭の天使を本当に実行し、徹底的に演じると本物の天使、天国の天使になってしまうという恰好の例かと思われます。

同じように『若草物語』のベス、三女のおとなしいかわいい女の子は、無欲で自分のことは何も望まない、内向的な女の子として登場してきますが、姉妹皆が嫌がった貧しい家庭への訪問に行つて、子どもの病気が移り、しょう紅熱で死にかけられるほどの大病をします。このベスは常にすぐ上のおてんば少女のジョーをなだめ和らげる役割を果たしています。そしてそんなにおとなしいにも関わらず、彼女が病気になったとき、実は非常に多くの人に愛されていた、ということが分かります。ベスは1冊目の最後で病気が一旦は回復するのですけれども、続編の中頃では消えるように亡くなってしまいます。そしてこのジョーとベスがちょうどペアになっていた、ということは、このベスの死後、ベスの精神的な面をまるで内面化したかのようにジョーがおてんばさをなくして、だんだんおとなしくなっていく、というようなことにも反映されているようです。

さらに『ケティー物語』の中に登場してくるヘレンという女性は、ケティーの親戚で、寝たきりの自己犠牲の魂のような心の美しい女性でケティーのロールモデルとなり、怪我をしたケティーの苦しみの学校というのを教えてくれる人です。これはケティーという主人公が改心し女らしくなることの契機として登場してくる人物です。

ところが『宝さがしの子どもたち』の長女のドー

ラ、これはこのベッドの中の天使になりたいと密かに憧れているのですけれども、これになることはどうしてもできません。実はドーラは溝で宝探しをしていたところ、缶のかけらで足を切って大きな怪我をしてしまって、寝たきりになるというような事件が起こりそうになるのですけれども、常に男兄弟の茶々が入って天使になることは遂げられないままです。また赤毛のアンをほろを見てみると、このアンも大怪我をするという事件が起こっております。しかしその大怪我というのは大変馬鹿げた理由からでして、屋根の上を歩いてみる、とけしかけられて、つついちゃってしまったり落ちて足をくじき、寝たきりになるという非常に恥ずかしい話になっております。しかもアンはその経験をしながら寝たきりなんてちっともロマンチックじゃないし、痛いし、寝ているのはつまらないし、本の中のヒロインの経験とは全然違うということ、身をもって経験してしまいます。一方この事故は、人々の友情やマリラの自分への愛情を確かめるきっかけにはなったようです。

また、アンの子供の友人の中にルビーという女の子がいて、これが金髪碧眼の絵に描いたような美女なのですが、このルビーが3冊目で肺結核にかかって早死にしてしまうというシーンがあります。もしこれが一昔前の小説であれば、涙をそそるような美人早世の物語となったのでしょうけれども、このルビーは死ぬのはいやだ、と言ってアンに訴えるのです。ルビーは美人だけれども全く天使ではありません。世俗的な魅力にあふれ、世俗的な享楽を求め、恋人と楽しく過ごすのが一番好きだったルビーは現世に執着し、死ぬのはいや、いやと言いつつ、もっと生きていたいと泣きながら結核で死んでいくことになっていきます。これはある意味でマーガレットやベスのような、美しく死んでいく少女の主人公達へのアンチテーゼとなっていたのかもしれない。

さらに、先ほど『ひなぎく的首飾り』を最後に言及している現代の児童文学として挙げました『マリアンヌの夢』では、先ほどもお話したとおり、寝たきりになったマリアンヌはいらいらし、追い詰められ、いかに自分はいやな子か、忍耐も辛抱もなく本当にいやな面を持っているか、退屈がい

かに辛いかと言うことを思い知らされてしまいます。マリアンヌにとってもこの病気の経験は成長の一段階となるのではありますけれども、これは彼女が自ら心の中の闇に直面する、という意味に変換されているわけです。

こういったように子どもの病気というのは、家庭小説の中において様々な意味を持って描かれて、そしてその意味も時代によって変わってくるということが分かるかと思えます。

モチーフの展開—将来の夢と現実

そしてその少女達が成長して、将来の夢と現実ということなのですが、『ひなぎく的首飾り』のエセルは男の子に負けられないような勉強とか、海外に行って宣教師になるというような大きな夢を諦め、そのアスピレーション、大望を貧しい子どもたちの宗教教育に身をささげるといふ手近なところで、範囲を狭めた形で深化させていきます。さらに『若草物語』のジョーは小説家になりたいという熱い思いを抱きながら、小説家の卵にはなるのですけれども、その小説の中身をベアー先生という年上の教授にとがめられ、子どもの教育に献身する教師へと転身していきます。同じ『若草物語』の中で、メグという美しい長女は、初めのうちは玉の輿願望が非常に強く、お嫁さん願望が強かったのですが、実は貧しくとも愛してくれる誠実な青年と結婚するというのが一番幸せであるといった、地に着いた幸せを選び取っていきます。おてんば少女達であったケティーやアンやボビーもそれぞれに女らしい女性へと成長していくことになっていきます。そして先ほどのベッドの中の天使は全て天国の天使へと消えていくことになっていきます。

モチーフの展開—女の子の夢の行く末

家庭小説の中には「早く生まれ過ぎたヒロイン」というようなものも何人か登場しています。

例えば『ひなぎく的首飾り』の中では、今まであまり触れてきませんでした。一番美しいフローラという女の子は社交的な手腕に大変優れており、仕切り屋で有能でプライドが高い、そして親の言うことを聞かず、自分の言いたいことを言い、自分のやりたいことをやるという、変わった、

この時代にしては非常に自立した女の子です。しかも自分の魅力というのを十分承知しておりまして、お金のためにジョージ・リバーズという地方の名士と結婚しますが、その夫をすっかり尻の下に敷いてしまい、夫が政治に乗り出して立候補しますと、その選挙活動を一手に引き受けて奔走します。そして成功を取めるのですが家事のほうがおろそかになり、たった一人の赤ちゃんを乳母に任せたま政治活動に身を投じたために、悲劇が起こります。乳母が赤ん坊の夜泣きに薬を飲ませるのですが—19世紀の初め頃、赤ちゃんの夜泣きの薬にはアヘンが含まれていた、というのは今では明らかになっている事実なのですが—その薬に入っていたアヘンのためにフローラのたった一人の娘は亡くなってしまいます。これが出過ぎたまねをした女性への罰、というような形で『ひなぎく的首飾り』には描かれているのです。フローラがもしも21世紀の現代に生まれていれば、さぞかし有能で立派な女性として描かれたのではないかと、思われるところです。

さらに『若草物語』の中では、エミーは自分の魅力を十分に知っていて、そしてそれを使うのに躊躇しない、世渡り上手な末っ子です。そして続編の中で、姉妹の中で一人だけヨーロッパに連れて行ってあげるというマーチ叔母さんの申し出に、ちゃっかりと叔母さんの意に沿うところを見せて、ヨーロッパ行きを獲得してしまいます。これにはもちろんジョーががっかりしてしまうわけですが、ヨーロッパに行ったエミーは、自分の絵の才能というのが大したものではないと諦め、自分の才能を有効な範囲で、自分の有利なように使う、つまりファッションセンスが非常に優れているという点をいかして自分を飾るところに力を入れ、見事に玉の輿を射止めるという、そのような女の子になっております。若草物語に登場する四人の姉妹の中では一番現代っ子である、という印象を受けます。

家庭小説の現在

このように家庭小説は時代が変わるにつれ、家庭の変化・推移につれ、形が変わっていきますし、もはや家庭だけを描いて児童文学になるという時

代でもなくなってきました。家庭と学校とは両方が子どもたちの生活の場となりますし、子どもたちは男の子も女の子も一緒に学校に通い、そして近所の子もたちと交流を持ち、19世紀のイギリスの家庭小説のような閉ざされた世界ではなくなっています。また20世紀後半、21世紀のほうに目を転じてみますと、家庭というものの大きな変貌には、やはり強く印象を受けます。

最後に、家庭小説の現在ということで話を締めくくりたいと思うのですが、両親の離婚という問題を初めて描いた児童文学というのはドイツのエーリッヒ・ケストナーの『ふたりのロッテ』(*Das doppelte Lottchen*)で、これは第二次世界大戦中に書かれたものでした。これが発表されたときに、ケストナーは離婚の物語を児童文学に描くなんて、ということで非難を受けたのですが、両親の離婚によって一番大きな影響を受けるのは子どもたち自身ではないか、それを子どもの本の中で書いてどろが悪い、というように彼は反論したと言われています。

ところが現在では、家族の概念が多様化し、離婚も全然珍しいものではなくなりましたし、核家族という概念も崩壊しつつあります。現代ではシングル・ペアレントであるとか、離婚した親がそれぞれの連れ子を連れて家族になるというようなスクラップ・ファミリーもたくさん存在します。また家庭が避難の場所や安全や保護の場所ではなく、暴力の場になるという事例も登場してきます。そしてこの家族、家庭というものを新たな人間関係を結び直す場所として捉えるような現代の家庭小説も現れてきています。

本当に多くの例がある中で、一つだけを紹介するにとどまるのですが、今、20世紀から21世紀のイギリスの子どもたちの間で一番人気の作家にジャクリン・ウィルソン (Jacqueline Wilson) という人がいます。この人の作品はほとんどが日本でも翻訳されており、御存じの方は多いとは思いますが、その中で『バイバイわたしのうち』という1992年の作品を紹介したいと思います。これもレジュメの一番最後のところに家系図を書いておきました。(図4)

この『バイバイわたしのおうち』は原題を *The Suitcase Kid* といって、スーツケースを持った子どもというような題名なのですが、主人公はアンディという女の子です。アンディのパパとママは離婚して、それぞれのパートナーと一緒に暮らしており、そのパートナーは前の結婚でできた子どもたちを連れてきます。アンディはママかパパかどちらと暮らすかという選択を迫られるのですが、アンディはどちらを選ぶのも嫌だと考えています。アンディの望みはマルベリーの木があったもとのおうちで、もとのようにパパとママと一緒に三人で暮らしたいということなのです。アンディがとても大事にしているのは「シルバニアファミリー」のウサギのラディッシュという人形です。「シルバニアファミリー」は皆さん御存じかと思いますが、動物の人形で、しかも家族を構成しているというもので、このウサギを大事に大事にしているアンディが家族、一昔前の理想の家族に非常に執着しているということが、これから分かります。そして庭にあったマルベリーの木、これは桑の木のような植物で食べられる実がなるのですが、このマルベリーの実を入れてママが焼いた丸いパイを三人で食べるという家族の生活に、アンディは執着して離れられません。というわけで、アンディはパパもママもどちらかを選ぶことができず、一方に一週間、一方に一週間とスーツケースを持ちながら、移動して暮らすこととなります。そしてスーツケースキッドとして根無し草のように一週間はお父さんの家で、一週間はお母さんの家というふうに暮らしていくことになるのですが、父が二人、母が二人、そしてきょうだいは一遍に五人もできたにも関わらず、アンディの孤独は続きます。レジュメの図4のように、アンディのお父さんが再婚して、その再婚相手のキャシーにはゼンとクリスタルという子どもがおり、さらにこのキャシーはお父さんの子どもを妊娠中です。そしてお母さんのほうはボブという男性と再婚してここにはポーラ、グレアム、ケイティという三人の兄弟がいます。どの兄弟ともアンディはうまくやっていくことができないのです。

この物語ではアンディが熱を出して寝込む一寝

たきりになるわけではないのですが一という事件が起こるのですが、この事件は『ふたりのロッテ』の場合のように、両親を再び結び付けるような絆にはなりません。それどころか父の連れ合いのキャシーは何だかよく分からないまずいゼリーを作って食べさせてくれるし、実のお母さんのほうはこんなところには置いておけないと言って自分の家に引きずって行きそうになるし、絆の切れ目はさらに深くなるばかりです。

この「所属するところのない少女」はだんだんに学校の成績も下がり、先生達も心配するようになり、いろいろと困ったことが起こっていくのですが、このアンディに居場所を与えるのは、この家族ではなく、見ず知らずの、子どもたちが独立して二人で暮らしている年金生活者の老夫妻でした。家族とは全く関係のないこの老夫妻の家で何とか自分の居場所というものを見出したアンディは、兄弟たちとも新しく関係を取り結ぶことができるようになり、さらにこのゼンとクリスタルの妹になる女の子に、最初は一番嫌いだからエセルという名前を付けようと思ったのですが、やはり考え直して、自分の一番好きなゾーエという名前を付けようと思心するところで終わっています。

このように新しい家庭小説は、もう既に家庭が血縁で結ばれた関係でもなく、そして家庭というものが子どもにとって必ずしも安らぎの場ではなくなっている、その中で現代の子どもたちがどうやって生きていくかという、そんな問題を提示しようとしているように思われます。そしてこの『バイバイわたしのおうち』においては、アンディはそれほど女らしさや男らしさ、といった規範に縛られているようには見えません。けれどもジャクリーン・ウィルソンの作品の中には自分のセクシャル・アイデンティティに悩むゲイの少年を主人公にしたものもあり、新たな問題は様々に描かれつつあるといってよいと思います。

御清聴ありがとうございました。

(かわばた ありこ 日本女子大学家政学部児童学科教授、国立国会図書館客員調査員)

シャーロット・ヤング『ひなぎく的首飾り』（1856）から始まる系譜

「シャーロット・ヤング『ひなぎく的首飾り』（1856）から始まる系譜」

（本館）→国立国会図書館東京本館で所蔵

※→国立国会図書館東京本館にも所蔵

デジタル化図書（館内）→「国立国会図書館のデジタル化資料」でデジタル化資料を閲覧可能（館内限定）

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号	ジャンル	備考
1	The daisy chain, or Aspirations	Charlotte M. Yonge 作	Reprint trade hard-cover ed. Norilana Books, 2009	Y8-B12685		
2	若草物語	L. M. オールコット 作 矢川澄子 訳 T. チューダー 画	福音館書店 1985. 3	Y8-2433	家庭小説	
3	ケティー物語	クーリッジ 作 三木澄子 編著 武部本一郎 絵	偕成社 1973	Y7-3852	家庭小説	
4	クリスマスの天使	ケイト・ウィギン 原作 谷村まちこ 編訳	偕成社 1989. 12	Y8-7721	家庭小説	
5	宝さがしの子どもたち	E. ネズビット 作 吉田新一 訳 スーザン・アインツィヒ 画	福音館書店 1974	Y7-4179	家庭小説	
6	よい子連盟	イーディス・ネズビット 原作 酒井邦秀 訳	国土社 1978. 4	Y7-6651	家庭小説	
7	少女レベッカ	ウィギン 作 関七美文 文	ポプラ社 1979. 1	Y7-7182	家庭小説	
8	小公女	フランシス・ホジソン・バーネット 作 高樓方子 訳 エセル・フランクリン・ベッツ 画	福音館書店 2011. 9	Y9-N11-J287	学校小説	
9	鉄道きょうだい	E. ネズビット 著 中村妙子 訳	教文館 2011. 12	Y9-N12-J84	家庭小説	
10	赤毛のアン	ルーシー・モード・モンゴメリ 著 西田佳子 訳	西村書店 2006. 12	Y9-N07-H20	家庭小説	
11	秘密の花園	バーネット 著 グラハム・ラスト 絵 野沢佳織 訳	新装版 西村書店 2006. 12	Y9-N07-H38	家庭小説	
12	小さい公爵	シャーロット・マリー・ヤング 原作 蘆谷蘆村 著 村山知義 絵	婦人之友社 昭和5	児乙部30-A-1	歴史小説	デジタル化図書（館内）
13	少女ポリアンナ	エリナー・ポーター 作 谷口由美子 訳	岩波書店 2002. 12	Y7-N03-H36	家庭小説	
14	大きな森の小さな家	ローラ・インガルス・ワイルダー 作 ガス・ウィリアムズ 画 恩地三保子 訳	福音館書店 1972. 7 (56刷:1997. 9)	Y9-M98-155	家庭小説	
15	ファミリー・シューズ	ノエル・ストレットフィールド 著 中村妙子 訳	すぐ書房 1983. 9	Y8-1407	家庭小説	

16	マリアヌの夢	キャサリン・ストー 作 猪熊葉子 訳	富山房 1977. 1	Y7-5784	ファン タジー	
17	ビクトリアの青春	ノエル・ストレットフィールド 作 野々瀬協子, 新田由香子 訳	すぐ書房 2003. 7	Y9-N04-H38	家庭 小説	
18	丘の家のセーラ	ルース・エルウィン・ハリス 作 脇明子 訳	岩波書店 1990. 6	Y8-7469	家庭 小説	
19	バイバイわたしのうち	ジャクリーン・ウィルソン 作 ニック・シャラット 絵 小竹由美子 訳	偕成社 2000. 3	Y9-N00-41	家庭 小説	
20	イギリス女流児童文学作家の系譜. 2 (ひなぎくの首飾り)	ニュー・ファンタジーの会 [著]	透土社 1992. 4	KS74-E56 ※	研究書	
21	子どもの本の歴史 : 英語圏の児童文学. 上	J. R. タウンゼンド 著 高杉一郎 訳	岩波書店 1982. 1	KS74-207 ※	研究書	
22	子どもの本の歴史 : 英語圏の児童文学. 下	J. R. タウンゼンド 著 高杉一郎 訳	岩波書店 1982. 2	KS74-207 ※	研究書	
23	子どもの本の歴史 : 写真とイラストでたどる	ピーター・ハント 編 さくまゆみこ, 福本友美子, こだまともこ 訳	柏書房 2001. 10	KG411-G52 ※	研究書	
24	Little women	Louisa May Alcott 作 Jessie Willcox Smith, Frank T. Merrill 絵	2002 ed. Gramercy books 2002	Y8-B2301		
25	What Katy did : a story	Susan Coolidge 作	F. Warne [1891]	VZ1-267		
26	The story of the treasure seekers : being the adventures of the Bastable children in search of a fortune	E. Nesbit 作 Cecil Leslie 絵	Penguin Books 1994	Y8-A175		
27	The wouldbegoods : being the further adventures of the treasure seekers	E. Nesbit 作 Cecil Leslie 絵	Penguin Books 1995	Y8-A176		
28	A little princess : being the whole story of Sara Crewe now told for the first time	Frances Hodgson Burnett 作 Harold Piffard 絵	F. Warne 1905	162-211 (本館)		
29	The railway children	E. Nesbit 作	Post-War ed. Wells Gardner, Darton & Co. 1906	VZ1-793		
30	Anne of Green Gables	Lucy Maud Montgomery 作	Puffin Books 1994	Y8-A325		
31	The secret garden	Frances Hodgson Burnett 作 Charles Robinson 絵	D. Campbell c1993	Y8-A921		
32	Pollyanna	Eleanor H. Porter 作 Neil Reed 絵	Puffin Books 1994	Y8-A321		
33	Marianne dreams	Catherine Storr 作 Marjorie-Ann Watts 絵	Lutterworth 1984 c1958	Y8-A5821		

レジュメ

食から見る「ロビンソン変形譚」の系譜

水間 千恵

「ロビンソン変形譚」とは、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719)の影響を受けて創作された物語(群)を指す言葉です。具体的に言えば、無人島やそれに類する場所を舞台にしたサバイバルストーリーのことであり、そのような作品群全体に与えられた文学ジャンルとしての名前でもあります。このジャンルに属する作品はプロットや状況設定など共通点が多いため、相互比較を行うのに大変便利です。本講義では、そのようなジャンルの特性を利用し、物語に登場する「食」という共通要素に着目して様々な変形譚について考察しながら、児童文学の歴史をたどり子どもの本の主題や表現がどのように変化してきたかを確認します。

サバイバー①

持込食糧	ビスケット、米、チーズ、干し肉、砂糖、小麦、酒類など
食事内容	持込食糧 → ヤギの肉 → 鳥の肉 → 魚 → ウミガメの肉と卵 → ブドウ、レモン、ライム

サバイバー②

持込食糧	干し肉、乾パン、家禽(ニワトリ・アヒル・ガチョウ・ハト)、チーズ、バター、ハム、穀類、とうもろこし、家畜(牝牛・ヤギ・ヒツジ・ブタ)など
食事内容	乾パン、干し肉のスープ、カキ → 海ザリガニ → ヤシの実 → サトウキビ → 魚の串焼き、鷺鳥の丸焼き、干し肉スープ、チーズ、ヤシの実 → 乾パン、バター → ハム、チーズ、乾パン、卵料理(カメの卵+バター)、シャンパン → 乾パン、ミルク

サバイバー③

持込食糧	なし
食事内容	ヤシの実 → カキ → パンの実 → 魚 → ヤムイモ、タロイモ、プラム、サトウキビ、ヤマバト、豚の丸焼き

サバイバー④

持込食糧	乾パン、缶詰類、ハム、肉入りクラッカー、コンビーフ、塩漬け食品、蒸し煮肉など(「けちけちして食べたところで、二か月以上はもたない」、酒類など)
食事内容	乾パン、コンビーフ、貝(ムールガイ、ハマグリ、カキ) → 鳥(イワバト、ガン、カモ、ミヤコドリ等々) → 魚(メルルーサ、イナンガ) → ウミガメ

サバイバー⑤

持込食糧	パン、バター、砂糖、ビスケット、缶詰類、卵、お茶、ライスプディング、シードケーキ、りんご、じゃがいも、ミートパイ、フォース（味付け肉）、グリーンピース、チョコレートビスケットなど
食事内容	スクランブルエッグ、バター付きパン、ミルクティー、ライスプディング、シードケーキ、りんご → 朝食（内容不明） → ゆでじゃがいも、ミートパイ、ビスケット、りんご → 朝食（内容不明） → パーチのバターソテー

サバイバー⑥

持込食糧	なし
食事内容	果実 → 豚肉

サバイバー⑦

持込食糧	なし
食事内容	カモメの卵、小魚、草の実 → 貝（アワビ・ムラサキガイなど）、魚（スズキなど） → 草の実の粥

サバイバー⑧

持込食糧	米、パン、メリケン粉、ビスケットなど（約3か月分）
食事内容	持込食糧、魚 → レモンの汁をかけた魚

サバイバー⑨

持込食糧	チョコレート、ビスケット
食事内容	ランゴスタ（エビの一種・ハサミがない） → コバンアジ、エビ、貝（ムラサキガイ、ウニ）、浜辺ブドウの葉 → ヤシの実

サバイバー⑩

持込食糧	なし
食事内容	サンザシに似た木の実 → ユリ根 → イガイ → マングイル（野生のネギ） → カモメの卵 → 野バラの実 → 正体不明の植物（ハナウド） → イガイとユリ根のスープ → 野バラのお茶 → 海藻（コンブ） → キノコのスープ → 小エビ、アカニシ貝、ナマコ

サバイバー⑪

持込食糧	おにぎり、ウインナーソーセージ
食事内容	おにぎり、ソーセージ → 貝（カキ、ベッコウザラ）、クロダイ → イサキ、貝（カキ、トコブシ） → 貝（アサリ、アカニシ） → アシタバ → メジナ、イカ、シロギス → 板サンガ（魚、アシタバ、カキをまぜて焼く） → トビウオ（焼く&スープ） → カニ、カキ、ウニ等々 → タコ → 貝のスープ → カレイ → セラマサ

サバイバー⑫

持込食糧	なし
食事内容	魚の切り身、バナナ → 果実（ランブータン） → 燻製の魚、バナナ、ヤシの実、野生のイチゴ、パンの実、ドリアン → 果物のジュース・魚のスープ

食から見る

「ロビンソン変形譚」の系譜

水間 千恵



はじめに

水間と申します。よろしくお願ひいたします。今日はロビンソン変形譚に関して語らせていただきます。まず、ロビンソン変形譚とは何ぞやということなのですが、レジュメにも少し説明を書き加えておきましたけれども、ダニエル・デフォー(Daniel Defoe)のいわゆる『ロビンソン・クルーソー』(*Robinson Crusoe*)という作品の影響を受けて創作された物語、あるいはその物語群を指す言葉です。より具体的に言いますと、無人島やそれに類する場所を舞台にしたサバイバルストーリー、もしくは、そのような作品群全体に与えられた文学ジャンルとしての名前ということになるかと思ひます。

最初の作品であるデフォーの『ロビンソン・クルーソー』は、出版後の非常に早い段階から、先ほどの(川端先生の)話にも出てきましたチャップブックなどにもなりまして、子どもたちにも受容されていきました。日本でも、明治期以降の非常に早い時期から現在に至るまで、子ども向けのバージョンが途切れることなく翻訳出版され続けています。例えば、資料リストの17番に挙がっている巖谷小波の翻訳などは比較的初期のもので、つまり、そもそも大人向けに出版された小説ではあるのですが、今ではもう子ども向けの本棚の方に確固たる位置を占める作品、というふうに言ってよいかと思ひます。ですが、今どきの大学生に聞きますと、おそらく10人に1人しか読んでいないというのが現実のところかもしれません。先日、大学院の授業で聞いてみますと、5人のうち読んでいたのは2人でした。つまり3人は読んでいない。そういうような現実もあります。最近の子ども向けの改訳版には、内容を分かりやすく

するためにイラスト入りの注釈をつけたものなども登場しています。それが資料リストの19番に入っておりますが、全て絵で説明するような形になっていますので、分かりやすい本です。

実は、ロビンソン・クルーソーという人物を主人公にしたデフォーの作品は3冊あるのです。ただ、日本で知られているのは1作目のみです。第3部などは、現在本国イギリスでも読まれることがほとんどなくて、世界的に見ても、読むのはたぶん研究者だけだろうと言われていひます。日本は、岩波文庫版の下巻の方に第2部が入っているから読めますから、非常にラッキーな国でもあります。ただし、一般的には今申し上げたとおり、『ロビンソン・クルーソー』という名前と言われた場合、1719年に出版された第1部の内容のことを指す、というふうに思ってくださいではないかと思ひます。特に、孤島に漂着した主人公がいろいろ苦勞しながら、最後は生き延びていくという筋がロビンソン変形譚といわれる後の物語群にも受け継がれることとなります。もちろん、バリエーションはいろいろです。例えば、サバイバーは一人とは限りませんし、描かれる人間も様々です。つまり、非常に幸運なことに友人や家族がまとめて島にたどり着く作品もあれば、全く見ず知らずの人との共同生活を描いた作品もあるわけで、恋が生まれることもあれば、殺し合いになることもあります。もちろん舞台についても、海に浮かぶ無人島だけでなく、荒野とか氷原といったものもあり得ます。また、宇宙ステーション、人類が絶滅した近未来、異世界と、いろいろと舞台は広がっていくことと思ひます。最初の『ロビンソン・クルーソー』の出版から300年近く経っているのですが、この間にデフォー自

身はたぶん想像もしていなかったであろう、宇宙や核戦争後の世界を舞台にした変形譚までもが誕生してきたというその背景には、科学技術の発展や大国間の軋轢といった外的要因が大きく影響を及ぼしているということはお分かりになると思います。この例からも分かるとおり、ロビンソン変形譚の変化を追うと、実は社会や文化の変化の一端が見えてくるのです。

さて、ここで本日配布したレジュメを御覧いただきたいのですが、もちろんこれは日本で出版されてきた翻訳書も含んでいますから、外国の作品も含まれております。ロビンソン変形譚の中から12作品を取り上げて、主人公たちが持ち込んだ食糧と、実際に食べたものを抜き出したリストになっています。サバイバー名をまだ書いていないのですけれども、今からお話しする中で、御一緒に見ていこうと思います。リストに載っている食べたものをさっと眺めるだけでも、実は舞台となっている島の環境—熱帯であるか寒い地方なのかというようなこと—、それから例えば知力や体力といったサバイバーの造形、そして生活の様子、つまり火があったのかどうか、道具がどれくらいあったのかというようなこともある程度分かってくると思います。また、物語自体の性格、つまり、生き延びること自体を主題にしているのか、それとも楽しいピクニックを描いているのか、こういったこともある程度分かるのではないかと思います。食べ物に関わる記述をさらに詳しく見ていくと、それぞれの作品の新たな一面がきっと発見できると思います。今から行うのがこの作業ということになります。つまり、サバイバーたちの食卓、彼らが食べたものに着目することで、それぞれの作品を見直していこうというのが本日の目的です。作品を時系列に並べていくと、ロビンソン変形譚というジャンルに起きた変化の一端、ひいては、冒険小説という大きいジャンルに起きた変化の一端が見えてくると思います。そして、その社会的・文化的意味を考えるヒントになるのではないかと考えております。

『ロビンソン・クルーソー』

それではまず、最初の作品ですので『ロビンソ

ン・クルーソー』から取り上げたいと思います。サバイバー①は『ロビンソン・クルーソー』です。大幅に省略された子ども版—例えば講談社の絵本など—を見て育つと、「ロビンソンという主人公は無人島を独力で切り拓いた偉大なヒーローだ」というイメージを持ってしまうかもしれません。けれども、子ども版であっても、原著の第1部の内容をほぼ網羅した翻訳書、つまり岩波少年文庫版のようなものをきちんと読むと、少しイメージが変わってくるはずで、そこには、孤島生活に入る前の主人公の生き様が書かれているからです。その部分を読むと、「両親が止めるのを聞かずに振り切って旅に出て、結局行方不明になって、28年間も帰って来なかったバカ息子」というイメージが出てくることになります。また、「二東三文のがらくたを積んで、アフリカの沿岸で荒稼ぎしていた商人」というイメージも出てきます。さらには、「仲間を売って、その資金を元にブラジルで土地を買った地主」でもあります。そしてまた、「黒人奴隷の密輸を企てていた農場経営者」でもありました。第1部をきちんと読むと、そういうロビンソンの別の顔が見えてきますので、現代的な道徳観に照らすと「ヒーロー」ではないと思う方々も出てくると思います。もちろん、そういった主人公の前史があるからこそ、孤独な労働にいそしんだ孤島生活部分が、改心し悔い改めた者の記録として読まれることにもつながるわけです。実際、信仰と強く結び付いた人間の精神的成長の物語であるとか、近代資本主義の理念を体現した経済人の記録、などというのがこの小説に従来与えられてきた解釈かと思えます。もちろん本日は、こういったこととは違う観点からこの作品を見ていきたいと思えます。

具体的に「食」の話に入る前にちょっと寄り道をしなくてはならないのですが、『ロビンソン・クルーソー』という物語はもともと、スコットランド人の船乗りアレクサンダー・セルカーク(Alexander Selkirk)という人の実体験に触発されて書かれた物語だと言われています。このセルカークが暮らした島というのは、チリ沖のファン・フェルナンデス諸島と言われる群島に属する島で、1966年からはロビンソン・クルーソー島と

呼ばれています。けれども、デフォーはこれをオリノコ川河口へと位置を変更して物語を書きました。つまり、太平洋側から大西洋側へ、大陸の反対側に場所を移したのです。これはどうしてなのだろうと考えたときに、もともとロビンソン変形譚が持っているテーマがいくつか浮かんでくることになります。

最も単純な解釈は、カリブ地域を中心にした南米大陸に対するイギリスの国家的野心とデフォーの政治的立場をリンクさせたところから導き出されます。簡単に言ってしまうと、『ロビンソン・クルーソー』は移民奨励パンフレットとして読める、ということです。第1部の最後で無人島は、ロビンソンが開拓して、原住民と（ロビンソンの敵であるはずの）スペイン人と、イギリス人犯罪者を労働力にしたプランテーションになりかけています。そしてロビンソンはその不在地主になっていくわけですから、そういった解釈が出てくることになります。変形譚というのはそもそも植民地主義と強く結び付いていたジャンルですから、植民地への野心を表現する変形譚というのは、『ロビンソン・クルーソー』以降もどんどん出版されることになります。

2番目の解釈では、モデルとなったセルカークの出自が問題になります。このセルカークという人物は、ロビンソン・クルーソーとは異なり、船の難破で島にたどり着いたわけではありません。船員同士のごたごたが起きて島に置き去りにされてしまい、無人島生活をするようになった人物です。しかも彼を置き去りにしたのは、ウィリアム・ダンピア（William Dampier）という人が率いた船団の1艘でした。ダンピアというとは今ではニューギニア辺りに行った探検家として有名なのですが、実は17世紀末にスパニッシュ・メインを荒らしまわっていたバカニニア（buccaneer）と呼ばれる大海賊の一人なのです。セルカークが部下になった頃には、プライベートア（privateer）— 王様のお墨付きをもらった「私掠船」の船長（言わば公認海賊）— を名乗っていました。また、1709年にセルカークは助かっているわけですが、このときに助けてくれた船長がウッズ・ロジャース（Woodes Rogers）という人物です。こ

の人も伝説の大海賊として歴史に名を残すプライベートアです。つまり『ロビンソン・クルーソー』というのはそもそも、置き去りにされた海賊の物語だったわけです。少し考えてみれば分かることなのですが、18世紀初頭の南米大陸西海岸というと御承知のとおりスペインの支配地域ですから、西側の海（太平洋側）まで回り込んでやってくるイギリス船というと海賊船か、私掠船を兼ねた探検家の船ということになります。まっとうな商人は来ない土地なのです。ですから、もし物語の舞台を変えなければ、主人公のロビンソンというのは、当時の読者たちの目にはきっとまっとうな商人とは映らなかったことだろうと思います。島の位置を変えることで、置き去りにされた海賊が、難破した無辜の商人へと変貌していくわけです。海賊物語としての性質はここでいったん隠蔽されるわけですが、この性質というのは時代が下るにつれて、また別の形で変形譚の中で表面化していくことになります。これについては、私が以前『女になった海賊と大人にならない子どもたち：ロビンソン変形譚のゆくえ』という本で語ってしまいましたので、今日は全部省かせていただいております。

では、ロビンソン・クルーソーという人が海賊を恐れていたのかというと、そうではありません。彼が怖がっていたのは人食い人種でした。これが島の位置の変更に関して最も重要な意味であり、また、この作品の最も大きなテーマになってくるかと思います。というのは、当時、カリブ海域というのは人食い人種の地域として知られていたのです。これはコロンブスの第1回航海記録に由来しております。コロンブスがそのように言ったために、「カリブ地域は人食い人種が住んでいる土地だ」というイメージがその当時定着しておりました。物語のなかで、ロビンソンの従者となるフライデーはカリブ族だと書かれております。人食い人種のカリブ族を登場させるのに、チリ沖の島では困るということで島の位置を移したと考えると分かりやすいと思います。

前置きが長くなりましたけれども、いよいよ「食」の話題です。物語の中で描かれているロビンソンの食事情を観察すると、この島の位置の変

更の意味の3つ目、人食い人種の話と非常に強いつながりがあるように思います。レジュメには、ロビンソンの持込食糧として7品目挙げているのですが、実際には穀類も少しありました。ただ、その穀類が鳥の餌用で、しかもごく少量だったということで、ロビンソンは実際に食べていないようですから省いてあります。食事内容を見ていただくと、最初のころは持込食糧を食べていますが、その後、ヤギの肉、鳥の肉、といった品目が並びます。実は、これは少し変なのです。もし御自身が無人島に漂着したらどうだろうか、と考えてみてください。最初からヤギが捕まえられますでしょうか。当然、普通のサバイバーは、その辺に転がっている木の実を食べたり貝を拾ったりして食べるということから始めるはずですが、ロビンソンの場合は最初から肉、肉、肉なのです。なかなか採集に出る場面が出てこなくて、7か月も経ってからようやく食べ物を探しに行こうと決心します。これはもちろん、持込食糧が豊富だったからとか、銃を持っていたからではないか、ということも言えると思うのですが、同じように持込食糧が豊富で、銃を持っても、やはり将来への不安から、手近にあるものを集めようとする姿が描かれるケースがロビンソン変形譚には多いのです。ところが、『ロビンソン・クルーソー』の場合だけはそのようなことが全く描かれずに、とにかく肉を集めるシーンばかりが描かれるということになります。

御存じのように、クルーソーという人物は非常に堅牢な砦を作るということに終始したサバイバーでもあります。一生懸命何か月もかかって砦を築いて、その中に閉じ籠もるのです。それはなぜだったかという、人食い人種を恐れていたからです。そういうふうに考えると、28年間に及んだ孤島生活のほとんどを人食い人種の影に怯えながら暮らしたロビンソンが、実は他の変形譚の登場人物に比べて、極端な肉食サバイバーでもあるというのは興味深いことです。もちろん時代的な事情もあるのですが、少なくとも表面上は「非常に肉をよく食べるサバイバーが出てくる物語」ということになります。

つまり『ロビンソン・クルーソー』という作品

を食べ物に注目して読み直すと、肉食サバイバーである主人公が、自分が食肉になる可能性に気付いて怯えている物語というふうに読み込めることになります。実は肉というのは、ヨーロッパでは中世以来、力の源ではあるのだけれども、悪の源でもあるとみなされていた食材です。ですから、教会が節制の対象とした食べ物もまずは肉でした。断食というのは、獣の肉を断つということの意味していました。イギリスでは16世紀以来、宗教的な動機だけではなくて、漁業奨励と海軍力増強という政治的な意図もあって、国家を挙げての断食が繰り返し行われています。ロビンソンが上陸1周年目に当たる日に、神への感謝ということで断食をしているのですが、ここでも日中には物を口にせず、夜、日が落ちてから少し口にするけれども、肉は口にしません。断食というのが事実上、肉を口にしないということの意味していることになります。そもそもいるかどうか分からない人食い人種というものをねつ造したヨーロッパ人の歪んだ想像力というのは、肉食者としての自分たち自身を反映したものではなかったのだろうかということは、ポストコロニアルの研究者たちからよく言われていることです。この意味で、クルーソー自身の肉を求める気持ちというのは、人食い人種への恐怖と表裏一体のものだといえることになります。つまり『ロビンソン・クルーソー』という作品は、我が身の悪を、我が身に降りかかるかもしれない悪へとすり替えた物語として読んでいくことができるわけです。この肉食モチーフについて見ていくと、実は変形譚の歴史の中で、はっきりと悪の主題の変化が見えてくることになります。この点についてはまた後ほど、改めて見ていきたいと思います。

『スイスのロビンソン』

次にサバイバー②です。これは、『スイスのロビンソン』(*Der Schweizerische Robinson*)という作品です。私が一番好きな作品です。変形譚の中で食べ物に関する記述が一番楽しい作品だからです。飢餓や欠乏と無縁の世界で、発見と獲得に明け暮れるサバイバーを描いていますから、食事内容が非常に豪華なのです。そもそもこのサバイ

パーの場合は、物資面だけではなく人的欠乏にも悩まされることはありません。ですから、総合的な豊かさという点ではデフォーのロビンソンよりさらに豊かだったと思います。両親と4人の息子の6人家族が揃って島暮らしをする物語だからです。この一家は無入島上陸直後から、不運を嘆くことも不安を口にすることも一切ありません。お父さんが指揮監督をして、全員で整然と働きます。例えば、難破船から持ってきた帆布と帆桁を使って、まずはテントを建てます。それから、敷物にするためのコケや草を集めて日に干します。川のほとりには石を積んでかまどを作り、火を燃え立たせて、水と干し肉を入れた鍋を置きます。偶然見つけた天然塩を使って、味付けも万全です。こうして完成した干し肉スープと乾パン、現地調達したカキが島で最初の食事となります。このようにテント設営、かまど作り、食事準備といった作業を効率的にこなしていく辺りは、手慣れたキャンパーを見るような感じです。さすがに物不足ですから、スープはできて銘々皿がなく、直接鍋に匙を突っ込むのですけれども、そのようなことは現実の野外活動でも珍しいことではなく、よくやることだと思います。少し違うのは、スプーンもないから、代わりに貝殻の匙を使った、というところくらいでしょうか。いずれにせよ、燃え盛る火を囲んで温かい食事を楽しむ様子というのは、無人島でのサバイバルというよりは野外キャンプのように見えます。食事内容も、2日目などは非常に豪華です。レジュメに挙げた真ん中の辺りの、魚の串焼きや鷺鳥の丸焼き、干し肉スープ、これが2日目の食事です。2日目の夜からこのようなものを食べているというのが、この作品のすごいところで、全編が「おいしそう」なのです。

先ほど『スイスのロビンソン』は、まるでキャンプを見ているようだと言いました。それが一つの特徴なのですが、もう一つ、「食」に関する特徴があります。寄せ鍋を思わせるような島の性格に由来する特徴です。食べ物に特化して言うならば、一家が作り上げた大農園にその特徴がよく出ています。彼らの畑には、現地調達した南国の植物と、船で運ばれてきたヨーロッパ産の植物が混在しているのです。それは島の豊饒さを示すもの

ではありますけれども、反面、この世に実在するとは思えない、奇妙なごった煮空間としての島の非現実性をも表しています。熱帯植物であるパイナップルやサトウキビの隣で、寒冷なヨーロッパから持ち込んだ大麦とか小麦が茂りに茂ったというところを読むと、少し怪しく思えてしまいます。また、レタスとかサラダ菜、キャベツといった葉野菜は暑さにそれほど強くないと思うのですけれども、非常に暑い中ですくすく育つというふうを書いてあると、さらに怪しいなと思います。しかもそのような島にニンやチョウザメ、サケが大挙してやってくるというのです。塩漬けにしたり油漬けにしたりして山ほど保存した、という文章が出てくると、いよいよ怪しい話だと思わざるを得ません。ただ、大人だったらおかしいと思って読むかもしれませんが、子どもは割にそういった疑念抜きに楽しんでしまうものなのです。さらに極めつけに面白いのが動物です。たぶんこの一家は南太平洋から東南アジアのどこかに流れ着いたのだと思います。けれども、登場するのは必ずしもその地域の動物とは限りません。サル、ジャッカル、ロバ、水牛、大蛇—この辺りまではまだいいです—、フラミンゴ、カピバラ、ダチョウ、アザラシ、トド、セイウチ、カバ、ゾウ、ライオン……と、こうなってくるとここはアフリカなのか、それとも南米なのか、いったいどこなのだと感じるのではないのでしょうか。こんなふうに自然科学の知識に関して少し眉唾なところがありますが、逆にこういういい加減さというのが面白さの秘密のようにも思います。例えば私が子どもの頃に読んだときには、ただわくわくしながらページをめくっていた記憶があります。そのわくわく感というのは、この荒唐無稽な設定によって生み出された、夢のような冒険空間に対しての感情だったのではないかと今にして思います。現実の地図上に位置を示すことができない冒険の島という意味では、バリ (J.M. Barrie) の『ピーター・パンとウェンディ』(Peter and Wendy) のネバーランドにつながってくる島、ということになるかと思います。もちろん、こういう物語は困ると眉をひそめる方も絶対いらっしやると思います。嘘は駄目という方には、資料リストの28番に挙げているのですが、

カンペ (Joachim Heinrich Campe) という人が書いた『新ロビンソン物語』(*Robinson der Jüngere*) をお勧めしたいと思います。非常に教育的な物語です。

『スイスのロビンソン』について、もう一点付け加えておきたいのですが、この作品は非常に古くから翻訳が出ています。資料リストの22番から26番に挙げていますが、なかなか手に入らない資料ですので、もし機会があったらぜひ御覧ください。これらを読み比べていただくと分かるのですが、実は『スイスのロビンソン』という作品は翻訳ごとにそれぞれ話が違っているのです。訳者が改変した、つまり抄訳とか翻案が含まれるというだけではなく、底本が違っているという場合があります。この作品は非常に複雑な成立史を持っています。翻訳書もどれを訳したかによって内容が違ってきます。詳しく語りだすと、この話だけで3時間くらいかかりますので、今日は結論だけにいたします。1812年から13年に最初に出版されたオリジナルは、スイス人一家が無人島で自給自足生活を確立するところまでの2年間ほどの描写で終わっていました。ところが、英仏の翻訳者たちがそれにいろいろなエピソードを付けて引き伸ばしました。すると、その翻訳版を見たもとの作者の息子—この人は最初の本の編者でもありました—が、もう少し伸ばしたほうがよいかと考えたらしく、1826年から27年にかけて、続編として3巻目と4巻目の第2部を出したのです。そこでは、新・スイス国の樹立が宣言されて、成長した息子たちの一部が、宝石や毛皮や香辛料を持って欧州に戻るところまで描かれています。現代翻訳されている、私たちが今日手にすることが多い版は大体この続編部分を含んだ版の翻訳になっていますが、古い翻訳書は別の版を使っている場合もあります。新しい版には、島に新たに漂着したイギリス人の女の子を連れて帰るというエピソードも付け加えられています。つまり、元は一家族の開拓物語であったものが、英仏の翻訳者たちの手を経た後、続編ができた後の版では、美女と財宝を手にして本国へ戻る植民地建設者の物語へと様変わりしていくこととなります。その点だけ、ここで話しておこうと思います。

『さんご島の三少年』

植民地建設者の物語として、さらに分かりやすいのがサバイバー③です。これは今ではあまり読まれないかもしれませんが、バラントイン (Robert Michael Ballantyne) が書いた『さんご島の三少年』(*The Coral Island: A Tale of the Pacific Ocean*) という作品です。ほかの邦題も含めて、戦後間もない時期から昭和40(1960)年代まで度々翻訳出版されてきました。これらも資料リストの30番から32番に挙げていますので、もし機会がありましたら御覧ください。18歳のジャックと15歳のラルフ、13歳のピーターキンの3人の少年水夫が、難破して南太平洋の無人島に漂着し、大冒険をして、それから故郷に帰るといふ、かなり波乱万丈な、逆に言うと、非常に荒唐無稽な物語です。レジュメにもあるとおり、少年たちは何も持たずに漂着しています。ところが、彼らは食べ物の心配をするということが全くありません。上陸数時間後には椰子の木を見つけて、(非常に高い木なのですれども)、驚いたことにサルみたいにすると登って、簡単に椰子の実を手に入れます。2日目の朝食は岩場のカキです。カキというと、先ほどのスイスのロビンソン一家も食べていたけれど、スイス人一家は大変まずいと言います。こんな気持ち悪いものは食べられない、しかもまずいと言っているのですが、イギリス人は大好きです。もう大喜びで、こんなおいしいものはないと言って食べています。さらにパンの実というものも見つけます。これについては後で説明いたしますけれど、とにかく食べ物で困ることがない物語ということがはっきりしてきます。最年少のピーターキンが「この素晴らしい島では、僕らは何でも準備万端整った状態で手に入れられるみたいだ。レモネードは木の実に入っているし、パンは木になってるよ！」¹と歓声を上げています。この言葉が作品全体を象徴しています。とりわけパンの実象徴的です。はっきり言うと、この作品は「働かずして食べ物が手に入る夢の楽園を描いた御都合主義で能天気な物語」なのです。でも、とても面白い物語です。

1 水間講師による仮訳

パンの実は、能天気系の変形譚に必ず出てくる食べ物です。そもそも元祖ロビンソンでは、偶然落ちて発芽した麦を一生懸命育てて、3～4年もかかってようやくパンを得ています。スイスのロビンソンの一家は、キャッサバという根菜を、掘り起こしてすりおろし、濾して寝かせて焼いて代用パンを完成させていますので、これもかなり「労働」をしています。これらと比べて、木からもいできて焼いたら代用パンになるというこのパンの実が、いかに苦勞無しの食べ物かということがお分かりになると思います。そして、このような「苦勞無しの冒険小説」に対して、例えば先ほどお話のあった²オールコットは、ポリーという女の子が主人公の『昔気質の一少女』(An Old-Fashioned Girl) という作品の中で「男の子の読む本の中には、なんでもかんでもすぐ見つかる御都合主義な話があるわよね」といった内容の嫌味を言っています。このように、御都合主義な冒険小説については、昔から馬鹿にされていたところもあるようです。ですから、このパンの実は、19世紀的な能天気系の冒険小説をパロディにするときにもよく使われます。現代の作品でも、少し古いですが、メアリー・ノートン (Mary Norton) という『床下の小人たち』(The Borrowers) を書いた作家の別の作品で、『魔法のベッド南の島へ』(The Magic Bed-Knob) というものがあります。この中でうまくパロディとして取り込まれていますので、機会があったらお読みになってみてください。

パンの実についてももう少し考えてみます。歴史上の出来事で「バウンティ号の反乱」という有名なイギリス海軍の反乱事件があるのですが、パンの実がこの事件に関わっています。子どもの本では、ジョン・ロウ・タウンゼンド (John Rowe Townsend) が書いた『ハルシオン島のひみつ』(The Islanders) という作品が、この事件を想起させる内容を含んでいます。変形譚の中でも言わば「変形譚のその後の話」という位置付けの物語です。パンの実とバウンティ号事件との関係については、『「もの」から読み解く世界児童文学事典』という川端有子先生と一緒に私が書かせていただい

た本の中で述べてしまっていますので、もし御興味のある方はそちらを読んでいただければありがたいです。

『二年間の休暇』

サバイバー④に移ろうと思います。これは多分日本でよく知られている作品です。ジュール・ヴェルヌ (Jules Verne) の『二年間の休暇』(Deux ans de Vacances) ですが、『十五少年漂流記』の名前の方が通りがよいかと思います。ニュージーランドの寄宿学校の8歳から14歳の男の子たち15人が難破して、チリ沿岸の島で2年間暮らしたという物語です。これも、いわゆる豊かなサバイバーを描いた変形譚で、少年たちは船ごと島に漂着していますから、最初の2か月間はその中で暮らしています。レジュメにも書きましたけれど、持込食糧が豊富です。「儉約して食べたところで、2か月以上はもたない」と書いてありますけれど、「2か月分も持っている」と言うべきでしょう。貝や卵を集めるとか釣りをするとした食糧の現地調達には、おチビちゃんたちが頑張ります。コンビーフや塩漬け肉といった持込食糧がありましたし、年長者の中には狩猟が大得意というイギリス人少年たちがいましたから、彼らは新鮮な肉に全く不自由していません。だからかもしれませんが、肉が食べたいという話や、肉への渴望を表すセリフが全く出てこないのです。サバイバー③の『さんご島の三少年』の中では、あれほど食べ物に困らない話だったのに、「なにか動物の肉をとるひつようがある」という台詞が途中で出てきます。それで人食い人種が出てくる話につながるのですけれども、ヴェルヌの作品では肉が食べたいという話が出てきません。ですから当然と言いますか、それと関連した人食い人種というのも出てこないのです。

では代わりに何が出てくるのかというと、黒い野蛮人(すなわち人食い人種)ではなくて、白い野蛮人である白人の反乱水夫が出てくることとなります。また、悪い奴らから逃れてやってきたケイトという子守の女性のことを、少年たちはヴァンドルディーヌ (Vendredine) 一金曜日という名前ですーというふうに呼ぼうという提案をし

² p. 20参照

す。つまりこの作品では、人食い人種は白人の反乱水夫へ、フライデーは女性に書き換えられているということが言えます。ただ、フライデーの位置を占めるのは女性だけではありません。モコという名の12歳の黒人の男の子が出てきます。この黒人の少年は、普段はコックとして働いて、おチビちゃんたちの面倒を一手に引き受けています。華々しい経験や探検には絶対呼ばれないのですが、重労働や危険が生じる時には必ず呼ばれます。ですから、それ以前の世代の物語に出ていた黒い野蛮人というのは既にドメスティケート (domesticate) されている、家庭の中に取り込まれている—これは嫌味で言っているのですけれど—、そういう形で、要するに下僕になっていたり、女性的位置を占めている、ということが言えるかと思えます。

『ツバメ号とアマゾン号』

サバイバー⑤です。これは多くの方が読んでいらっしゃるであろう、アーサー・ランサム (Arthur Ransome) の『ツバメ号とアマゾン号』 (*Swallows and Amazons*) です。レジュメの表現は新訳から採っていますので、種入り菓子ではなく、シードケーキとなっています。この作品がどうしてロビンソン変形譚なのかと不思議に思われる方も多分いらっしゃるのではないかと思います。確かに島を舞台にしているのですが、これはお坊ちゃんお嬢ちゃんが夏休みにキャンプをする様子を描いた作品です。舞台となっている島もイギリス北部の、ピーター・ラビットの故郷として有名な湖水地方です。その湖水地方の湖に浮かぶ小島を舞台にした作品です。結論を先に言うと、この作品が変形譚に位置付けられるのは、子どもたちがキャンプ地となる島を無人島に見立てて、ロビンソン・クルーソーごっこや宝島ごっこを行うからなのです。この作品は、言わば想像力を媒介にした変形譚ということが言えると思います。物語の筋は、おそらくここにいらっしゃる皆さんはよく御存じだと思いますけれども、避暑地にやってきたジョン、スーザン、ティティ、ロジャというウォーカーきょうだい—本当は5人きょうだいなのですが—けれども、末のおチビちゃんが小さいので、1巻

目で活動に参加するのは4人なのです—と、アマゾン海賊を自称する地元のおてんば娘、ナンシイとペギイのブラケット姉妹が、戦争ごっこやヨット遊びをする話です。

想像力を媒介にした変形譚という位置付けは、登場する食べ物にもやはり表れています。もうピンと来ていらっしゃるかと思うのですが、子どもたちはレモネードとかジンジャービアとか紅茶をラム酒と呼びます。それから、コンビーフをペミカンと呼んでいます。ペミカンとは何かと聞かれることが多いのですが、これはもともと北米大陸の原住民の食べ物を参考にして、毛皮猟師や商人が旅の携行食にした保存食のことです。『スイスのロビンソン』にも登場しています。これについても、『もの』から読み解く世界児童文学事典』で書いてしまいましたので、今日は時間の都合上割愛させていただきます。ラム酒の方なのですが、これは日本でもケーキ材料としてだけでなく、カクテルベースとしての知名度も上がってきています。サトウキビを原料とするカリブ海域のイメージを色濃く漂わせるお酒です。最近、たぶん人気の映画の影響だと思うのですが、海賊の飲み物としてのイメージが非常に強いのですけれども、一つ付け加えさせてください。これは18世紀から19世紀のイギリス海軍のお酒でもありました。つまり、海賊と海軍がいかに近いものであったかということを表す一つの証拠でもあるのです。

『ツバメ号とアマゾン号』のような、想像力を媒介にした変形譚が登場した背景を考えると、変形譚が生まれてくる原動力が何だったかというところと話がつながっていきます。要するに、西洋白人の冒険の精神というものが時代と合わなくなってきた、ということが挙げられるのだと思います。一つには、冒険の対象となる未知の領域が、20世紀になってくると減少していたというのはもうお分かりですね。それから2番目として、第一次世界大戦を経たことによって、支配と獲得をよいものだと考える従来の国家観に、1930年辺りの段階で、もう十分揺らぎが出ていた、翳っていたということが言えるかと思えます。つまり、ランサムの作品というのは、変形譚の転機である、

実際のサバイバルではなくて、空想の中にサバイバルが投げ込まれていく、そういったものを示しているのだと思います。さらにまた、冒険小説というジャンルの変化自体を示す作品でもあります。ランサム作品は、子どもの想像力が明るく楽しい方向に向いた作品ですので、ファンも多いのですが、同じ想像力でも、非常に悲しい現実を映した物語というの、もちろんその後登場してくることになります。例えば、先ほども言及したジョン・ロウ・タウンゼンドという作家に『海賊の島』(Pirate's Island)という、資料リストの38番の作品があります。これは、悲惨な境遇からの精神的逃避として宝島ごっこをする女の子が登場します。この作品よりも前にタウンゼンドは、今ではほとんど読まれないと思うのですが、『ぼくらのジャングル街』(Gumbie's yard)という作品を書いています。また、その続編もあります。そのような作品で、日常生活そのものがサバイバルにならざるを得ない貧民街の少年少女を描いていました。これらは第二次大戦後の作品になります。特定の人種や階級の視点で描かれていた従来のロビンソン変形譚に対する、ある意味痛烈な皮肉なのですが、そのようなジャンルを生み出した時代や文化に対する皮肉というように捉えてもいいかもしれません。第二次世界大戦を境に、変形譚にはもっと大きな変化が起きてくることになります。

『蠅の王』

ここからは、私も語るのに少し勇気が必要な作品についての話です。従来型の変形譚の批判ということでどうしても取り上げなくては行けない作品です。サバイバー⑥はウィリアム・ゴールドディング(William Golding)の『蠅の王』(Lord of the Flies)です。もちろん、これはもともと大人の本です。ただ、1960年代には英語圏諸国で高校生や大学生のバイブルのように読まれていたという経緯がありますので、今だったらヤングアダルトに組み込めるかもしれません。日本の中高生たちに人気を博した『バトル・ロワイアル』という作品がありました。島の中で少年少女が殺し合いをするという非常に衝撃的な話でしたが、その源流を

作ったような作品ということになるかと思いません。なぜこれを取り上げるのかという話が時々出るのですが、子どもというのは面白い本に出会ったときに、同じような種類の本を探して読みます。『スイスのロビンソン』が面白かったから『ロビンソン・クルーソー』を読んで、『ロビンソン・クルーソー』が面白かったから『ツバメ号とアマゾン号』を読んで、『宝島』を読んで、というふうに変形譚を漁っていくうちに、なぜか知らないけれどこの禁断の書に手を伸ばして読んでしまって、読まなければよかったと思う。そういう経験をするのも、きっとあると思います。何を隠そう、これは私自身の経験です。12歳の時にこれを読んでしまって、読まなければよかったと思った記憶が鮮明に残っております。

『蠅の王』というのは、前半で扱ったサバイバー③の『さんご島の三少年』をそのまま下敷きにした物語です。これは非常に有名な話ですので、御存じの方もいらっしゃると思います。『ロビンソン・クルーソー』から『さんご島の三少年』に引き継がれた肉食モチーフをそのまま引き継いで、うまくまとめた作品というふうな位置付けると非常に分かりやすくなります。つまり、悪の主題を引き継いだ作品ということ。少し元に戻って、『さんご島の三少年』について見ておかなくてはなりません。苦勞もなしに次々と食材を手にして、飢えを感じる暇もなかったはずの少年たちが、「なにか動物の肉をとるひつようがある」と言い出すという話は先ほど少しいたしました。そこで彼らは、まず武器を作って豚狩りに行きます。それから、非常に残酷な殺し方で豚を仕留めるシーンや、仕留めた豚肉を食べながら、彼らが人食い人種の話をするシーンが出てきます。結局この『さんご島の三少年』とは、自分たちが食べる肉、そして逆に食べられるかもしれない可能性が並置されている作品なのです。元祖ロビンソンはカリブの島でヤギを食べていましたが、『さんご島の三少年』では南太平洋が舞台になって、肉は豚肉に変わります。豚というのはキリスト教世界において根本的に差別されてきた動物であり、また、カニバリズムの幻想がつきまとっているとも言われている動物です。人肉を表すロングピッ

グ (long pig) 一長ぶた—という英単語が今も辞書に載っているのですけれども、これについて『さんご島の三少年』では「ぶたの丸焼が、人間の丸焼によくにてるもんだから、やつらは人間の丸焼のことを『長ぶた』というらしい」とわざわざ説明しています。

豚にまつわるこのようなイメージを非常に効果的に用いたのがゴールドディングの作品ということになります。物語は、核戦争が勃発して、避難のために少年たちだけを乗せた飛行機が南太平洋の無人島に墜落したところから始まります。元祖ロビンソン以来、変形譚というのは洗礼とか再生を象徴するかのようになり、サバイバーが海に飲み込まれて、それから孤島にたどり着くというのがお決まりだったのですけれども、ここでは天上の樂園からの転落を思わせるような、落ちるというイメージが使われています。食べ物に関する記述も不吉な象徴性に満ちています。最初に言及されるのが、下痢を引き起こす果物、それから腐りかけた椰子の実です。その椰子の実は、髑髏のような形をしていると御丁寧に付け足されています。島の豊饒さが樂園性の象徴でもあった『さんご島の三少年』に対して、『蠅の王』では腐敗や墮落を思わせる、過剰なる豊饒さが描かれています。こういった環境下で、少年たちは最初から肉への渴望を口にするようになります。狩猟隊を結成して豚狩りを行うのですけれども、その活動と並行して、自分たちを食べに来るかもしれない獣がいるという話がずっと語られることになります。最終的に、戦化粧をして裸で槍を持って豚を追い回して、涎を垂らしながらその肉をむさぼり食らう少年たちが描かれます。つまり、野蛮人とか食人種のイメージは、少年たちに重ねられているわけです。また、豚だけでなく、仲間まで狩り立てて殺すことになります。そのシーンは、歯と爪で引き裂いて殺したというふうには書かれています。つまりここでは、獣のイメージも少年たちに重ねられていることになります。このイメージを補強するために、犠牲者の一人にはわざわざピギー (Piggy) 一豚っちゃん—という名前が付けられています。このように、『蠅の王』は象徴的にはありませんけれども、白人少年たち自身の食人行為を描い

ているということになるかと思えます。

純粋に子ども向けの本というものを考えた時には、この主題をそのまま扱うことはもちろんありません。もう少し穏やかな形で展開したロビンソン変形譚が、子ども向けには20世紀後半にたくさん出てくることになります。穏やかな形とはどういうことかと言いますと、自分自身が肉を食べる存在だということを突き付けるような作品、あるいは、他の生き物の命を奪うことで自分たちは生きているということを確認させるような話です。あまり時間もないのでここでは省きますけれども、一番読みやすい例として、ゲイリー・ポールセン (Gary Paulsen) の『ひとりぼっちの不時着』 (Hatchet) という作品を挙げておこうと思います。

『青いイルカの島』

他の生き物の命を奪うものとしての自覚は、ベジタリアンサバイバーの登場につながるはずで、この例として取り上げたのがサバイバー⑦です。これは『青いイルカの島』 (Island of the Blue Dolphins)、スコット・オデル (Scott O'Dell) の作品です。サバイバーが先住民で、しかも女の子になっているという点からも、変形譚の変化、冒険小説の変化が見えてきます。実は、この作品は実話に基づく話でして、ちょうど3~4日前に、モデルになった人が住んでいた洞穴が見つかったというような話が英字新聞に出ていて、タイムリーだなあと読んでみました。カリフォルニア沖のサンニコラス島というところで、その女性は18年間暮らしていたそうです。作品の方の主人公はカラーナという女の子で、島での暮らしが何年間かということは、作品の中でははっきりとは書かれていません。ただ、相当な年数だということだけは言えます。

彼女の場合、自分の意志で孤島生活を選んだということ、それからもう一つ、力強い庇護者になり得なかったということが特徴かと思えます。というのは、島の人たち全員で移住船に乗ってどこかに行くはずだったのですけれども、乗り遅れてしまった幼い弟が一人島に残っているのを見て、見捨てることができずに自分から海に飛び込んで島まで泳いで戻るので、ところが、その弟は3

日もしないうちに野犬に殺されてしまいます。弟を守ることもできなかつたのですから、あまり強くないサバイバーであるというのはよく分かると思います。また、本来であれば自分たちがもともと住んでいた島なので、食糧は残っているはずなのですが、この野犬たちが島に残っていた食糧をほとんど食い尽くしてしまっていたから、ほとんどない状態からのスタートなのです。

もう一つ、部族の掟として、女が武器を作ったり使ったりしてはいけないということになっていましたから、当初彼女はもっぱら採集しかできませんでした。しかし、生き延びていくためにそういったジェンダーをめぐるタブーを打ち破っていく過程が描かれます。ただし、この『青いイルカの島』の場合は、武器は獲物をとるためだけでなく、自分の身を守るためのものでもあります。増えすぎて狂暴化した野犬から我が身を守るためにも、武器を作らなければいけないという必要性がありました。食糧を得るという点ではもともと豊かな島ではありませんから、せいぜい魚とか蛸をとる程度です。最後の方で鶴を殺しているのですが、肉を食べたという記載はなくて、むしろその羽を用いたスカート作りにページが割かれています。それどころか、彼女はある時を境に、一切の殺生をやめると宣言することになります。その理由について、獣や鳥は人間と同じだからと彼女は語っています。そのような心境に至ったきっかけは、助けたラッコが翌年子連れで戻ってきて、その子育ての様子を目にしたことです。ただ、その伏線として、彼女自身の養育者としての資質が、最初から作品にちりばめられていました。例えば、弟を見捨てられなくて、ただ一人海に飛び込んで島に戻ったというのもそうですし、弟を殺された恨みを持っているにもかかわらず、傷ついた野犬がいたら放っておけずに連れて帰って世話をします。それから、二羽の小鳥を育てた後に、ラッコのエピソードに続きます。女性サバイバーの系譜、女性のロビンソン変形譚というものをたどると非常に面白いのですけれども、これも語りだすと3時間くらい話してしまいますので、今日は省きたいと思います。

『孤島ひとりぼっち』

肉を食べないという選択はサバイバー⑧でも描かれています。これは日本の、一時非常に流行ったジュブナイルSFのシリーズの1冊として出された矢野徹さんの『孤島ひとりぼっち』という作品です。乗っていた船が機雷に触れて真っ二つになり、小学校6年生の男の子が無人数島で7か月間生き延びたというお話です。最初の1か月は大人がいたのですけれども、次々に死んでしまって、約半年を一人で乗り切ったという設定になっています。ただし、彼は船から持ち出すことのできたロボットキットを自分で組み立ててフライデーと名付け、相棒にしています。まず少年がフライデーにさせようとするのは、当然食糧調達です。このフライデーは少年の言うことなら何でも聞いてくれるはずなのですが、豚を捕まえて殺してくれという命令だけは拒否します。「サカナハ コエヲ ダシマセン。コレ、コエダシマス。キノドクデス。カワイソウデス」と言うのです。「イキモノヲタベルノハ サカナダケニ シテイタダケマセンカ？」とロボットフライデーが頼み込みます。少年は「ご主人様」の立場ではあるのですが、「友達」を失いたくないという気持ちから、トンカツを諦めます。ここで、ロビンソンとフライデーの主従関係が大きく書き換えられていることにお気づきになるかと思います。

『ありがとうチモシー』

このロビンソンの人物とフライデー的人物の関係の変化がさらにはっきりしてくるのが、サバイバー⑨に挙げた『ありがとうチモシー』(The Cay)という作品です。出版されたのは1960年代の終わりなのですが、時代設定は第二次大戦中です。物語は、石油会社に勤めている父親の仕事の関係で、オランダ領アンティル諸島のキュラソーカリブ海の南の端っこにあるオランダ領の島で、オランダに住んでいたユダヤ人を逃がす際にこの島を経由したことで有名です—というところに住んでいた少年が、第二次世界大戦が始まって、攻撃されるかもしれないということで、パナマやマイアミ経由で避難しようとするところから始まります。ところがパナマを出て2日後に、船がド

イツ軍のUボートの攻撃を受けて沈没してしまいます。それで、フィリップという男の子が、運よく黒人の老水夫のチモシーに助け上げられて、二人で救命いかだに乗って漂流し、3日ほどかけて島にたどり着きます。ただ、この少年は海に投げ出された際に頭を強く打ったことが原因で、目が見えなくなっているのです。ですから最初の2か月間、働くのはチモシーだけで、少年はあれやってくれ、これやってくれ、と王様みたいに構えています。道具と言えば、チモシーが持っていたナイフしかありませんでした。食糧もレジュメに書いたとおり、チョコレートとビスケットといった、いかだに載っていたほんの少しの非常食だけです。ただし、少年も当然変わっていきます。目が見えなくても、できることをしようというふうになってくるのです。それで、椰子の木に登るようになります。過去の変形譚では、椰子の実というのは最初に手に入っていたのですけれども、最後になっているのには理由があります。チモシーはもう70歳という高齢ですから木に登ることができません。だから少年が木に登る決意をするまで入手できなかったのです。そして最終的には少年が挑戦します。この少年の精神的な成長の過程に、チモシーとの関係の変化が重ねて描かれている作品というわけです。

レジュメに書き出している食糧は、4か月間暮らした間に入手した全ての食材です。品目数が少ないことに気付かされると思います。食糧の数が少ないということは、実は戦後の変形譚の一つの大きな傾向になってきています。ロビンソン変形譚というのは、多かれ少なかれ、潜在的に既存の社会秩序とか階層というものを覆すような力を持っています。と言いますのは、全く何もなかったところに行って、ゼロからのスタートになりますから、元の社会は一回御破算になるわけです。サバイバーが複数だとそのことがはっきりしてきます。例えば、先ほど取り上げたヴェルヌの『二年間の休暇』の中でも、少年たちは学校にいるとき、上下関係、ファグ(fag)という雑用をする関係があったと冒頭で書かれています。島の中ではそういう関係がなくなったということが途中で強調されています。一方で、下僕としてのモコはそう

いう平等化からずっと除外された存在としてあり続けていました。けれども、このテイラー(Theodore Taylor)の『ありがとうチモシー』の中では、結果が異なっています。つまり、黒人水夫と白人水夫の上下関係というのは、サバイバル生活の中で完全に消滅していくことになります。先ほど、最初の2か月はチモシーだけが働いたと言いましたけれど、やがて労働を共有するようになり、そして残りの2か月は少年だけが働くことになります。それはなぜか。チモシーが死んでしまうからなのです。死ぬ前にチモシーは、目が見えなくても生きていけるように、一生懸命いろいろなことを少年に教えています。最終的に、大きなハリケーンが来たときに少年をかばって死んでしまうのですけれども、この事前準備のことを考えると、少年を二重の意味で救ったことになります。食糧が乏しいということ、しかもチモシーがいなくなってからのフィリップが、同じ食事をとり続けているということが、二人の対等な関係を象徴しているように思います。最初は、乗客と水夫という主従関係があり、相手の名前も覚えようとしなかった少年がやがて、「ぼくのことを、ぼっちゃんなんていわずに、フィリップと呼んでもらえないかしら」と言い出します。物語全体として、人種的な偏見を克服していくという展開がはっきりしていて、老水夫の英雄性が印象に残るように構成されています。つまり、老水夫のチモシーは、ヴェルヌ作品のモコとは明らかに扱われ方が異なっているわけです。この作品の原題は“The Cay”といます。現地ではキーと発音されていますが、小島という意味です。この二人が暮らした島が、コロンビアの北にあるセラーニャ礁の一つだったことが続編(*Timothy of the Cay*)で明かされています。セラーニャ礁というのは、キューバ危機の舞台になった場所で、アメリカ軍の秘密基地がありました。この作品では、人と人との対立が浄化される場所として設定されています。デフォーが人食い人種のいる地域として用いたカリブ地域というのは、20世紀になって、大国間の争いの場所となったわけですが、児童文学の世界では人間同士の絆を示す場所として書き直されているというのも、非常に興味深いことだと思います。

『孤島の冒険』

寒冷地を舞台にした変形譚についても一つぐらい見ておかなければと思って、取り上げております。サバイバー⑩は『孤島の冒険』(Один)という作品です。主人公は14歳の男の子です。研究者のお父さんと共に乗り込んでいた調査船から転げ落ちてしまい、北千島にある無人島の一つに流れ着いて、47日間サバイバルをしました。レジュメからも分かる通り、何も持って行っていません。現地での食糧調達は、最初から最後まで採集だけです。周囲は夏でも水温17度を越えることのない海で、ラッコすらあまり来ない地域というふうに書かれています。ですから彼の場合はほとんど食べ物を得ることだけに働くようなものです。また、寒さも問題です。彼が身に着けていたのは、小さいナイフと安全ピン2個だけでした。ここからが面白いところなのですが、島自体も資源が乏しく、持込品も少ない状況下でどうするかというと、実はこれらを補ってくれたのが漂着ゴミという設定になっているのです。流れ着いていたポリ袋が獲物袋になり、シャンプーの瓶が水筒になり、漁網の切れ端がロープになり、アルミ缶がコップになり、帆布がテントになり、鉄製のかすがいがつるはしになります。そして、日本製のビーチマットは布団になるのです。ちなみに、これはソビエト時代のロシアで出版された作品です。少年が孤島生活を始めて20日くらい経ったところで、一回津波が来て生活の拠点全部奪われてしまうのですが、その津波は廃船も運んでくれたため、これを第二の家にするようになります。ぼろぼろになった船なのですけれども、少なくとも雨露はしのげるということで、仮住まいにするわけです。このように、主人公が消費社会のゴミによって生き延びるという点に、変形譚としての新しさが見えてくるようになります。ソビエト時代の作品と言いましたが、資本主義の享楽の象徴としてのゴミをいかして、大自然の中で見事に生き抜く青年の素晴らしさのようなことを書いているあたりに、少し「それらしさ」を感じます。

また、「食」に関して言うと、少年は最後まで肉を手にすることはありません。カモメを取るために弓矢を作るのですけれども、全く役に立ちませ

ん。一度は雛を手に入れるのですが、実際にピーピー鳴いている様子を見ると、やはり殺せないのです。ふくふくした、あったかい、頼りなげな雛を食べることなどやはりできない。これを食べるくらいなら、冷たいイガイやユリ根を食べている方がまだ、と思って殺せないわけです。ただし、さらに飢餓状態が進んでふらふらになってからオットセイを見かけたときには、食べたくて、食べたくて、板切れを持って殺しに行こうとするのですが、今度は体力上の問題でできない。物語の終盤では、本当にもう死ぬ寸前です。それぐらいのところまで飢餓状態が進んでいるのです。彼は「このひと月、この島で、ぼくは毎日なにをしていたのだろう。火と食べものことだけだったじゃないか……。火と食べもの……。それを考えずに、人間は生きていけないのだ」という言葉をつぶやいています。ここから、この作品が本当の意味でサバイバル(=生き延びること)を描いていることが分かると思います。それと同時に、少年は『『神秘の島』や『ロビンソン・クルーソー』につばをひっかけてやりたくなった。あの本のとりえは、無人島からぬけだすことができると、確信させてくれることだけなのに、本の中の方法はなにひとつぼくの役には立たなかったじゃないか……』と、過去の豊かなサバイバーたちへの批判を口にしています。ここまで激しくなくても、同様のセリフは、戦後の作品にはよく出てきます。

『猿島の七日間』

日本の作品も取り上げておかなければと思って、大急ぎで語っていきます。サバイバー⑪は日本の変形譚で『猿島の七日間』という作品です。これは「食」へのこだわりが非常に強いので取り上げてみました。親に内緒で釣りに出かけた少年が、島で寝過ごし、日曜日しか動いていない船の最終便に乗り損ねてしまい、7日間だけ孤島生活をするという物語です。もともと釣り道具を持っていますし、この島がかつては日本海軍の基地だったということもあって、廃墟が点々とあり、寝泊りする場所にも困りません。井戸も涸れていませんでしたし、拾った100円ライターで火もつけられました。というわけで、「これならちよっ

とあり得るかも？」というような程度のサバイバルになっています。そもそも釣りをする少年ですから、当然貝や魚にとっても詳しいですし、魚も自分でおろして食べることが出来ます。その割には、生魚は食べられないと言って、必ず焼いて食べるところに現代っ子っぽさも出ています。

レジュメには、いろいろな魚の種類や貝の種類がありますが、最後にヒラマサと書いて棒線を引いておきました。彼が釣り上げたのだけでも、最後にリリースしたので、食べていないため、この棒線を引いております。最終日に彼は、大格闘の末に80センチクラスの大物を釣り上げましたが、リリースしました。それはなぜか？もちろん食べるつもりだったのです。でも、食べようと思って針を外そうとしたときに、大きな口の中にもう1個大きな針が刺さっていることに気がきました。こんな大きな針を刺したままで今まで生きてきたのかと思ったら、少し感動したわけです。それで、今日までこんなものを刺して海を泳ぎまわっていたのだと思うと、もう食べられなくなるわけです。そして、「生きていろよ！」「もう、釣られたりするんじゃないぞー！」と言ってリリースします。要するに、生き物への敬意や命への敬意のようなものを、多分作者はそこで表現したかったのかなと思います。力強い生命力への賞賛のようなものも込められているかもしれません。

サバイバル自体はそんなに過酷ではないですから、生きるか死ぬかといった話ではありません。それでもどうにかして死というものを感じさせたいというのが作家の意向のようで、それが手を変え品を変え言及されることになります。例えばこの作品の場合には、まず主人公の回想シーンの中に、おじいさんが亡くなったときに、遺体が焼き場に行って焼かれるところをお父さんがわざわざ見せた、というエピソードが盛り込まれています。おじいさんの死体を焼くのを少年が見たということです。それから第二に、持参していたラジオから、仲良くしていた先輩が事故で亡くなったというニュースを聞きます。それで、「うそだ。あの先輩が、そうかんたんに死んでたまるもんか」と言います。死というものをここでも刷り込んでいきます。そして最後に、先ほどこの島が元海軍基地

だったと言いましたけれども、残っていた施設に入った少年が、昔の軍服姿の教官や若い青年の兵隊たちのことを想像して、あの人たちは何のために戦って、何のために死んでいったのだろうと思いを巡らすシーンなどが入っています。この最後のエピソードはややわざとらしいので、成功しているかどうか分からないのですが、少なくとも、死を表現することによって、生きるということ表現したい、という作家の意図は伝わってくるかと思います。

『ケンスケの王国』

戦争の記憶を使って死のイメージを喚起することで生を描くことにつなげるのは、戦後の作品でよく行われています。最後のサバイバー⑫は『ケンスケの王国』(*Kensuke's Kingdom*)というマイケル・モーパーゴ(Michael Morpurgo)の作品ですが、この中でも同じことが行われています。これは両親と共に世界周遊中だった少年が、ヨットから転落して島に流れ着いたところから始まる物語です。少年が流れ着いた島には既にサバイバーがいて、これが元日本軍軍医の老人オガワケンスケさんでした。この人が隠れ住んでいたのです。ケンスケ老人は戦時中、船ごと島に漂着してただ一人生き残って、アメリカ兵が島を占拠した際に終戦を知ったのですけれども、同時に、故郷の長崎に原爆が落とされたということも知り、絶望して帰郷の意志を失ってしまい、そのまま隠れていたという設定になっています。そして島にいたオランウータンやテナガザルを友として、ずっと暮らしてきたというわけです。ケンスケ老人はオランウータンやサルを脅かすハンターが来るのを非常に恐れていますから、少年が外部と連絡を取ることを許しません。当初は少年との交流すら拒否して、一方的に食事を持って行ってやる、助けてはやる、という態度を示すだけでした。レジュメに挙げた主人公の食事内容の最初のところに魚の切り身とありますが、これはたぶん作者が、日本人の食だから切り身(=刺身)だろうくらいの気持ちで書いたのだと思います。日本人からすると、そうだろうか少し疑問に思うのですが、少年自身も果物を自分で見付けるなど努力はするのです

けれど、当然それだけではとても生きていけず、食事については全面的にケンスケさんに依存することになります。大いなる知恵と技術を持つ老人の庇護下で暮らす少年という構図がここにありません。視点人物こそ少年ですが、本当の主人公はケンスケ老人だろうというのは、作品タイトルにも表れています。サバイバーとしてのケンスケ老人は、養育者としての立場に身を置いて、自然界の生き物の保護者にもなります。ですから、『青いイルカの島』の主人公に似ている存在ということになるかと思えます。『青いイルカの島』の主人公は物語の最後で船がやってきたときに、海のかなたにいたはずの家族や仲間のことを思って乗船するのですが、故郷の家族の生存に懐疑的なケンスケ老人は、今日の前にいる家族、つまりオランウータンやテナガザルのために島に残るという決断を下します。彼が島に残ったとしても、これが島の植民地化ではない、というのはもうお分かりかと思えます。白人少年と有色人種の老人という組合せは、先ほど述べた『ありがとうチモシー』にも通じる場所があります。

まとめ

非常に駆け足だったのですけれども、「食」に絞って、ロビンソン変形譚約300年の歴史をざっと見てきました。いくつかお分かりいただけたことがあるのではないかと思います。大まかにいうと、戦後の作品ではサバイバーの食事内容が格段に貧しくなっています。無人島を舞台にしたサバイバルストーリーというと、一般には窮乏生活だろうというイメージが浮かぶかもしれないのですが、実は昔のサバイバーたちはとても豊かでした。ロビンソン・クルーソーやスイス人の一家のようにたくさん物資を持ち込んで、しかもあれだけ豊かな島に住むのであれば、私だって住んでみたいと思えます。それに対して、現代といいますか、戦後の作品というのは、本当の意味での「サバイバル」を描くことが多くなってきているということがいえると思います。実は、ロビンソン変形譚では「食」そのものへの関心の強弱が、サバイバル、つまり生き延びるといふ主題への関心の強弱を示しているのです。例えば、先ほどの『孤島の

冒険』などは、食べ物探しばかりが描かれていますが、そういう作品は本当の意味でサバイバル、生きるということを主題にしているのだと分かります。日本にもそのような作品はあります。江戸時代に、鳥島というところに漂流した人たちがたくさんいるのですが、昔の歴史書などを読むととても悲惨な状況です。非常に大変な思いをしていて、それを基に物語化した作品一恐怖の鳥島物語シリーズと私は名付けていますーがいろいろ出されています。こちらの図書館にも古いものから新しいものまで所蔵があり、資料リストの48番から53番に挙げています。同じ鳥島を舞台にしても、新しい作品になると、アホウドリへの感謝の気持ちを述べる人が出てきたり、皆が無事に助かることを祈って肉断ちする、などと言う人が出てきたりします。日本の作品にも非常に苛酷なサバイバルを描いたものがあるということです。

そういった作品と比べると、『ロビンソン・クルーソー』などは、「食」に関わるサバイバルではなかったということがお分かりいただけるのではないかと思います。あれはやはり、自分が食べられることへの恐怖と防衛を描いた作品です。また、現代人の目から見たら間違いだらけかもしれないのですが、とにかく自然界のことをたくさん描いていた『スイスのロビンソン』というのは、ある意味で自然科学への関心を喚起するための教材だったのだらうということも分かりますし、『さんご島の三少年』は、海の向こうへ出かけて行って領土を獲得してくる良い兵隊さんになるようにという、イギリス人少年の育成マニュアルだったということが分かると思います。けれども戦後は、激しい飢餓状態に陥る少年サバイバーが次々と描かれていることを考えると、サバイバルそのものに焦点化する、つまり生きることそのものを描いた作品が増えていることは確かです。それに加えて、階級や人種、そしてジェンダーの問題を絡めて描くというのが現代の主流です。

それから『ロビンソン・クルーソー』で描かれていた、肉への渴望と人食い人種への恐怖というこの表裏一体の関係は、後の作品にも継承されていきましたけれども、これが究極まで行くとサバイバー自身による食人譚になるのかもしれません。

少なくとも、ゴールドディングの『蠅の王』では象徴的にはありますけれども、それが表現されていたと思います。けれどもこの主題自体は、子どもの本の中ではより穏やかな形、つまり人間は他の生き物の命をもらって生きているという自覚を描く方向に行きます。これは、自然界全体を見渡すまなざしであるとか、人間は頂点に立つのではなく自然界の一部だというような自覚を持ち出したからこそ、描けるようになった主題でもあると思います。要するに、環境や自然といったものへの意識と結び付いた主題ということになるかと思えます。具体的な表現として、他の生き物の命を奪う行為、つまり捕まえた動物を捌くシーンを克明に描く、ということが増えています。また、血や汚物の臭いとか形状をあからさまに表現することで、死のイメージを喚起したり、人が生きることにつきまとう穢れの部分をはっきり描いていこうというような作家の意識が最近の作品には見られます。また、死のイメージを持ち出すための一つの手段として、過去の戦争に言及することもよく行われています。よくできているかどうかは皆さんに御判断いただきたいのですが、こういった要素をもれなく取り込んだ作品として、ゴードン・コーマン (Gordon Korman) の「サバイバー」(Island) という3部作の作品があります。資料リストの45番から47番です。このあたりを、最近の傾向をよく表した作品ということで御紹介しておきたいと思います。甘やかされた現代っ子たちが、無人島でサバイバルをして生きる意味を問い

直すという作品です。

作品の形式上のことについて、最後に少し付け加えておきます。第二次世界大戦後は、領土の獲得と野蛮人の文明化という従来型変形譚の二大テーマが影を潜めましたので、その結果、冒険は想像の世界の中で展開されることが増えています。つまり、ファンタジーとかSFというジャンルの隆盛と相関関係にあるのです。現実の冒険はやや廃れ、ファンタジーやSFがよく読まれ、よく書かれている。もちろん、変形譚もファンタジーやSFの方へ移行していますが、今回はリアリズム系の作品を中心に取り上げました。ただ、リアリズム系の作品の中でも、「どことなくリアリズムではない、けれども一応リアリズムだろう」というような形式を持つ作品も増えています。分かりやすい例として『秘密の島のニム』(Nim's Island) という、女の子が自分の住む島でサバイバルをする物語を資料リストの54番に挙げておきました。これなどは本当のリアリズムではなく、少しファンタジー的な要素の入った作品だと思います。

「食」をキーワードに、ロビンソン変形譚の流れを追ってきました。いろいろな作品を面白そうだと思っていただけたら、これ以上幸いなことはありません。どうもありがとうございました。

(みずま ちえ 川口短期大学こども学科専任講師)

サバイバー①

Daniel Defoe. *Robinson Crusoe*, 1719.

(デフォー、『ロビンソン・クルーソー』、海保真夫訳、岩波少年文庫、2004年)

サバイバー②

Wyss. *Der Schweizerische Robinson*. 1812-27.

(ヨハン=ダーヴィッド=ウィース、『スイスのロビンソン』、小川超訳、学習研究社、1977年)

サバイバー③

Robert Michael Ballantyne. *The Coral Island: A Tale of the Pacific Ocean*. 1858.

(バラントイン原作、『さんご島の三少年』、大泉一郎、講談社、1956年)

サバイバー④

Jules Verne. *Deux ans de Vacances*. 1888.

(ジュール・ヴェルヌ、『二年間の休暇』上・下、大友徳明訳、偕成社文庫、1994年)

サバイバー⑤

Arthur Ransome. *Swallows and Amazons*. 1930.

(アーサー・ランサム、『ツバメ号とアマゾン号』上・下、神宮輝夫訳、岩波少年文庫、2010年)

サバイバー⑥

William Golding. *Lord of the Flies*. 1954.

(ウィリアム・ゴールドディング、『蠅の王』、平井正穂訳、集英社、2009年)

サバイバー⑦

Scott O'Dell. *Island of the Blue Dolphins*. 1960.

(スコット・オデル、『青いイルカの島』、藤原英司訳、理論社、2004年)

サバイバー⑧

矢野徹、『孤島ひとりぼっち』、国土社、1969年.

サバイバー⑨

Theodore Taylor. *The Cay*. 1969.

(T・テイラー、『ありがとうチモシー』、白木茂訳、あかね書房、1975年)

サバイバー⑩

Николай Внуков. *Один*. 1985.

(N・ヴヌーコフ、『孤島の冒険』、島原落穂訳、童心社、1998年)

サバイバー⑪

彦一彦、『猿島の七日間』、福武書店、1989年.

サバイバー⑫

Michael Morpurgo. *Kensuke's Kingdom*. 1999.

(マイケル・モーパーゴ、『ケンスケの王国』、佐藤見果夢訳、2002年)

「食から見る『ロビンソン変形譚』の系譜」紹介資料リスト

(本館) → 国立国会図書館東京本館で所蔵

※ → 国立国会図書館東京本館にも所蔵

デジタル化図書／雑誌 (館内) → 「国立国会図書館のデジタル化資料」でデジタル化資料を閲覧可能 (館内限定)

デジタル化図書 (インターネット) → 「国立国会図書館のデジタル化資料」でデジタル化資料を閲覧可能 (インターネット公開)

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号	備考
1	ロビンソン・クルーソー	ダニエル・デフォー 作 海保真夫 訳	岩波書店 2004. 3	Y7-N04-H77	
2	ロビンソン・クルーソー. 上	デフォー 作 平井正穂 訳	岩波書店 1967	933-cD31r-H (本館)	デジタル化図書 (館内)
3	ロビンソン・クルーソー. 下	デフォー 作 平井正穂 訳	岩波書店 1971	933-cD31r-H (本館)	デジタル化図書 (館内)
4	スイスのロビンソン	ヨハン=ダビット=ウィース 作 小川超 訳 W=クーネルト 画	学習研究社 [1977]	Y7-5729	
5	さんご島の三少年	バラントイン 原作 大泉一郎 著 松田稷 絵	講談社 昭和31	児933-0395s	デジタル化図書 (館内)
6	二年間の休暇. 上	ジュール・ヴェルヌ 作 大友徳明 訳	偕成社 1994. 12	Y9-1268	
7	二年間の休暇. 下	ジュール・ヴェルヌ 作 大友徳明 訳	偕成社 1994. 12	Y9-1268	
8	ツバメ号とアマゾン号. 上	アーサー・ランサム 作 神宮輝夫 訳	岩波書店 2010. 7	Y7-N10-J175	
9	ツバメ号とアマゾン号. 下	アーサー・ランサム 作 神宮輝夫 訳	岩波書店 2010. 7	Y7-N10-J176	
10	蠅の王	ウィリアム・ゴールディング 著 平井正穂 訳	集英社 2009. 6	KS157-J96 (本館)	
11	青いイルカの島	スコット・オデル 作 藤原英司 訳 小泉澄夫 絵	理論社 2004. 7	Y9-N04-H291	
12	孤島ひとりぼっち	矢野徹 文 梶鮎太 絵	国土社 1969	Y7-1312	
13	ありがとウチモシー	T. テイラー 著 白木茂 訳 武部本一郎 画	あかね書房 1975	Y7-4531	
14	孤島の冒険	N. ヴヌーコフ 作 島原落穂 訳 ジマイロフ 画	童心社 1998. 6	Y7-M99-17	
15	猿島の七日間	彦一彦 作・絵	福武書店 1989. 5	Y8-6397	
16	ケンスケの王国	マイケル・モーバーゴ 著 佐藤見果夢 訳	評論社 2002. 9	Y9-N02-239	

17	無人島大王 (『世界お伽噺』：合本、第1集)	[巖谷]小波 編	博文館 1917. 10	Y9-N04-H193	デジタル化図書 (インターネット)
18	ロビンソン漂流記	飯塚裕児 絵 西山敏夫 文	大日本雄弁会講談社 1951. 3	Y18-N03-H451	デジタル化図書 (館内)
19	ロビンソン漂流記 (『21世紀版少年少女世界文学館』第5巻)	ダニエル=デフォー 著 飯島 淳秀 訳	講談社 2010. 11	Y9-N10-J358	
20	ビーバー族のしるし	エリザベス・ジョージ・スピ ア 著 こだまともこ 訳	あすなる書房 2009. 2	Y9-N09-J125	
21	宝島	R. L. スティーブソン 作 坂井晴彦 訳 寺島龍一 画	福音館書店 2002. 6	Y7-N02-52	
22	孤島の家庭 (『少年世界』5巻18, 19, 21号)	桜井鷗村	博文館 1895-1933	Z32-B239	デジタル化雑誌 (館内)
23	親子六人漂流奇譚	松浦政泰 訳註	東西社 明41. 6	181-10(洋) (本館)	デジタル化図書 (インターネット)
24	新ロビンソン	ウィッサ 作 犬田卯 訳	博文館 大正11	児乙部22-1	デジタル化図書 (インターネット)
25	新ロビンソン漂流記	ヴィース 原作 金の星社 編 柳田謙吉 絵	金の星社 大正15	児乙部26-K-26	デジタル化図書 (館内)
26	家族ロビンソン	J. R. ウイス 著 清水暉吉 訳	東京朝日新聞社 昭15	793-22	デジタル化図書 (館内)
27	ピーター・パンとウェンディ	J. M. バリー 作 石井桃子 訳 F. D. ベッドフォード 画	福音館書店 2003. 6	Y7-N03-H65	
28	新ロビンソン物語	ヨアヒム・ハインリヒ・カン ベ 著 田尻三千夫 訳	鳥影社・ロゴス企画 2006. 12	KS393-H5 ※	
29	新・ロビンソンクルーソー	トゥールニエ 作 榊原晃三 訳 ポール・デュラン 絵	岩波書店 1973	Y7-3877	
30	さんご島の三少年	R. バランタイン 著 加能越郎 訳 山中一益 絵	世界文学社 昭和24	児95-B-1	デジタル化図書 (インターネット)
31	無人島の三少年	バレンタイン 原作 那須辰造 編著 武部本一郎 絵	偕成社 昭和47	Y7-3284	
32	無人島の三少年	バランタイン 原作 大蔵宏之 編 松井行正 絵	金の星社 昭和34	児933-0632m	デジタル化図書 (館内)
33	ハルシオン島のひみつ	J. R. タウンゼンド 作 斉藤健一 訳	福武書店 1987. 7	Y8-4466	
34	神秘の島、第1部	ジュール・ヴェルヌ 作 大友徳明 訳	偕成社 2004. 9	Y7-N04-H144	

食から見る「ロビンソン変形譚」の系譜

35	神秘の島 第2部	ジュール・ヴェルヌ 作 大友徳明 訳	偕成社 2004. 9	Y7-N04-H145	
36	神秘の島 第3部	ジュール・ヴェルヌ 作 大友徳明 訳	偕成社 2004. 9	Y7-N04-H146	
37	魔法のベッド南の島へ	ノートン 作 猪熊葉子 訳 赤坂三好 絵	学習研究社 1982. 7	Y7-9951	
38	海賊の島	ジョン・ロウ・タウンゼント 作 ダグラス・ホール 画 神宮輝夫 訳	岩波書店 1976. 7	Y7-5454	
39	バトル・ロワイアル	高見広春 著	太田出版 1999. 4	KH582-G920 (本館)	
40	海をおそれる少年 (『世界の名作図書館』 31)	スペリー 作 飯島淳秀 訳	講談社 昭和44	Y7-498	
41	宇宙家族ロビンソン	アーナム, アーチャー 共著 福島正実 訳	偕成社 昭和44	Y7-1809	
42	ひとりぼっちの不時着	ゲイリー・ポールセン 作 西村醇子 訳 安藤由紀 絵	くもん出版 1994. 7	Y9-845	
43	氷島のロビンソン	クルト・リュートゲン 作 関楠生 訳 小野木学 絵	学習研究社 1970	Y7-2229	
44	あやうしズッコケ探険隊	那須正幹 作 前川かずお 絵	ポプラ社 1980. 12	Y7-8600	
45	漂流 (サバイバー地図にない島；1)	ゴードン・コーマン 作 千葉茂樹 訳	旺文社 2002	Y9-N02-124	
46	銃弾 (サバイバー地図にない島；2)	ゴードン・コーマン 作 千葉茂樹 訳	旺文社 2002. 7	Y9-N02-189	
47	脱出 (サバイバー地図にない島；3)	ゴードン・コーマン 作 千葉茂樹 訳	旺文社 2002. 7	Y9-N02-190	
48	にっぽんロビンソン：土佐の長平・無人島漂流記	三田村信行 作 田中楨子 絵	ポプラ社 1998. 12	Y8-M99-306	
49	「アホウドリ」と生きた12年：無人島と少年船乗りの物語	岡本文良 作 高田勲 絵	PHP 研究所 1998. 12	Y8-M99-244	
50	アホウドリの島：鳥島漂着ものがたり	川村たかし 著 武部本一郎 絵	岩崎書店 1977. 2	Y17-5121	
51	水夫長平無人島漂流記	南洋一郎 著 樺島勝一 絵	偕成社 昭和18	児乙部43-M-2	デジタル化図書 (インターネット)
52	無人島漂流記 (『雑誌童話』 7巻4号～6号)	千葉県三	復刻版 岩崎書店 1982	Z32-B89	デジタル化雑誌 (館内)
53	無人島漂流記 (『千葉県三童話全集』 第6巻)	千葉県三	岩崎書店 1981. 3	Y7-8743	
54	秘密の島のニム	ウェンディー・オール 著 田中亜希子 訳	あすなる書房 2008. 7	Y9-N08-J320	

55	女になった海賊と大人にならない子どもたち：ロビンソン変形譚のゆくえ	水間千恵 著	玉川大学出版部 2009. 2	KS74-J31 ※	
56	ポリー：昔気質の一少女	オルコット 著 吉田勝江 訳	岩波書店 昭和14	782-22	デジタル化図書 (館内)
57	ポリー：昔気質の一少女	オルコット 著 吉田勝江 訳	北方出版社 1949	a933-122 (本館)	デジタル化図書 (館内)
58	ポリー：昔気質の一少女	オルコット 作 吉田勝江 訳 小池正男 え	北方出版社 昭和24	Y7-4575	デジタル化図書 (館内)
59	床下の小人たち・野に出た小人たち	ノートン 著 林容吉 訳 ジョー・クラッシュ 絵	岩波書店 昭和36	児908-1922-[10]	デジタル化図書 (館内)
60	床下の小人たち	メアリー・ノートン 著 林容吉 訳 ダイアナ・スタンレー 絵	岩波書店 1969	Y7-1701	
61	床下の小人たち	M. ノートン 作 林容吉 訳 ディアナ・スタンレイ 絵	岩波書店 昭和31	児933-cN88y	デジタル化図書 (館内)
62	床下の小人たち	メアリー・ノートン 作 林容吉 訳	岩波書店 1995. 4	Y9-1944	
63	床下の小人たち	メアリー・ノートン 作 林容吉 訳	岩波書店 1993. 8	Y9-253	
64	床下の小人たち	メアリー・ノートン 作 林容吉 訳	岩波書店 1983. 11	Y8-1154	
65	床下の小人たち	ノートン 作 井村君江 注釈	研究社出版 1971. 4	Y45-(71)-5 (本館)	
66	床下の小人たち	メアリー・ノートン 作 林容吉 訳	岩波書店 2000. 9	Y7-N00-126	
67	魔法のベッド南の島へ	メアリー・ノートン 作 猪熊葉子 訳 赤坂三好 画	学習研究社 1976. 1	Y9-N04-H199	
68	魔法のベッド南の島へ	ノートン 作 猪熊葉子 訳 赤坂三好 絵	学習研究社 昭和43	Y7-1227	デジタル化図書 (館内)
69	魔法のベッド南の島へ	ノートン 作 猪熊葉子 訳 赤坂三好 絵	学習研究社 1982. 7	Y7-9951	
70	魔法のベッド南の島へ	Mary Norton [著] 吉田[アキ]子 注釈	研究社出版 1974. 8	Y45-(74)-37 (本館)	
71	「もの」から読み解く世界児童文学事典	川端有子, こだまともこ, 水間千恵, 本間裕子, 遠藤純 編著	原書房 2009. 9	KE129-J2 ※	
72	ぼくらのジャングル街	タウンゼンド 作 亀山龍樹 訳	学習研究社 1969	Y7-1762	

食から見る「ロビンソン変形譚」の系譜

73	ぼくらのジャングル街	タウンゼンド 作 亀山龍樹 訳 ディック=ハート 画	学習研究社 [1976]	Y7-5690	
74	さよならジャングル街	タウンゼンド 作 亀山龍樹 訳 安井淡 絵	学習研究社 1970	Y7-2036	
75	Timothy of the cay	Theodore Taylor 作	Harcourt Brace c1993	所蔵なし	

レジュメ

創作フェアリーテイルの起源と現在

芦田川 祐子

I. フェアリーテイル（おとぎ話、fairy tale）とは

- ・「子供に聞かせる伝説・昔話など。『桃太郎』『かちかち山』の類。また、比喩的に、現実離れした空想的な話」（『大辞泉（増補・新装版）』（1998年）
- ・「昔話は口伝えされてきたおとぎばなしである」（→小澤 p.1）「語り方に一定の型がある。時代・場所・人物が特定されない。信じなくてよい話」（p.12）
- ・超自然の要素（“Faerie”→トーキン）を含む、比較的短い物語
- ・伝説、昔話、民話、妖精物語、フォークテイル（folktale）、メルヘン（Märchen）、童話

II. フェアリーテイルの種類

- ・語られるものと書かれたもの
- ・「口承民話」と「文芸おとぎ話」（→ザイプス pp.31-32）
- ・古典的と革新的、童話と反童話、子ども用と大人用、パロディ
- ・伝承フェアリーテイルと創作フェアリーテイル

III. 創作フェアリーテイルの起源

1. ヨーロッパ

- ・シャルル・ペロー『過ぎし日の物語集または昔話集・教訓つき』（1697）
- ・グリム兄弟『子どもと家庭の童話集』（1812-57）→エリス
- ・アンデルセン 童話（1835-72）
- ・フランス宮廷系とドイツロマン派系（Anita Moss, “Varieties of Literary Fairy Tale”. *Children's Literature Association Quarterly* 7.2 (1982): 15-17.)

2. イギリス

- ・チョーサー『カンタベリ物語』（c.1386-1400）
- ・スペンサー『妖精の女王』（1590-96）
- ・シェイクスピア『夏の夜の夢』（1595-96）
- ・セアラ・フィールディング『女教師』（Sarah Fielding, *The Governess*, 1749）
- ・エドガー・テイラー『ドイツ民話集』（Edgar Taylor, *German Popular Stories*, 1823）

IV. ヴィクトリア朝の創作フェアリーテイル

1. 教訓と楽しみ？

- ・キャサリン・シンクレア「すばらしいお話」(→『ねがいのかなう魔法のほね』所収：Catherine Sinclair, “Uncle David’s Nonsensical Story about Giants and Fairies” in *Holiday House*, 1839)
- ・ジョン・ラスキン『黄金の川の王さま』(John Ruskin, *The King of the Golden River*, 1841)

2. 杵物語

- ・フランシス・ブラウン『おばあさまの不思議な椅子』(Frances Browne, *Granny’s Wonderful Chair*, 1856)

3. ことば遊び・伝統茶化し

- ・ジョージ・マクドナルド『軽なお姫さま』(George MacDonald, *The Light Princess*, 1864)

4. キリスト教？神秘

- ・ジョージ・マクドナルド『金の鍵』(MacDonald, *The Golden Key*, 1867)
- ・D. M. M. クレイク『旅のマント』(Dinah Maria Mulock Craik, *The Little Lamé Prince*, 1875)
- ・オスカー・ワイルド『幸福な王子』(Oscar Wilde, “The Happy Prince”, 1888)

5. ナンセンス

- ・チャールズ・キングズリー『水の子どもたち』(Charles Kingsley, *The Water-Babies*, 1863)
- ・ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』(Lewis Carroll, *Alice’s Adventures in Wonderland*, 1865)
→ガードナー

6. 心理・教訓？

- ・ルーシー・レイン・クリフォード「新しいお母さん」(Lucy Lane Clifford, “The New Mother” in *Anyhow Stories*, 1882)
- ・クリフォード「木になったトニー」(→『旅のマント』所収：Clifford, “Wooden Tony”, 1892)

7. 算数・冗談・女性

- ・E. ネズビット「メリサンド姫」(→『ヴィクトリア朝妖精物語』所収：E. Nesbit, “Melisande”, 1900)
- ・ネズビット「最後のドラゴン」(→『ものぐさドラゴン』所収：Nesbit, “The Last of the Dragons”, 1900)

8. 悪・愚

- ・メアリー・ド＝モーガン「おもちゃのお姫さま」(→『ものぐさドラゴン』所収: Mary de Morgan, “The Toy Princess”, 1877)
- ・ド＝モーガン「フィオリモンド姫の首飾り」(→『ものぐさドラゴン』所収: De Morgan, “The Necklace of Princess Fiorimonde”, 1880)

9. 皮肉

- ・アンドルー・ラング『プリジオ王子』(→『幸福な王子』所収: Andrew Lang, *Prince Prigio*, 1889)
- ・F. アンステイ「妖精の贈り物」(→『ヴィクトリア朝妖精物語』所収) F. Anstey, “The Good Little Girl”, 1890)

V. 20世紀の創作フェアリーテイル

1. 梓物語・パロディ

- ・エリナー・ファージョン『年とったばあやのお話かご』(Eleanor Farjeon, *The Old Nurse's Stocking-Basket*, 1931)
- ・ファージョン「小さな仕立屋さん」(→『ムギと王さま』所収: Farjeon, “The Little Dressmaker”, 1938)
- ・ファージョン『ガラスのくつ』(Farjeon, *The Glass Slipper*, 1955)

2. 伝承ふう

- ・W. デ・ラ・メア「チーズのお日さま」(→『九つの銅貨』所収: Walter de la Mare, “The Dutch Cheese”, 1947)

3. フェミニスト

- ・ジョーン・エイキン「オウムになった海賊と王女さま」(→『魔法のアイロン』所収: Joan Aiken, “The Parrot Pirate Princess”, 1953)
- ・アンジェラ・カーター『血染めの部屋』(Angela Carter, *The Bloody Chamber*, 1979)

4. 暗黒

- ・タニス・リー「時計が時を告げたなら」(→『血のごとく赤く』所収: Tanith Lee, “When the Clock Strikes”, 1981)

5. ポストモダニズム

- ・ドナルド・バーセルミ「ガラスの山」(→『シティ・ライフ』所収: Donald Barthelme, “The Glass Mountain”, 1970)
- ・ジョン・シエスカ&レイン・スミス『くさいくさいチーズぼうや&たくさんのおとぼけ話』(Jon Scieszka & Lane Smith, *The Stinky Cheese-Man and Other Fairly Stupid Tales*, 1992)

6. 政治的風刺

- ・ジェイムズ・フィン・ガーナー『政治的に正しいおとぎ話』(James Finn Garner, *Politically Correct Bedtime Stories*, 1994)

VI. 創作フェアリーテイルの現在と未来？

1. 語り直し

- ・ドナ・ジョー・ナポリ『逃れの森の魔女』(Donna Jo Napoli, *The Magic Circle*, 1993)
- ・ゲイル・カーソン・レヴィン『さよなら、「いい子」の魔法』(Gail Carson Levine, *Ella Enchanted*, 1997)

2. メタフィクション

- ・ロ德里ック・タウンリー『記憶の国の王女』(Roderick Townley, *The Great Good Thing*, 2001)

3. 様々なメディア

- ・絵本、ファンタジー (小説)
- ・映画、テレビドラマ、ゲーム
- ・マンガ、アニメ

4. フェアリーテイルの宿命——規則性と多様性

創作フェアリーテイルの 起源と現在

芦田川 祐子



I フェアリーテイルとは

ご紹介いただきました芦田川と申します。本日はフェアリーテイルについてお話をさせていただきます。

まずフェアリーテイル、おとぎ話というのは何であるかというところから始めたいと思います。きっちりと定義することはできないのですが、例えば辞書を見ますと、「子供に聞かせる伝説・昔話など。『桃太郎』『かちかち山』の類。また、比喩的に、現実離れした空想的な話」とあり、「子供に聞かせる」というのがまず出てきて、それから転じた意味で、現実と違う話ということになっています。そして「伝説・昔話など」、とありますが、その昔話というのは何かといいますと、小澤俊夫氏は、『昔話入門』の中で「昔話は口伝えされてきたおとぎばなしである」と述べています。それからほかのところでは「語り方に一定の型がある」とか「時代・場所・人物が特定されない。信じなくてよい話」とも書いています。ここでの特色は、口伝えということですね。「口承文芸」という言葉がありますが、昔から伝わってきたものである、ということです。

それと少し違う感じの定義もありまして、トールキン (J. R. R. Tolkien) —日本ではトルキンと呼ぶ場合もありますが、『指輪物語』(*The Lord of the Rings*) を書いた人です—の『ファンタジーの世界：妖精物語について』では、「妖精物語とは、正しい英語の用法によれば、フェアリーやエルフについての物語ではなく、つまり妖精が出てくればいいというのではなく、「ひとつの国、あるいは状態をあらわす Fairy、すなわち Faërie についての物語」とされています。そして、このフェアリー、妖精の国というのは、「魔法」と訳せば、

当らずといえども遠からずではないか」ということでした。

そこで、曖昧ではあるのですが、これからお話をすることに当たって、どういうものをおとぎ話と考えていきたいかと申しますと、一応、超自然の一つまりトーキンが言っていた魔法のような一要素を含む比較的短い物語、としたいと思います。比較的短いといいますのは、後の方で結構長いものも出てきたりするからなのです。これらの物語、私がおとぎ話と呼ぶものは、時には伝説、昔話、民話とか、妖精物語、フォークテイル (folktale)、メルヘン (Märchen)、童話などと呼ばれることもあります。特徴としては、「一定の型がある」と小澤俊夫氏も言っていましたように、例えば「むかしむかし」で始まって、「めでたしめでたし」とハッピーエンディングで終わる、というようなことも言えるかと思います。

II フェアリーテイルの種類

フェアリーテイルがどのようなものかということをもた別な角度から見ますと、様々な種類があります。分け方がたくさんあり、例えば語られるものと書かれたもの、先ほどの口承文芸と書物になっているもの、という区別ができることもありますし、口承民話と文芸おとぎ話—これは後でもう少し説明いたします—という分け方もあります。また、古典的なものと革新的なもの、子ども用のものと大人用のもの、童話と反童話—これはメルヘンとアンチメルヘンと言われたりもしますが、悲しい結末になってしまったりする、壊れた感じの童話を反童話と称することもあります—、それからパロディ、伝承的なものと創作的なもの、というのが一般的な区別かと思います。

ザイプス (Jack Zipes) の『おとぎ話が神話になるとき』(Fairy Tale as Myth, Myth as Fairy Tale) という本があるのですが、ここで言っている「神話」というのは、神さまが出てくる神話ではなくて、人々が当たり前のものとみなすようになっているものです。そしてザイプスがおとぎ話の歴史を説明している中で、

今日おとぎ話と考えられるものは、実際は民話の伝統の一タイプにすぎず、^{ツァウバーメルヒェン}魔法の話がそれであり、多くのサブ・ジャンルをもつ。(中略)そして口承の^{コンテ・ド・フェ}魔法の話に基づく妖精物語は、宮廷社会での関心事、嗜好、役割などに焦点をあてた文芸おとぎ話に変容した点で、きわだった特徴を示していた。

と言っています。「ツァウバーメルヒェン」(Zauber-märchen)はドイツ語で、「コンテ・ド・フェ」(contes de fées)というのはフランス語からきています。

ですから、おとぎ話は、もともとは口伝で話されてきたものが書かれたのだと考えられます。宮廷文化に合わせて書き下ろされたことになり、これをザイプスは「盗用」と呼んでいます。口承伝統の中から盗用された、でもそこで終わらなくて、逆に口承伝統の方も文芸おとぎ話から盗用し返して、弁証法的に発展してきた、というわけです。そしておとぎ話というのは、子どもや、それからそれを読む人などを社会化する道具として使われてきた、ということです。

III 創作フェアリーテイルの起源

III-1 ヨーロッパ

それではいよいよ創作フェアリーテイルというものの話に入りましょう。まずヨーロッパの方から見ていきますと、いわゆる『ペロー童話集』一原題は『過ぎし日の物語集または昔話集・教訓つき』(Histoires ou contes du temps passé : avec des moralités)一があります。または『がちょうおばさんの話』と呼ばれることもあります。がちょうおばさんというのはマザーグースのことです。よくこの「教訓つき」というのを根拠に、昔の話は教訓臭が強かったけれど、だんだん現代にいくに

従ってそんなにお説教臭くない楽しい話が多くなってきた、と唱える説があるのですが、このペロー (Charles Perrault) の「教訓」というのを見ると、結構ふざけていたりしますので、必ずしも昔のものが説教臭いとは言えないと思います。

もう一つ、ペローと並んで有名なのが「グリム童話」です。『子どもと家庭の童話集』(Kinder-und Hausmärchen)というのが原題で、「子ども」というのを鮮明に出してきています。グリム兄弟 (Brüder Grimm) の主張としては、「民間伝承をそのまま記録した」ということになっていますが、毎回どんどん改訂されていって、七つ版が出ています。そもそもグリム童話集の編纂がロマン主義運動の一環として行われていて、ドイツという国、その文学、その根っこにあるおとぎ話というのを集めようという流れからきているので、ナショナリズムの運動の一環でもあったと思われます。

そしてこのグリム兄弟の主張について、エリス (John M. Ellis) という人が刺激的な説『一つよけいなおとぎ話—グリム神話の解体』(One Fairy Story Too Many: The Brothers Grimm and Their Tales)を出しています。この「一つよけいなおとぎ話」というのが、「グリム神話」と呼ばれているもので、つまりグリム兄弟が、昔の人の、長いこと伝えられてきていた話をそのまま書き下した、という説です。しかし、全くそんなことはない、とエリスは言います。なぜなら、まずその素材を提供した人々というのが、素朴な農民ではなかった、ドイツの人ではなかった、というのです。いろいろ調べていくと、おそらくその話のもとというのが、中流階級で読み書きができ、書物から影響を受けた可能性が高い、主に若い人々だったようです。その中にはフランス系の出身者や実際にフランス語を話す人々がいて、極めて重要な地位を占めていたということなので、まずその素材自体がドイツの口承伝統ではなかったし、それから先ほど7版にわたる改訂があったと申しましたが、その書き直しの過程で、例えば残酷さが削がれたり、いろいろな要素がなくなったりしています。そのような個人の手が加わっているという点でも、そのまま書き留めた、記録したとは言えないのではないかと、いうのです。ですから「グリ

ム童話」というのは、よく口承伝統の方に入れられますけれども、少し曖昧な、その中間くらいにあるものではないかと思われます。

それからもう一つ「アンデルセン童話」ですね。これはもっと個人的な話が多くなって、大体文句なしに創作フェアリーテイルの方に入れられることが多いものです。

だんだんと発展していくうちに、フランスでは先ほどのペローの流れが受け継がれ、オーノワ夫人 (Marie Catherine d'Aulnoy)、『美女と野獣』を書いたボーモン夫人 (Jeanne-Marie Leprince de Beaumont) などの、風刺とか機知的なもの、戯画化された社会の描き方、皮肉っぽい明るい話が現れ、ドイツではグリムの流れを汲んでいると思うのですが、ロマン派の物語、ティーク (Ludwig Tieck)、ホフマン (E. T. A. Hoffmann)、フーケー (Friedrich de la Motte Fouqué)、ノヴァーリス (Novalis) などの精神的で神秘的なものが出てきました。これらは必ずしもハッピーエンディングには見えない話も多く、あまり子ども向けとは言えないかもしれません。

III-2 イギリス

ヨーロッパからイギリスの方にまいりますと、もともと妖精が出てくる文学というのは、主流の英文学の作品にも結構ありまして、例えばこれは中世の文学ですが、チョーサー (Geoffrey Chaucer) の『カンタベリー物語』 (*The Canterbury Tales*) の中で一これはいわゆる「枠物語」形式になっていて、いろいろな人がそれぞれ得意な話を語っていくという形です。商人の物語というのがあり、ここでは「妖精の国」の王と女王が出てきます。名前はプルートルとプロセルピーナで、ギリシャ神話とも関係のある人たちです。それからエドモンド・スペンサー (Edmund Spenser) の『妖精の女王』 (*The Faerie Queene*) という詩ですが、その中でもタイトルにもなっていますように、妖精の女王をめぐって様々な騎士が活躍するというところで、グローリアーナという名前の妖精の女王が出てきます。また、シェイクスピア (William Shakespeare) の『夏の夜の夢』 (*A Midsummer Night's Dream*) はよく知られていますが、妖精族

のいたずら者のパックとか、妖精の王さまと女王さま (オベロンとティターニア) などが出てきます。妖精といってもいろいろありますが、多くの人がイメージする小さめで羽がついているものも、この辺りから盛んに描かれるようになってきたと言われています。

今までご紹介したものは特に児童文学ではなかったのですが、いよいよ児童文学とされる作品の方にまいります。セアラ・フィールディング (Sarah Fielding) の、私が知る限りでは日本語訳が出ていないのですが、『ガバナース』 (*The Governess*) という作品があります。「女教師」ということですね。家庭教師の女性のこともガバナースと言ったりしますが、この話では何人かの子どもたちを教えている先生です。これは少し変わっていて、先生がお話をするわけではなく、教わっている子どもたちの一番年長の子が他の子の面倒をいろいろ見て、そのガバナースの教えを受けながら他の子どもたちを教育していくという話なのです。その中で、一番年長の14歳の少女が皆に読んであげる話の中にフェアリーテイルがあります。「ヘーベール王女おとぎ話」という題がついているものです。その少し前にも、悪い巨人と良い巨人とかわいい小人が出てくる話がありまして、こちらもフェアリーテイルと言ってもよいのではないかと思います。ただ、ガバナースと他の皆のやりとりを見ますと、フェアリーテイルというものは、ただ巨人とか魔法とか妖精とかに目を奪われるのではなく、その中の教えを読み取らなければいけない、というふうに注意されています。先ほど、初期の文学が教訓的であったとは必ずしも言えないと申しましたが、これは教訓臭が強と言われても仕方ないかなと思います。それからエドガー・テイラー (Edgar Taylor) による『グリム童話』の訳が、『ドイツ民話集』 (*German Popular Stories*) というタイトルで出ています。これらはヴィクトリア朝以前ですが、19世紀くらいからフェアリーテイルの出版がかなり盛んになってきます。

IV ヴィクトリア朝の創作フェアリーテイル

ヴィクトリア朝の社会や文化を考えますと、近代化が起こってくる中で、それまでの古典的な伝

統などと、どのように折り合いをつけていくか、ということを考えている人が多かったように思います。文学と社会と歴史の関わりというのは、あまり単純に割り切れるものではないとは思いますが、傾向はあるようですので、それを見てみたいと思います。

ヴィクトリア朝の大事件としては、大博覧会と、ダーウィンの『種の起源』の出版があります。そして、科学技術や、教育、宗教に対する考え方、といったものが論争的になっていったと思います。文学の方では小説が盛んに出版され、読まれていました。今、皆さんがテレビを見るような感覚で、小説が読みあさられていたとも言われています。それからものの考え方として、子どもというものに焦点が当たってきます。この少し前から文学的にはロマン主義が興っているのですが、その中では想像力や子どもの純粋さといったものが重視されます。こうした流れで、このヴィクトリア朝後半辺りが、児童文学黄金時代の第一期と呼ばれることがあります。具体的にその作品を少し見ていきましょう。

IV-1 教訓と楽しみ

まずキャサリン・シンクレア (Catherine Sinclair) の「すばらしいお話」です。日本語訳は、講談社から出ていた大きめの本で、カラーの綺麗な絵がたくさん入っているもの (『ねがいのかなう魔法のほね』) に収録されています。訳では「すばらしいお話」となっていますが、原題は“Uncle David's Nonsensical Story about Giants and Fairies”、「デイヴィッドおじさんの、巨人や妖精に関するナンセンス話」というのがその直訳です。これは、ある小説の中で語られる1章ですが、初期のフェアリーテイルというのは埋め込まれた形のものも多くて、独立して出版されるのではなく、小説の中で誰かが誰かに語る、というような形のものが多いのが興味深いところかと思えます。

このお話は、陽気なおじさんから、ローラとハリーといういたずらっ子たちに向けて語られます。その出だしのところが、

ずっとむかしのことです。そのころの子どもた

ちは、いまの子どもたちとは、とてもちがっていました。そう、頭はよくないし、いい子でもなし、ものわかりもよくなかったのです。

となっていて、「むかしむかし」で始まる普通のフェアリーテイルを踏襲してはいるのですが、まず昔の子と今の子と比べているのです。ローラとハリーのことを考えますと、今の子が昔の子と違っているとはあまり言えない、そういうアイロニー (皮肉) が初めからあります。

ここで出てくる人物の名前が「本ざらいくん」で、この人が、「のらくら妖精」か「まじめ妖精」のどちらかを選びなさい、と言われます。この子は怠け者で大食漢なので、のらくら妖精の方について行ってのらくら城で過ごしていますが、そこに「巨人ひっさらい」というのがやって来てさらわれてしまいます。そしてまじめ妖精に助けられて改心する、大まかにいうとそんな話で、結局本ざらいくんは成長して、「ティモシー学問ずき卿」というふうに名前も変わってしまいます。これは教訓的といえば教訓的、良い人はこうで悪い人はこうだと言っているようにも見えますが、それだけではなくて、ナンセンスカルストーリー (Nonsensical Story) という題のように、少し変な要素も入っています。例えば巨人の描写ですが、

そのせの高いことといたら、そびえたつ山のいただきから、反対がわをのけぞるくらいでしたから、じぶんのかみの毛をとかすのに、はしごをかけてのぼっていかなくてはならないしまつでした。

このべらぼうに大きな巨人は、しょくよくぞうしんのため、毎朝、きまって、朝ごはんまえに、世界をひとまわりします。このさんぽがすむと、海を湯こぼしにして、大きなみずうみをつかってお茶をいれることにし、やかんをベスピアス火山にかけて、湯をわかします。

というように、誇張して笑いを取るような部分もあります。

それからもう一つ、ジョン・ラスキン (John Ruskin) の『黄金の川の王さま』 (The King of the

Golden River) という作品があります。この翻訳は「妖精文庫」というシリーズの一つで、シリーズは全部で5冊出ているのですが、それぞれいくつかのおとぎ話が入っています。ヴィクトリア時代のものを読むにはこれと、それから後で紹介する『ヴィクトリア朝妖精物語』があるとかなり網羅できるかと思います。このラスキンの話はもっとまじめなトーンです。始まりのところが、

シュティリアの、世間から切り離されたような山奥に、その昔、おどろくほどもぐみ豊かにあふれる谷間がありました。

となっていて、このシュティリアとはオーストリアだと思うのですが、出てくる三人兄弟の名前も、シュワルツ、ハンス、グルックというふうに、ゲルマン系、ドイツっぽい名前です。先ほどのドイツのロマン派の流れを汲んでいると言えますが、ここに風という自然のものが、人間というか、小人のような形で現れます。「郷土、南西風」という不思議な小人が登場し、三人兄弟の上の二人の腹黒さに怒って仕返しをします。この南西風はそこで出番が終わってしまい、その後「黄金の川の王さま」という存在が出てきます。そして、この王さまが言うには、

「ある者が黄金の川の源が見える山の頂きに登って、川の源に聖なる水を三滴落とすと、その者にとって、その者一人にとって、川は黄金に変わる。」

ということで、三人の兄弟が順番に出かけて行って、上の二人は失敗します。三人とも聖水を持っていて、途中で老人とか子どもとか犬とかが出てきて、のどが渇いて死にそうなのでその水を下さい、と頼むのですが、上の二人はあげないのです。三人目はそれをあげたので、自分の水が一滴もなくなってしまうのですが、最後に黄金の川の王さまに会って、そこでユリに露がのっていたのをもらって垂らすことができる、という結末です。

やはり教訓的なところはあり、上の二人の水は汚れていたというので、水を川に垂らした時に二

人は黒い岩に変えられてしまいます。そして三人目が垂らすと、それまで干上がっていた水が再び宝の谷に流れていき、最後は実り豊かになって、「かつてむごい心によって失われた恵みも、愛の心によって蘇ったのでした」と、キリスト教的な慈悲の心というのを大事だと言っているように見えます。同時に自然、山とか川とかというものの恵みにも注意を向けさせている、とも考えられます。

IV-2 杵物語

もう少し時代が下ってきますと、フランシス・ブラウン (Frances Browne) の『おばあさまの不思議な椅子』(*Granny's Wonderful Chair*) という本があります。これも完全な日本語訳は出ていないと思うのですが、9章に分かれ、“Introductory”と“Prince Wisewit's Return”—誰かが戻ってくるのです—の間の七つの話が、それぞれ一つずつフェアリーテイルになっていまして、7晩にわたって、おばあさまが旅に出るときに残していった不思議な椅子が宮廷で語っていくという話です。この出だしが、

古い昔、妖精たちが世の中にいたころ、あるところに小さな女の子がいました。その子はたいそう色が白くて見目うるわしかったので、雪花 (スノーフラワー) とよばれていました。

というもので、これは典型的な出だしだと思うのですが、「妖精たちが世の中にいたころ」というふうにその昔のことを定義していて、つまり今はもう妖精はいないということを含んでいます。その終わりのところでもこう言っています。

この話を読んでいる良き少年少女たちよ—これははるか昔のことです。(中略) もはや丘や森で妖精たちが踊ることはありません。妖精たちを脅かしたのは、学校のざわめきだと言う人もいれば、工場の騒音だと考える人もいます。

だから学校とか工場とかそういうものが、近代的、現代的なものとして出てきているのですね。

けれども妖精を見た人がいるという話は長いこと聞かれませんが、ただ、デンマークのハンス・クリスチャン・アンデルセンという人は別で、すばらしい妖精物語を語るのに、妖精たち自身から聞いたに違いないと言われています。

というわけで、確かにこのフランシス・ブラウンの話はアンデルセンの話に似ている、キリスト教的な倫理にのっとった話が多いとも言えますし、構造としてはアラビアンナイトのように、その枠もおとぎ話になっています。つまり、おばあさんの不思議な椅子がお話を語ってくれるのですが、その椅子というのが魔法をかけられた王子さまだったということで、最後に復活するのです。このようなきちんとした構成の話もあります。

IV-3 ことば遊び・伝統茶化し

ジョージ・マクドナルド (George MacDonald) はおとぎ話、フェアリーテイルの中ではかなりの大家とされていると思いますが、『軽いお姫さま』(The Light Princess) という作品を書いています。これも「妖精文庫」の中に入っています。物語の中がいくつかの章に分かれていて、中編とっててもよい作品です。出だしのところが、

昔むかしのこと、あんまり古い話なので、一体いつのことだったか、すっかり忘れてしまったくらいですが、あるところに子どものいない王さまとお姫さまがありました。

と、「昔むかし」というのはよいのですけれど、この語り手が、あまりに古くていつのことか忘れてしまった、と少しふざけているような感じがします。実際、軽い感じの語り口調のところも多いのです。この話はよくある洗礼式の呪い、「眠り姫」などに見られるものですが、そこから始まっています。

この幼子が洗礼を受ける日が近づいてきました。王さまは招待状をすべて、自分の手で書きました。もちろん、だれかが忘れられました。

この「もちろん」というのが、これまでのフェアリーテイルの伝統ですよ、と強調しています。子どものいない王さまとお姫さまからようやく生まれたのが女の子、お姫さまなのですが、その子にかかった呪いは、「心も身体も軽くなってしまえ」というもので、その「軽さ」がいろいろな事件を引き起こします。例えば王さまとお姫さまがこのような言い争いをしています。そこには言葉遊びがあって、日本語に直すのは少し大変な面もあるのですが、見てみましょう。

「心も軽く陽気なことは、たしかによいことじゃ、わが子にせよ、よその子にせよ。」

これが王さまが言っている台詞です。

「おつむが軽くて思慮のないのは、よくないことですわ。」と、預言者のように将来を見通したお姫さまは、答えました。

「手さばきが軽く器用なのはよいことじゃ」と、王さまは言いました。

「指使いが軽くて手くせが悪いのはいけませんわ」と、お姫さまは答えました。

このように、「軽い」という意味がいろいろあるのですが、実際このお姫さまは放っておくと空中にふわふわ浮かんでしまいます。それから泣くことがないとか、人の言うことを真面目に受け取らないとか、身も心も確かに軽い人なのですね。このお姫さまがある王子さまのお陰で最後は重さを取り戻す、という流れなのですが、王子が出てくるところで、またおとぎ話の伝統というものをちょっと茶化しています。

ある日、王子は深い森のなかで、お供を見失ってしまいました。こういう森というのは、小麦からふすまを取りのぞくふるいのように、

王子さまとお供の人を表すにはおかしな比喻だと思ってしまうのですが、とにかく、

王子を従者から引き離すのに大変便利なもので

す。そうして、王子たちは運命にしたがって歩みはじめるのです。この点で、王子たちはお姫さまがたよりも有利な立場にあります。お姫さまはみな、少しの冒険も味わわないうちに、結婚させられてしまうのですから。お姫さまがたまには森で迷子になってみればよいのにと、わたしは思います。

と言っています。それまでのおとぎ話に描かれた男女の待遇差への批判、とまではいきませんが、注意喚起がなされていると思います。

この『軽いお姫さま』は、軽々しい調子で始まっていますが、王子さまに出会って救われる辺りからだんだん真面目な感じになっていて、フランス系とドイツ系両方が混ざったようなお話になっています。

IV-4 キリスト教・神秘

もっと真面目なものに、同じマクドナルドの『金の鍵』(*The Golden Key*)という作品があります。これは岩波少年文庫に入っています。おそらく私の知る中では、この時代の最も神秘的な話だと思うのですが、

あるところに、一人の男の子がおりました。夕暮れどきになると、その子はいつもじっとうずくまって、大伯母さんが聞かせてくれるお話に耳を傾けました。

大伯母さんは、もし虹のはしっこにたどりつくことができれば、金の鍵が見つかるんだよ、と話してくれました。

と始まっていて、いろいろなシンボルが出てくるように解釈できる話だと思います。まずこの男の子がお話を聞いて、その影響で彼の旅が始まるとも言えるので、物語とはどういうものかが、初めの方で示唆されているかと思えます。

この話では、男の子がモシー、女の子がタングルというあだ名で、二人が住んでいるのが妖精の国の近くのようですが、それぞれ妖精の国に行き、「おばあさま」と呼ばれている人に会います。このおばあさまというのが、マクドナルドの他の話

にもよく出てくる女性の妖精のような人で、すごく年を取っているけれど綺麗な見かけをしていて、とても良い人なのです。その人が空を飛ぶ魚みたいなものを飼っていて、それに導かれてタングルがおばあさまのもとにやってきます。その時におばあさまは、このように言います。

「それぞれにその時ってものがあるから、みんなそれを待たなくちゃいけないのよ。あなたや私とおんなじにね、タングルちゃん。」

この妖精の国にはいたずら者の妖精がいるのですが、その中でおばあさまは、いたずらをするわけではなくて、良い人として出てきています。

モシーとタングルは二人で旅に出て、影の海のような所を渡ります。谷みたいになっていて、影しか見えなくて、上を見ても何かぼんやりした感じだけれど、下を見るといろいろな影が動いている。全てがとても美しい影で、その影が来る国に行きたいなと二人で思います。そしていつの間にか二人ははぐれてしまって、タングルの方が海の老人、大地の老人、火の老人の三人に順番に会います。海の老人というのは、初め老人のように見えるのですが、タングルがお風呂に入った後で見ると中年の人に見えます。大地の老人は若者の恰好をしています。火の老人が一番年を取っている人、この世で一番年取った人なのですけれども、見かけは赤ちゃんです。そして、タングルは火の老人に会った時に何かを悟るのです。火の老人の洞窟に来た時に、

タングルは、自分が大地とそのありとあらゆる働きの秘密のまっただ中にいるのだという、目のくらむような確信に満たされました。(中略)タングルにはいまやすべてが理解でき、何もかもがおなじ一つのことを意味しているのがわかりました。しかし、それを言葉で言い表わすことはできませんでした。

と、大変よく直観で悟っている様子です。

一方モシーの方は、先ほどタングルがお風呂に入ったと言いましたが、そのお風呂と同じような

ものに入って、それが死だということを知ります。

「そなたがいま味わったのは、死だ」と、老人が言いました。「どうだ、うまいか？」

「うまいです」と、モシーは答えました。「生より、もっといいくらいです。」

そしてその死というものは、老人によれば、

「生がより深まっただけなのだ。—これでそなたの足は、水に穴を開けんでもすむ。」

というわけで、海の上を水に穴を開けないで歩いていくことができ、その歩いて行った先にタングルが待っているのです。この水に穴を開けないなどというのは、聖書のエピソードに通じるものでもあると思うのですが、キリスト教にとどまらない、深いものがこの話全体にもあるように思えます。

そして結末は、二人が金の鍵で扉を開けて螺旋階段を上っていくと、やがて虹の中にいたということ、

そうやって昇っていけば、やがては影たちのやってくる源の国に着くのだということが、二人にはわかっていました。

そして、いまごろはもう、とっくにそこに着いていることでしょう。

で終わっています。

同じような傾向のもので、今のものほどにはいろいろなシンボルや、何だろうと考えさせられるような要素はないと思うのですが、クレイク (Dinah Maria Mulock Craik) の『旅のマント』という作品があります。これも「妖精文庫」に入っています。原題を直訳しますと「小さな足の悪い王子と旅のマント」(*The Little Lame Prince and His Travelling Cloak*) です。ノーマンズランド (Nomansland)、つまり誰のものでもないどこにもない国の、ドラーという王子さまが、赤ちゃんの時に乳母に落とされる事故で足が悪くなってしま

います。その人の一生の物語なのですが、おばあさんと言われる妖精の名付け親が出てきまして、いろいろ助けてくれます。でも歩けるようにはならないのです。そしてドラーは苦しみを味わっていくのですが、途中、語り手の言葉で、

この話には、ありきたりの妖精物語よりももっと深い意味があるのかしらと思っている人がいるのなら、私は、ありますと言うでしょう。

と、この話に何か深いものがあるのですよ、とっています。ドラーは、一時期は悪い叔父さんのせいで塔に閉じ込められていたのですが、最後は王さまに復帰して良い政治をします。そして最後に、「みなさん、私は疲れました。休みたいです。(中略) 家に帰らせて下さい」と言って去っていきます。後継ぎの人はいるので大丈夫なのですけれど、「これから遠くへ行きます。二度ともどって来ないと思います」と言って、その旅のマント、おばあさんのくれた空飛ぶ絨毯みたいな物があるのですが、それに乗って行ってしまうのです。最後に語り手が述べるのは、

王さまがどこへ行ったのか、誰といっしょだったのかは、誰にも分かりません。(中略) でもただ一つだけ、確かなことがあります。それは、今どこにしようとも、王さまはこの上なく幸せだということです。

という話です。

また、これと少し似た感じのものが、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde) の『幸福な王子』(*The Happy Prince*) です。これも、人間の世の中の醜さや苦しみを前面に出しながら、その中でも最後に救いがあると思わせるようなものです。幸福の王子が像になっているのですが、生きていた時よりも楽しく暮らしていたので、幸福な王子と呼ばれていました。けれども死んでしまっただけで、高い所に上げられ、「この町のみにくさやあわれさが全部見える」と言っては、その町のいろんな人を助け、最後はその像が汚いからといって壊さ

れてしまうのです。が、それによって神さまに、幸福な王子の鉛の心臓と、死んだ燕—その王子の友だちです—が一番貴重だと認められる、という話です。

IV-5 ナンセンス

また趣向が変わりまして、「ナンセンス」としてありますが、これはルイス・キャロル (Lewis Carroll) が有名です。けれども、この『不思議の国のアリス』 (*Alice's Adventures in Wonderland*) 自体は、必ずしもフェアリーテイルとは思わない人も結構いまして、なぜかといういわゆる「夢落ち」で、夢だったというのが最後に分かるところがあるからです。しかし、これは教訓臭のない最初の児童文学ではないかと言われています。

中を見ますと、この版では様々な注がついていて、ナンセンスと呼ばれはしても、いろいろな解釈ができ、うんちくを傾けたくなくなるところがたくさんある作品です。アリスの話の中ではおとぎ話に言及されることはほとんどないのですが、アリス自身が、

「おとぎ話を読んでた時、そんなこと起こりっこないと思ってたけど、今自分はほら、こうしてそのまん中にいる！私のこと書いた本がなくなっちゃあ、そうよ絶対になくっちゃあ！」

と言っているところがあります。ナンセンスといいますと、意味がないというものではなくて、不条理なこととか、言葉をいろいろ自分で作ったりとか、あと意外なものを変な順番、ごちゃごちゃの順番で挙げているように見えるリストだとか、韻律は合っているけど意味がよく分からない詩だとかがあって、ユーモアを引き起こす効果があります。

フェアリーテイルとしては、チャールズ・キングズリー (Charles Kingsley) の『水の子どもたち』 (*The Water-Babies: A Fairy-Tale for a Land-Baby*) という作品もあります。これは副題を直訳しますと「陸の子どものための妖精の物語」です。煙突掃除のトムという少年が水の子になって、いろいろな冒険をしながら、「シタトオリシカエス大妖

精」とか、「サレタイコトヲシテアゲル妖精」とか、そういう人たちに会いながら成長していくという話です。そして、水の子になるというのが死ぬということと同じように書かれているとも見えるのですが、最後にはまた学校に戻っていたりしますので、その辺はよく分かりません。

語り手がものすごく饒舌で、脱線を繰り返して、その辺を削ってほしいと言う人もいますが、この脱線こそがおもしろいと思います。例えば「ナカミアツロ教授の療法リスト」というナンセンスなリストですが、これはある教授が、水の子どもをはじめとする、存在しないはずのものを信じこむ病気になったので、それを治そうとして周りの医者が寄ってたかって様々なことをするので。「金属牽引器」、「ホロウエイの軟膏」、「動物電気」など、謎めいたものが沢山リスト化されています。それから、

わたしが話しているのはおとぎ話だ。読んで楽しむための、つくり話だ。だから、書かれているのがほんとうのことだとしても、きみは信じなくてもかまわないのだよ。

というふうに途中で言ったり、最後にも言ったりしているのです。おとぎ話というのが、本当のことかもしれないけれど、作り話で、信じなくていいというのです。

最後には「教訓」という題の文がついていて、けれどもこれもペローの作品みたいに、ちょっとふざけた教訓なのです。

この物語から学べることは、三十七だか、三十九だか、わたしも正確には知らないけれど、ずいぶんたくさんある。だが、少なくともこのひとつだけは忘れないでほしい。

と言って、何かと思えば、イモリをいじめるなどというようなことなのです。この話の中には進化論に対する関心もありまして、トムが水の子になるとか、また水の子から陸の子になるとかというのは、良いことをするか悪いことをするかにかかっているのですけれど、そのイモリたちももしかしたら

やがて逆に進化してくるかもしれない、と最後に言っています。そういう時にやたら細かい数字が出てきて、その進化にかかるのが「三十七万九千四百二十三年九月と十三日二時間二十一分」だという、これもナンセンス数字として捉えられますが、異様に細かいのも笑いを誘うところかと思えます。

IV-6 心理・教訓

心理と教訓ということで、この「新しいお母さん」(“The New Mother”)という作品はあまり知られていないと思うのですが、奇妙な話なのでぜひ紹介させていただきたいと思えます。(国際子ども図書館の)所蔵なし、とリストの方には書いてありますが、最近昔の本をそのまま複製して出版しているものが結構ありまして、これもその一つです。*Anyhow Stories: Moral and Otherwise* という本に入っています。もう一つこの同じ作者で「木になったトニー」(“Wooden Tony”)というのがありまして、これは先ほどの「妖精文庫」に入っていて(『旅のマント』所収)、そのあとがきで「この作品の、現実と空想の奇妙なまじりあいは、二十世紀のフランスのシュールリアリズムの雰囲気を取っているようにもみえる」と評されています。

「新しいお母さん」では、「青い目」と「七面鳥」という名前の姉妹が出てきて、赤ちゃんとお母さんと一緒に、森の小屋に住んでいます。お父さんは海に出ていると書かれています。この姉妹が村に出かけて行って、お祭りの日か何かで、「村娘」と称される人に会うのです。それまで一度も会ったことがない人なのですが、何か奇妙な楽器を持っています。「ペアドラム」—ペアというのは洋梨のことです—に小さい箱がついていて、その村娘が「ここには小さい男の人と女の人が入っていて、これは悪い子にしか見せてあげません」と言うのですね。そこでこの青い目と七面鳥は、「私たち悪い子になる」と言っているのですけれども、村娘はそのたびに、「いや、まだそんなに悪くない」と、見せてくれません。

その姉妹のお母さんがある時、二人が悪い子になったらどうするかという話をしている、「あな

たたちを置いて出て行って、ガラスの目と木のしっぽを持つ新しいお母さんを家に送らなければなりません」と言うのです。この子たちは、その小さな男女が見たくてたまらないので、本当は悪い子ではないのですが、一所懸命悪い子になろうとします。それで結局お母さんは赤ちゃんを連れて出て行ってしまっていて、その後、ガラスの目と木のしっぽを持つ新しいお母さんというのが本当にやってきてしまい、二人は逃げ出して森に行きます。結末は、「二人はまだそこにいるのですよ、我が子らよ」。語り手が親として、子どもに語っている形式なのです。

そして新しいお母さんもまだ小屋にいますが、窓もドアも閉ざされて、中がどうなっているかは誰にもわかりません。(中略)時にはまぶしい光が窓からさして、新しいお母さんのガラスの目からの光だということが二人にわかります。また、奇妙な鈍い音がして、木のしっぽを床に引きずる音だとわかります。

これが終わりのところなのですが、この話を、子どもに恐怖心を植えつけるとか、つまり悪いことをするとお母さんがこんなになってしまうよと、母親に居てほしいという根源的な気持ちを裏切るような不安を植えつける、というような批判もあります。そして、なぜガラスの目と木のしっぽなのかというのも分からないのですが、無生物の要素であり、何かとても奇妙なイメージが心に残る話だと思います。

「木になったトニー」の方は、「木偶の坊」と呼ばれているトニー—英語では「木になった」も「木偶の坊」も“wooden”で同じ言葉です—という、どこかぼんやりしている少年がいて、歌が得意なのです。そして彼がお母さんに言うのが、遠くに行ってお小さくなりたい、ということです。なぜなら遠くの人には小さいから、と言うのですね。小さく見えるから実際小さいのだ、とその子は思っています。それで、そうしたらいろいろ怒られたりしないでしょう、と言って、この子はある商人に連れられて遠くに行くことになります。その中で商人が何か楽器を弾いていて、それに従ってト

ニーの歌がその楽器や世界の方に移って行ってしまっていて、同時に彼自身はだんだん小さくなって木になって、最後にはオルゴールみたいな物の中に入ってしまうという話なのです。けれども、その木になりつつあるところが、

機械的に、まるであやつり人形がその糸を引っ張られたように、トニーは歌いだしました。

と、実際にあやつり人形みたいになるのですが、それがトニーにとって幸せなのか悲しいのかはよく分からない書き方です。

最後は、そのトニーのお父さんとお母さんと思われる人たちがトニーを見て、お母さんの方は、あれはトニーよ、と言うのですが、お父さんは、いや違うよと答えます。お母さんはさらに、私にはトニーが必要なよ、と言いき、お母さんにとっては悲しい終わり方です。これも親子関係についての話とも読めると思うのですが、他のフェアリーテイルにはあまりない、ちょっと奇妙な、心理的な不安を起こさせるような物語です。

IV-7 算数・冗談・女性

もうヴィクトリア朝も後期、最後の方に近づいてきたところで、ネズビット (Edith Nesbit) の作品です。いろいろ書いていますが、算数の話が結構あって、ちくま文庫の『ヴィクトリア朝妖精物語』という本に、「メリサンド姫—あるいは割算の話」(“Melisande: or Long and Short Division”) が収録されています。話の始まりは洗礼式でのめごとです。「眠り姫」を意識しているとは思いますが、王さまは「妖精は一人たりとも招待しない」と言い、王妃さまは「妖精たち全員が怒らなければよろしいのですが」と返します。すると実際に妖精全員が怒ってしまい、呪いがかけられる、というところから始まります。その呪いはお姫さまが禿げになるというもので、それに対して王さまが自分の名付け親からもらった願いごとを一つ取ってあって、メリサンド姫が大きくなったとき、それを使うことにします。そこでメリサンド姫が言う願いごとが、

「わたしの頭に一ヤードの金髪が生えますように。そして、金髪は毎日一インチずつのびて、切った場合にはその二倍の早さでのびますように」

という願いです。これは結構大変なことになります。伸びると切る、そうすると倍の早さで伸びてしまっていて、それをどうやって止めるかという話になります。

ここにも王子さまが登場して、今まで姫から髪を切り離していたけれども、髪から姫を切り離すことにします。ところがそうすると今度は姫の方が伸びてしまうのです。巨大な人になってしまい、その島にはいられなくなって海に降りるので、ちょうどその時、別の国の軍隊が攻めてきたので、姫が島を移動させて別の所に持って行ってしまうという、ほら話みたいなところもあるのですが、このお姫さまは少しも嬉しくなくて、何がしたいかという、「普通の大きさに戻って愛しい人と結婚する」ことだった、という話で、男女の役割としては伝統的と言えるかもしれません。結局どのように解決したかという、秤を使ってどちらがより重いかわからない状態で髪を切ると、両方伸びるのが止まった、ということです。

同じネズビットの作品で「最後のドラゴン」(“The Last of the Dragons” 邦訳は『ものぐさドラゴン』所収) は時代に意識的です。初めのところが、

昔ドラゴンは、今でいうバスと同じくらいよく人に知られ、危険なものとなみなされていた、というのはもちろんご承知でしょう。

というのですが、バスというのはその当時の現代的な乗り物で、ドラゴンの方はもう昔のもので、いわゆる絶滅危惧種みたいなものとして出てきています。

男女、つまり王子さまと王女さまの役割も少し普通と違ってしまっていて、王女さまは剣の練習を一所懸命して、「ヨーロッパで一番強く勇敢で剣術の巧いけど賢い王女さま」になります。すると王子さまがやってきて、

青白い顔をして、目は大きく頭の中は数学と哲学のことでいっぱいでしたが、残念なことには、剣術の練習はさぼっていました。

ということですので、練習すれば上手になるがしないと駄目だ、という点では、生まれと育ち、その育ちを大事にしていると言えますし、男性が女性を助けるという伝統的な役割とは、少し違ったところがあります。

そして最後のドラゴンに二人で会うと、ドラゴンは王女さまなんか知らない、と言うのです。何が好きかという、「さん」をつけて呼ばれたい、親しくしてほしい、ということです。このドラゴンの好物はガソリンで、王女さまじゃなくてガソリンの方がいいとも言うのです。ドラゴンは二人のペットになって、フィドという名前をもらいます。そして子どもたちを背中の座席に乗せて人の役に立っていたのですが、最後に、もう今の時代は機械のことが多い、と誰かが言ったのを聞いて落ち込んで、「もっと時代遅れでないものに変えて下さい」と頼んだ結果、「最初の飛行機になった」というのが落ちです。近代的な機械というものに、もうそろそろ関心が移っているのですね。

IV-8 悪・愚

同時に、人間の暗い面にも一先ほどのクリフォードの作品も不思議なものでしたがもう少しダイレクトな感じで、悪さ、それから人間の愚かさなどにも焦点が当たってきます。

例えばメアリー・ド＝モーガン (Mary de Morgan) の作品、「おもちゃのお姫さま」(“The Toy Princess” 邦訳は『ものぐさドラゴン』所収) です。出だしで「一〇〇〇年以上もむかしのお話です」というふうに一応年代を限定しており、「地球のちょうど反対側にある国で」と、地球にあるということも言っています。だからおとぎの国ではないのかもしれませんがね。その国で、「人々がみなとても礼儀正しくなり、お互いにほとんど話しもしなく」なって、みんな「どうぞ」「いいえ」「はい」「そうです」くらいしか言わなくなった、という設定です。

そこの王女ウルスラ姫というのがそれに耐えら

れなくて、妖精の名付け親タボレットに漁師の所に連れて行ってもらい、そこで幸せに育つ、というような話なのですが、そのウルスラ姫を連れていく時に、代わりに人形を置いていくのです。人形のウルスラ姫は先ほどの四つの言葉しか言わないのですが、宮廷の人はすり替えられたのに気づきません。ある時タボレットが、ウルスラ姫が漁師の息子と結婚したがつているのを知って、それでは宮廷の人にも本当のことを知らせなければと思っただけで行くのですが、宮廷の人はみんな、人形の方がいいと決めるのです。タボレットは笑い出してしまって、「あんたたちは馬鹿でまぬけの集まりだよ」と言って、本物のウルスラを連れて帰って、人形をそのまま置いていきます。それで、人間の方も人形の方もそれなりに幸せに暮らしました、という感じで終わっています。

「フィオリモンド姫の首飾り」(“The Necklace of Princess Fiorimonde” 邦訳は『ものぐさドラゴン』所収) に登場するフィオリモンド姫は、黒魔術を使う本当に悪いヒロインです。そして意地が悪く、とても美人なのですが、その美しさというのも悪い魔法で得たものだということになっています。この人は、求婚してくる王子さまや王さまを宝石玉に変えて、首飾りにつけて喜んでいるのですが、召使いがそれに気付いて、ある王子とその従者のジャーベスという人が来たとき、そのジャーベスのおかげで本人が宝石玉に変えられてしまって終わる、という話で、それが彼女自身の選んだ罰ということになっています。「悪い女性」というのは文学的にもいますが、フェアリーテイルでは主人公として出てくることはあまりなかったと思います。この話では一応最後には罰せられて、良い者と悪い者は区別されています。

IV-9 皮肉

風刺の利いたものに、アンドルー・ラング (Andrew Lang) の「プリジオ王子」(“Prince Prigio” 邦訳は『幸福な王子』所収) という作品があります。これは、利口すぎる王子、つまり「利口すぎる人間になる」という呪いをかけられた王子さまの話です。利口すぎる人というのは誰にも好かれず、というのが人間の本性でしょうか、本当の

ことを言われると気に入らない人が多い、というようなことを、語りの中でチクリと皮肉ったりしています。それから、「七リーグ靴」—フェアリーテイルに出てくる魔法のアイテムの一つで、伝統的に一步步くと七リーグ進むと言われる靴—について、普段はそうではなくて、行きたい時だけそうなるんだ、というような、従来の話の細かいところがどうなっているのかを理屈っぽく考えるような要素もあります。

このプリジオ王子の話の最後の方で、王子の妻がこう言います。

「願かけ帽子をおかぶりになって、他の人たちとあんまり変わらないくらいに、利口でないようにしてくれ、とお願いして下さらない？ そうすれば、みな、あなたのことを大好きになりますわ！」

利口すぎると好かれなから好かれてほしい、というのが妻の願いなのですが、王子の方は「どんな夫も、妻にたいする秘密のひとつやふたつは、もっているものだ」と言って、「他の人たちと同じくらい、利口でないように見えるようにしておくれ！」と願います。そしてそうになりました、と終わっています。これはフランス系の妖精物語の流れを汲む、風刺、皮肉に満ちた話になっていると思います。

もう一つ、「妖精の贈り物」(“The Good Little Girl” 邦訳は『ヴィクトリア朝妖精物語』所収) というのは、自分で良い子と思っている少女の話です。この子はまだほんの子どもだったけれども、

美しいおとぎ話を山ほど読破していたので、子供らしい無邪気な意見や範となる初々しい行動、あるいはその双方が折よくひとつとなった場合には、そうしたことどもの大人におよぼす矯正力がいかに強力であるかを知っていた。

とあるように、周りの墮落した大人を自分の力で良い人にしよう、という高い志を持っているのですが、あまり皆に相手にされない女の子です。そ

して、その子が妖精に会って、何か人のためになることを口にするると宝石が口から出るようにしてあげる、と言われます。ところが、家族は皆それをビー玉やアメ玉だと思うのです。それで怒ってしまって、そうこうするうちにマーガリン叔母という人の所に行くと、この叔母さんは喜んでその宝石を拾います。しかしその宝石は偽物だったので、その叔母さんの所も叩き出されてしまいます。その帰りに妖精に会って、

「おまえさんのその徳とやらがまがいものだったってことはないのかい？ (中略)

お嬢ちゃんの年頃の女の子は、自分では気がつかない欠点何かしらあるんじゃないかね。」

と言われます。その裏には、人間は成長していくとだんだん良くなるものという考え方があるのではないかと思います。全体としては、こうした善悪や成長への関心が、ヴィクトリア朝の作品の特徴です。

V 20世紀の創作フェアリーテイル

20世紀というのは、世界大戦や、「無意識」に注目したフロイト (Sigmund Freud) の精神分析、ソシュール (Ferdinand de Saussure) の言語学と、物事の「中心」が分解されていく考え方が主流になっていったかと思えます。それに従っていわゆるマイノリティや、人種、性、階級といったものに関する政治的立場への意識が高まっています。そして、世の中がメディアなどの影響で均一になっていく一方で、多様化も進んでいくという複雑な状況でもあります。

V-1 枠物語・パロディ

そのような中で出てきたファージョン (Eleanor Farjeon) の作品は、日本では作品集も出版されてよく知られています。

『年とったばあやのお話かご』(The Old Nurse's Stocking-Basket) は、ある乳母の経験談として語られています。昔、私が誰々の乳母をしていた時こうだったのよ、というふうに靴下を繕いながらお話をしてくれるのですが、靴下の穴の大きさに

合わせてお話の長さが決まるので、先ほどの『おばあさまの不思議な椅子』は結構端正な感じで話が進んでいきましたけれども、これは時々ひねっているのです。例えば、ある赤ちゃんが、世界一小さい赤ちゃんだったのかどうか、あまりにも小さくて、お母さんにも見つからないしその乳母にも見つからなかった、という話があって、その赤ちゃんの名前がリップです。すると、

「リップの話はないんです。(中略)
リップなんて、いなかったんだと、わたしは思うけど……ちょうどメアリ・マチルダのソックスにあながなかったみたいだね。」

と、これだけで終わってしまったりします。だから肩すかしというか、少しひねりのきいた「杵物語」になっています。ただし、その年とったばあやが言うには、

「百年まえだったかな。それとも二百年？たしか、あれは、グリムのぼっちゃんたちをお守りしたときより、まえだった。」

と、グリム兄弟がいた時から生きているという設定なのです。グリム兄弟がいたずらだったのでこの話はしてやらなかった、それでグリムの本にも入らなかった、というようなことも言っています。だから「杵物語」の杵自体も、このばあやが妖精だとすると、フェアリーテイルに入りますし、それから、それまでの歴史や、以前のフェアリーテイルとの連続性も強調されていると思われます。

また、同じフェアージュンの作品で、「小さな仕立屋さん」(“The Little Dressmaker”)というものがあります。これは『ムギと王さま』(The Little Bookroom)という作品集に入っています。この物語はシンデレラのパロディとも言えるでしょう。小さな仕立屋さんは大きな仕立屋さんの弟子で、あまり正当に使われていない様子です。そしてその国の女王さまの甥である隣国の王さまが、年が19歳半でウエストが50cmの人と結婚します、と言って花嫁選びをするのですが、ロタという名前

のその小さな仕立屋さんがその服を作ってあげて、ちょうど自分に合う服だったのでそれを着て行って花嫁候補の人に見せ、こういうふうに着てください、と指導するのです。その時に王さまの従僕に会って仲良くなるのですが、何となくその従僕が王さまではないかと思わせるようなところがあります。結局ロタと従僕が結婚して隣国に着くと、実はその従僕は本当の従僕で、王さまが身代わりに送っていたのだということが判明します。だから、王さまと結婚することが幸せなのか？と問いかけているようにも見えますし、そもそもその若い王さまの方は、ちっとも結婚しなかったのです。ただおばさんに言われたからそういうふうにしただけで、結婚すること自体がどうなのだろう？と疑問を呈しているようにも見えます。

フェアージュンの『ガラスのくつ』(The Glass Slipper)は、もっと直接的なシンデレラの書き換えです。エラという女の子が主人公で、妖精とか王子さまとかもいるのですが、もともとは劇として作られたので道化なども出てきます。このエラが個性的に描かれていまして、王子さまに会った時に、普通の王女さまは言わないようなことを言います。「御殿の召使いたちは、きのどくだこと」や「何アールもありそうな、このゆかをみがくことを考えてごらんなさいよ」というように、その宮殿で働いている人たちのことにも思いをはせています。そしてエラは正直な子で、いい子になりたいし、誰のことも好きになりたいと思うけれども、どうしても好きになれない人—継母や継姉のことだと思われま—もいます。そのようなところが、今までのおとぎ話のヒロインとは少し違う感じに書かれています。ただ、最後には自分が幸せですし、お姉さんたちも人のことを考えられなかっただけなのだろうから許してあげなきゃ、と思って許してはいます。

V-2 伝承ふう

伝承ふうと書きましたが、20世紀の作品ではちょっと珍しい、「チーズのお日さま」(“The Dutch Cheese”)というのを紹介します(邦訳は『九つの銅貨』所収)。人間の兄妹と妖精が出てくる

話です。この妖精たちは、いわゆる名付け親の妖精みたいな人たちとは違う、いたずらものの妖精で、羽の生えた小さい妖精より前からいる、もっと伝統的なイギリスの地付きというのでしょうか、住みついている妖精たちのように書かれています。その妖精たちがするいたずらというのが、お兄さんの投げたチーズをお日さまのようなものにするとか、それからジャックの豆の木みたいに、投げた豆を茂らせたりするとかなのです。なぜかという、妖精たちが妹の方を好きなのに、お兄さんが閉じ込めておこうとするので、外に出してあげたいからです。だから、いたずらではあっても、必ずしも悪い生き物ではないとされています。

V-3 フェミニスト

フェミニストの話、これは20世紀にかなり盛んに書かれています。少しだけ紹介しますと、例えばジョーン・エイキン (Joan Aiken) の「オウムになった海賊と王女さま」(“The Parrot Pirate Princess”)があります。岩波少年文庫に入っています(『魔法のアイロン』所収)が、これも命名の時の呪いで王女さまがオウムに変えられてしまい、海賊と一緒に暮らしているという話です。だから、いろいろ言葉遣いが悪くて王女さまらしくないのですけれども、彼女がまた人間に戻った時に、その宮殿にとどまるよりも海賊の夫と一緒に去ることを選んだ、ということで、王女より海賊がいいと、身分制度の常識を覆しているように見えます。でも結局は「海賊レストラン」を開いて「王室御用達」と書き添えているので、王室の権威を利用しているとは言えるのですが、そういうしたたかなところがあります。

また、『血染めの部屋』(The Bloody Chamber)というのがあります。作品集の副題は「大人のための幻想童話」です。20世紀にもなると、大人向け・子ども向けという分け方もかなり曖昧にはなっていますが、最近それまでのフェアリーテイルにはあまりなかった、人間の女性の意識とか男女の関係といったものを描くフェアリーテイルも増えてきています。これは「青髭」を下敷きにしている、「青髭」では女性の好奇心を罰する形になっていたと考えられるのですが、ここでは「わ

たし」という一人称でその女性の視点から語られ、全て青髭、つまり夫に操られてそういう部屋を見てしまったことになっています。また、彼女を救い出してくれたのが、元の話ではお兄さんたちだったのですが、この話では、語り手の母が助けてくれます。ごく野性的な女性ですね。だから、女性同士の絆によって救われたという話になっています。

V-4 暗黒

また女性の話が続きますが、「時計が時を告げたなら」(“When the Clock Strikes”)は、『血のごとく赤く』(Red as Blood, or Tales from the Sisters Grimm)という本に入っていて、それには「幻想童話集」という副題がついています。さらに「グリマー姉妹の物語」とも称されていて、これはグリム兄弟を「ブラザーズグリム」というので、そうではなくて「シスターズグリマー」、それから「グリム」というのは、名前でもありますし、「暗い陰気な」という意味もあるので、「グリマー」だとその比較級になっています。

これもシンデレラを下敷きにしています。ある人が乗り物の待ち時間に話をしてくれているという設定です。灰かぶりを名乗った娘(シンデレラ)は母親のために復讐する、だからぼろをかぶっていたのも人の目を欺くためであって、これがそのシンデレラの真相なのですよ、と語り手は言います。灰かぶりの呪いは王子に当たる人、「公子」というのを狂気に陥れて死なせてしまいます。ガラスの靴については、「どんな女でも、踊ろうにも踊りようのない靴」と表現されていますが、確かにガラスの靴とはどんなだろうと思ったりしますね。結末では語り手が、「このわたしこそ死神だって、信じさせたがってるっておっしゃるんですか？」などと言っています。この語り手の正体は何だろう、という疑問が起こるのですが、もしかしたら死神かもしれないし、復讐するシンデレラ、つまり魔女のことかもしれません。ただその辺ははっきりと語られてはいません。この灰かぶりの呪いによって、町も滅んでしまっています。

V-5 ポストモダニズム

ポストモダン文学として知られる、「ガラスの山」(“The Glass Mountain”)という作品があります。一応大人向けとされ、『シティ・ライフ』(*City Life*)に収録されています。これには1番から100番まで文章に番号がついていて、1は「ぼくはガラスの山に登ろうとしていた。」というところから始まっています。もとはアンドルー・ラング(Andrew Lang)の『きいろの童話集』(*The Yellow Fairy Book*)の中に「ガラスの山」という作品があるのですが、それを現代的な場所に移して、さらに、元の話では最後にお姫さまを手に入れていたのですが、この話の「ぼく」は「シンボル」というものを求めています。そして結局、そのシンボルに触ると、それは「ただの美しいお姫さま」に変わってしまい、「ぼく」はお姫さまをその山からまっ逆さまに投げ下ろしてしまうのです。かなりおとぎ話を壊している感触です。そして、「それにワシなんてろくでもねえや、まったく、一瞬たりとも。」という否定的な文で終わっています。

もう一つ、『くさいくさいチーズぼうや&たくさんのおとぼけ話』(*The Stinky Cheese-Man and Other Fairly Stupid Tales*)という絵本ですが、「おとぎ話」ではなく「おとぼけ話」ですよ、と言っているのを中を見ますと、扉に「とびら」と大きく書いてあったり、献辞が逆さ文字になっていたりします。なかなか目次が出てこないかと思えば、「ひよこのリキン」の話が先にあって、そこではひよこのリキンが「お空が落ちこちてくるのよ！」と騒いでいるところに語り手のジャックが乱入してきて、「目次がまだなんだ！(中略)目次がもうすぐー」と言おうとするのですが、騒ぎの中で放ったらかされてしまいます。そしてそこに目次がガンと落ちてきてしまう、というような設定で、絵も文もかなり奇抜なものです。

V-6 政治的風刺

それから政治的風刺として、これは結構有名だと思うのですが、『政治的に正しいおとぎ話』(*Politically Correct Bedtime Stories*)という本があります。ここでもシンデレラの箇所を抜き出してみたのですが、妖精に当たる男性がシンデレラに会う時、こう言っています。

「やあ、シンデレラ。わたしはあなたの守護神だよ。お望みなら、あなたの神の代理人と言ってもいいけど。ところで、あなた、まさか舞踏会にいきたいっての？男どもが望む美のコンセプトに自分をはめこみたいとか？きゅうくつなドレスで血液循環を止めてしまいたいとか？かかとの高い靴に足を押しこんで、背骨を痛めてやりたい？非人間動物で実験した化学化粧品で顔をぬりたくりたいわけ？」

ジェンダーとか動物とか宗教とか、そういうものにいろいろ配慮するとこういうふうになりますよ、という冗談なのですね。魔女も「親切心に損傷を受けた魔女」と描写されていたりします。

VI 創作フェアリーテイルの現在と未来

駆け足ですが最後に、現在と未来についてお話しします。現在と言いましても、大体今までの流れを汲んでいて、フェミニスト系の話などは今でも書き続けられています。その中で注目したい流れは二つあります。

VI-1 語り直し

一つが古い話の語り直しです。例えば『逃れの森の魔女』(*The Magic Circle*)という作品がありますが、これは「ヘンゼルとグレーテル」の語り直しです。ここでは魔女の視点から入っています。魔女は本当は神さまに付きたかったけれども、ある事情から悪魔と取引をせざるを得なかった、しかしヘンゼルとグレーテルのことは本当に好きなので、危険に陥れないために、自分でグレーテルにかまどに突き飛ばされることを選んだ、そしてそれによってその悪魔との契約からも自由になった、という話です。このように特定の視点から語り直し、今までの物語を別の解釈で提示しているものです。

また、『魔法にかけられたエラ』(*Ella Enchanted*)ですが、『さよなら、「いい子」の魔法』というのが訳題です。映画にもなっています。いい子—ここでは従順になるという魔法をかけられた人で、これは眠り姫とシンデレラの両方の要素があると思います—が、最後には自分で呪いを打ち破り、

王妃になるのを断って、「言語学者兼料理人手伝い」になる話です。笑いとおに愛に満ちて過ごすというのを幸せと定義しています。やはり一人称で書かれています。

VI-2 メタフィクション

もう一つの流れとして、『記憶の国の王女』(*The Great Good Thing*)があります。これは、おとぎ話の主人公の側から、読者とか作者や筆者について書いたもので、物語を語るということについて、語られる側から考えているという、少し珍しいものかと思います。

VI-3 様々なメディア

今までお話ししたものは本や文章になっているものですが、ほかにもおとぎ話は世の中の様々なところに、画像や映像などいろいろな形でありまして、そういうものもこれからどんどん研究していけばよいのではないかと思います。

VI-4 フェアリーテイルの宿命—規則性と多様性

レジュメの一番最後に、フェアリーテイルについて、「規則性と多様性」と書いておきました。フェアリーテイルには様々なバリエーションがあるとは思いますが、何が規範であって、それをどこまで逸脱できるかというのは、時代ごとに少

しずつ変わっているのでしょうし、地域によっても違うと思うのです。ここでは主にイギリス文学を取り上げましたけれども、20世紀ではアメリカの作品も含めてあります。

そうしたことを考えていきますと、フェアリーテイルではおなじみのものと、それから奇抜なものとのバランスが、大事になるのだと思います。あまり一般化してもいけないとは思いますが、19世紀では善悪や正義などが、皆に共通のものとして考えられていたのに対して、20世紀になると、強い女性が出てきたり、ある特定の人にとっての善悪や正義についての関心、それから語りという行為への関心が強くなっていくように思われます。

結局言葉というのは世の中に限られた数しかないものなので、そもそも物語を語るということ自体が規則性と多様性に基づいていると言えるのではないかと思います。フェアリーテイルについて考えるのは、文学一般、ひいては人間の文化の在り方について考える一つの鍵になるのではないのでしょうか。

以上でお話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

(あしたかわ ゆうこ 文教大学文学部英米語英米文学科准教授)

「創作フェアリーテイルの起源と現在」紹介資料リスト

(本館) → 国立国会図書館東京本館で所蔵
 ※ → 国立国会図書館東京本館にも所蔵

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号	備考
1	昔話入門	小澤俊夫 編著	ぎょうせい 1997. 10	KE178-G17 ※	
2	ファンタジーの世界：妖精物語について	J. R. R. トーキン 著 猪熊葉子 訳	福音館書店 1973	KE129-11 ※	
3	おとぎ話が神話になるとき	ジャック・ザイプス [著] 吉田純子, 阿部美春 訳	紀伊國屋書店 1999. 1	KE178-G27 ※	
4	一つよけいなおとぎ話：グリム神話の解体	ジョン・M. エリス 著 池田香代子, 薩摩竜郎 訳	新曜社 1993. 7	KS357-E30 ※	
5	The governess, or, Little female academy	Sarah Fielding 作	facsimile reproduction of the 1st ed. Oxford University Press 1968	VZ1-410	
6	ねがいのかなう魔法のほね (『世界のメルヘン』5)	チャールズ=ディケンズ ほか 作 掛川恭子, 八木田宜子 訳	講談社 1981. 8	Y7-8168	
7	黄金の川の王さま	ジョン・ラスキン [ほか] 著 富山太佳夫, 富山芳子 編	青土社 1999. 8	KS141-G77 ※	
8	Granny's wonderful chair and the tales it told	Frances Browne 作 Florence White Williams 絵	[1st ed.] Saalfield Pub. Co. c1928	VZ1-179	
9	軽いお姫さま	ジョージ・マクドナルド [ほか] 著 富山太佳夫, 富山芳子 編	青土社 1999. 9	KS141-G75 ※	
10	金の鍵	マクドナルド 作 脇明子 訳	岩波書店 1996. 1	Y9-2284	
11	旅のマント	D. M. M. クレイク [ほか] 著 富山太佳夫, 富山芳子 編	青土社 1999. 9	KS141-G74 ※	
12	幸福な王子	オスカー・ワイルド [ほか] 著 富山太佳夫, 富山芳子 編	青土社 1999. 8	KS141-G76 ※	
13	水の子どもたち：陸の子どものための妖精の物語。上	キングズリー 作 芹生一 訳	偕成社 1996. 6	Y9-2790	
	水の子どもたち：陸の子どものための妖精の物語。下	キングズリー 作 芹生一 訳	偕成社 1996. 6	Y9-2790	
14	新注不思議の国のアリス	ルイス・キャロル 著 マーティン・ガードナー 注 高山宏 訳	東京図書 1994. 9	KS113-E29 (本館)	
15	Anyhow Stories: Moral and Otherwise	Lucy Lane Clifford 作	Reprint Kessinger Publishing 2007. 8	所蔵なし	
16	ヴィクトリア朝妖精物語	風間賢二 編	筑摩書房 1990. 9	KS141-E33 (本館)	

17	ものぐさドラゴン	ケネス・グレアム [ほか] 著 富山太佳夫, 富山芳子 編	青土社 1999. 8	KS141-G73 ※	
18	年とったばあやのお話かご	エリナー・ファージョン 作 石井桃子 訳 エドワード・アーティゾーニ 絵	岩波書店 1970	Y7-2195- [1]	
19	ムギと王さま	エリナー・ファージョン 作 石井桃子 訳	新装版 岩波書店 2003. 5	Y9-N04-H120	
20	ガラスのくつ	エリナー・ファージョン 作 石井桃子 訳	岩波書店 1986. 2	Y8-3170	
21	九つの銅貨	W. デ・ラ・メア 作 脇明子 訳 清水義博 画	福音館書店 2005. 1	Y7-N05-H11	
22	魔法のアイロン	ジョン・エイキン 作 猪熊葉子 訳	岩波書店 1988. 11	Y8-5900	
23	血染めの部屋：大人のための幻想童話	アンジェラ・カーター 著 富士川義之 訳	筑摩書房 1999. 12	KS153-G463 (本館)	
24	血のごとく赤く：幻想童話集	タニス・リー 著 木村由利子, 室住信子 訳	早川書房 1997. 4	KS163-G132 (本館)	
25	シティ・ライフ	ドナルド・バーセルミ 著 山形浩生 訳	白水社 1995. 11	KS152-G19 (本館)	
26	くさいくさいチーズぼうや&たくさんのおとぼけ話	ジョン・シエスカ 文 レイン・スミス 絵 青山南 訳	ほるぷ出版 1995. 2	Y18-9957	
27	政治的に正しいおとぎ話	ジェームズ・フィン・ガーナー 著 デーブ・スペクター, 田口佐紀子 訳	ディーエイチシー 1995. 5	KS157-E434 (本館)	
28	逃れの森の魔女	ドナ・ジョー・ナポリ 著 金原瑞人, 久慈美貴 共訳	青山出版社 2000. 2	KS165-G92 (本館)	
29	さよなら、「いい子」の魔法	ゲイル・カーソン・レヴィン 著 三辺律子 訳	サンマーク (発売) 2000. 10	Y9-N01-153	
30	記憶の国の王女	ロデリック・タウンリー 著 布施由紀子 訳	徳間書店 2002. 12	Y9-N03-H40	

レジュメ

学校物語の伝統からみる「ハリー・ポッター」シリーズ

菱田 信彦

〔1〕 ハリー・ポッターに描かれる「階級社会」

(1) 魔法使いと「マグル」（魔法使い以外の人々）が混住する世界

(2) 魔法使いたちのマグル世界への無知、無関心

- ① ロンはマグルの世界では写真が動かないということを知らない。
- ② 魔法世界には独自のスポーツがあり、マグル世界のスポーツは行われぬ。
- ③ 魔法世界にはマグル世界の飲食品は原則として流通していない。
- ④ ホグワーツの卒業生の就職先は魔法世界の中だけ。
- ⑤ マグルの人々は（ごく少数を除き）魔法世界の存在に気づきさえしない。

↓

社会に2種類の人々が存在し、同じ土地に住みながら、生活習慣も食べるものも楽しむスポーツもまるで違い、お互いのことをほとんど知りもしなければ関心もない。

⇒ イギリス階級社会の伝統的なイメージ

〔2〕 階級社会のスポーツ、居住区域、教育

(1) イギリスでは階級によって楽しむスポーツが明確に異なる。

- ① ポロ・・・限られた人々しか楽しめないスポーツ
- ② クリケット、ラグビー、ゴルフ・・・上～中流階級のスポーツ
- ③ サッカー・・・労働者階級のスポーツ

(2) ポロがクイディッチと似ている点

- ① 乗馬の技術と球技の技術が同時に要求される。
- ② 4人の選手のチーム内での役割が明確に決められている。

↓

クイディッチに夢中になっているロンは、サッカーのことはまるで知らない。

【引用1】

Ron had already had a big argument with Dean Thomas, who shared their dormitory, about football. Ron couldn't see what was exciting about a game with only one ball where no one was allowed to fly. (Stone 107)

ロンは同室のディーン・トーマスとサッカーについてすでに激しい議論をしていた。ロンは、ボールをひとつしか使わず、選手が空を飛んではいけないスポーツのどこが面白いのか分からない、と言った。

⇒ 彼らの間に横たわる「階級差」を示すために、おそらく意図的に挿入されたエピソード

(3) 居住区域と階級

イギリスでは、同じ町に住んでいても、その中のどの区域に家があるか、ということが階級差をはっきりと示す場合がある。

→近代における郊外の新興住宅地の発展にともないむしろ強化される傾向あり。

【引用2】

The classes and subclasses sorted themselves out more neatly than ever before into single-class enclaves which did not know or speak to each other. The life of the stockbroker belt with its big cars and detached houses and private infant schools was more remote from the white-collar semi-detached private estate than ever the squire was from the village almshouses or the cotton spinner from his operative's cottages. (Adonis and Pollard 182)

階級や準階級はそれまでになく綿密に区分されるようになり、その結果単一の階級のみが属する「囲い地」が形成され、異なる囲い地の間ではお互いに知り合わないし口もきかないという状況が生じた。株式仲買人が住む、大きな車のある一戸建の家が並び、私立幼稚園がある一画の生活は、かつての地主の暮らしが村の救貧院の暮らしと異なり、紡績業者の住宅が彼の職人たちの小屋と異なっていた以上に、ホワイトカラーの二戸建住宅が並ぶ一画の生活と異なっていたのである。

(4) イギリスの中等教育学校 (Secondary School)

①95%が公立 → Comprehensive School (コンプリヘンシブ・スクール)

・11~16歳の義務教育 (日本でいえば小6~高1)

・原則として選抜なし

・進学希望者はさらに2年の sixth form (シックス・フォーム) で学ぶ。

②公立校には Grammar School (グラマー・スクール) もある → 選抜制

③5%が私立 → Independent School (インディペンデント・スクール)

・13~14歳 → third form (三級)

・14~15歳 → fourth form (四級)

・15~16歳 → fifth form (五級)

・16~18歳 → sixth form (六級)

[3] パブリック・スクール (Public School)

(1) パブリック・スクールとは何か

①伝統ある私立中等教育学校

②多くは寄宿制をとる

③イギリスのジェントルマン階層の子弟を養成する学校として、深くイギリスの文化・社会の中に浸透している。

④「イートン・グループ」、「ラグビー・グループ」と呼ばれる主要なパブリック・スクールに在籍する生徒は、同世代の0.5%にすぎない。

⑤にもかかわらず、1984年9月に組閣された内閣では、22名の閣僚のうち15名がこれらの主要パブリック・スクールの出身者だった。

(2) パブリック・スクールと階級社会

内閣閣僚だけではなく、公務員、外交官、裁判官、軍隊、英国国教会、銀行などのエリートの多くが主要パブリック・スクールの出身者

↓

パブリック・スクールは、階級差を維持し、再生産するための「装置」としての機能をもつ。

【引用3】

Public schools have traditionally had very close links with the universities, especially Oxford and Cambridge, and, either through them or directly, with high status professions. Parents have attempted to ensure that their positions of power and prestige within the class structure could be passed on to their sons through payment and attendance at a public school. (Walford 11)

パブリック・スクールは伝統的に、大学、特にオックスフォード大学とケンブリッジ大学との間に緊密なつながりをもつ。そしてこれらの大学を通じて、あるいは直接に、社会的地位の高い職業とのつながりをもっている。親たちは、息子たちをパブリック・スクールに入学させ、費用を支払うことによって、権力と名声をともなう自分たちの階級構造内での地位をまちがいに彼らに受け継がせようとしてきたのである。

〔4〕 ホグワーツはパブリック・スクールか？

(1) 「パブリック・スクールではない」とするブレイクの見解

- ①入学試験がない
- ②授業料がかからない
- ③中国系やインド系など、さまざまなエスニシティの生徒が入学している。

【引用4】

It's worth noting again that Hogwarts is not a public school in the classic sense: it is not selective on the grounds of parental class or wizarding ability. It serves the children of the whole wizarding community—including the potentially evil Slytherins—and anyone else who is seen to have the ability to benefit from the education it offers. (Blake 107)

ホグワーツが古典的な意味でのパブリック・スクールではないということをもう一度指摘しておきたい。ホグワーツは生徒の魔法の能力や両親の階級にもとづく選別を行わない。それは、悪しき傾向のあるスリザリン寮の生徒たちを含め、魔法世界のすべての子どもたちのために、そして他にも学校が提供する教育にふさわしい能力をもつすべての者たちのために存在するのである。

(2) 「階級差」を維持する装置としてのホグワーツ

- ①入学試験がない
- ②入学を決定するのは、学校側による一方的な「選抜」のみ
- ③ハーマイオニーのようなマグルの子どもたちも入学してはいるが、学校側によって選ばれないかぎり、どれほど努力しても入学できない。
- ④ホグワーツに入学した者と入学できなかった者の間には、決定的な力の差が生ずる。

(3) 教育に関するローリング自身の体験

- ①父親は航空機工場に勤める技師 → 娘に高等教育を受けさせたいと願う

- ②コンプリヘンシブ・スクールからオックスフォード大学への進学を志し、Aレベル試験を受験
- ③好成績にもかかわらず、結果は不合格
→ローリングを指導したある教員は、合格しなかったのは成績のためではなく、彼女が公立校出身だったからだと信じている。

【引用5】

He blasted the old boy network and the old school tie: 'I say it is time to end the Old Britain where what matters are the privileges you were born into, not the potential you actually have. I say it is time these old universities open their doors to women and to people from all backgrounds.' (Smith 80)
彼は、パブリック・スクールの卒業生どうし、また出身校との結びつきによって形成される学閥を糾弾する。「人が個人の資質でなく、出自による特権によって評価される“古いイギリス”を終わらせる 때가きています。伝統的な大学は女性やあらゆる階層出身の人々に門戸を開くべきです。」

(4) ローリングの分身としてのハーマイオニー

- ①マグル、すなわち「ハリー・ポッター」の世界において特権を与えられていない家庭の出身
- ②魔法使いという特権的な人々のための学校に入り、才能と努力によって頭角をあらわす。
- ③マルフォイなど、伝統的な魔法使いの一族出身の生徒から排斥され、自分が魔法使いの一族出身でないことを意識させられる。

(5) ホグワーツが「パブリック・スクールである」理由

- ①「ハリー・ポッター」の世界において「階級差」として機能しているものは、現実社会における地位や職業、経済力ではない。
- ②それは、「魔法の世界に属する者」と「魔法の世界に属さない者」との間の格差である。
- ③ホグワーツは、その両者を選別し、この格差を維持強化するために最も重要な役割を果たす機関である。

↓

現実のイギリスにおいてパブリック・スクールが果たしている役割と重なる。

[5] 「学校物語」(School Story) の系譜

(1) 「学校物語」とは何か。

- ①主に19世紀後半から20世紀前半にかけて書かれた、パブリック・スクールの生徒を主人公とする作品
- ②その多くは、自由と規律、公正なスポーツマンシップと互いの尊重など、イギリスの「紳士」が身につけるべき資質を伝えることを目的としている。

(2) 主な作品

- ①19世紀の代表的な作品
 - ・トマス・ヒューズ『トム・ブラウンの学校生活』(*Tom Brown's School Days*, 1857)
 - ・F・W・ファラー『エリック、一歩また一歩』(*Eric, or Little by Little*, 1858)

- ② 20世紀の人気作品

- ・ フランク・リチャーズの「ビリー・バンター」(Billy Bunter) シリーズ
→ 1908年から1940年にかけて週刊誌『マグネット』に連載
- ・ イーニッド・ブライトンによる、『おてんばエリザベス』(The Naughtiest Girl in the School, 1940) など、寄宿学校を舞台とする一連の作品

【引用6】

The plots of the canonical stories, set at British boys' public schools, soon became formulaic: They feature an ordinary good-natured boy, not particularly intellectual, but keen on sports. We would see his arrival and the larks and scrapes of his early years. We would see his awe of the older boys, as well as his willingness to do the small services expected of him as a fag (a term whose meaning was not yet explicitly sexual), such as toasting bread on a fork and making tea over a fire in an older boy's study. We would see our hero rise through the ranks to the sixth form and become a creature of awe himself, perhaps a prefect and captain of the cricket team. Occasionally we might glimpse a classroom, for a paragraph or two, but we could count on spending pages and pages on the playing fields, with at least one match described in thrilling detail. There would also be other physical adventures, probably a fight with the school bully, our hero valiantly holding his own even if he does not defeat the oaf, and perhaps also the hero's rescue of his worst enemy from drowning. There might be a moral adventure too, our hero wrongly accused of, say, stealing an examination paper and staunchly bearing the blame, suffering a caning or the threat of expulsion, but refusing to tattle on the wrongdoer—and, of course, eventually being exonerated anyway. Competition (sports, the fight with the bully) is thus balanced against peer solidarity (sports, not telling tales). The story would conclude with our hero nostalgically reflecting on the joys and triumphs of his school days as he is about to leave, and perhaps with the narrator telling us the future fates of the boy and his friends: which one is to become a Queen's Counsel, which one a lord of the Admiralty, which one Bishop of Zanzibar—thereby underscoring the connection of such stories with the British imperial project. (Clark 4)

イギリスの男子パブリック・スクールを舞台とする標準的な作品のストーリーは、やがてひとつの類型となった。主人公はごく普通の善良な少年で、とくに頭がよいわけではないが、スポーツには熱心である。われわれは彼が学校に到着し、入学早々いたずらをしたりもめごとを引き起こしたりするのを見る。彼は上級生に畏怖の念を抱き、すすんでファグ（この語はまだ露骨に性的な意味をもってはいなかった）として、上級生の学習室でフォークに刺したパンを火にかざしてトーストにしたり、お茶の用意をしたりとささやかなサービスをする。やがて彼は進級して最上級生となり、彼自身畏怖される存在となって、たいてい監督生かクリケット・チームの主将をつとめる。授業の場面もあるが、せいぜい1～2段落で、その一方運動場の場面はたいてい何ページにもわたって続き、少なくとも1つの試合についてわくわくするような詳細な描写がある。スポーツ以外の肉体的試練もあるが、それはしばしば学校のいじめっ子との闘いで、主人公は、たとえそのガキ大将を倒せないとしても、雄々しく自分を貫く。その仇敵がおぼれかけているところを主人公が救うという場合もある。モラルに関する試練もあり、たとえば試験問題を盗んだ疑いが誤って彼にかけられるが、彼はその責めを一身に負う。むち打ちの罰を受けたり、退学させられそうになったりするが、けっして真犯人のことを告げ口しない。そしてむろん最後には彼の疑いは晴れる。かくして、競争（スポーツ、いじめっ子との対決）と、仲間との連帯（スポーツ、告げ口をしないこと）との均衡がとられる。物語の最後では、

主人公は卒業を前にして学校時代の楽しさと功業について懐旧にふけており、たいてい語り手が彼と友人たちのその後の運命について述べる。ある者は王室顧問になり、ある者は海軍大臣になり、ある者はザンジバルの司教になる——このように、この種の物語とイギリスの帝國的活動との結びつきが強調されるのである。

〔6〕学校物語としての「ハリー・ポッター」シリーズ

(1) 「ハリー・ポッター」シリーズには、上のような典型的な学校物語の要素がほぼ全てそろっている。

- ①主人公の入学、いたずらやトラブル
- ②主人公の進級 → 主人公や友人が監督生やチームの主将になる
- ③寮対抗のスポーツ競技
- ④学校内での不当な行為に対する抵抗
- ⑤主人公がいわれのない疑いをかけられる

↓

「ハリー・ポッター」は、ある意味で、20世紀後半以降に書かれた最も典型的な学校物語のひとつだといえる。

〔7〕トムは誰と闘うのか

(1) 『トム・ブラウンの学校生活』のトムが闘う相手

- ①自分たちに奉仕 (fagging) を強いる、五級生のフラッシュマン
 - ・トムは第1部第8章で、競馬の当たりくじを上級生に譲らなかったために、フラッシュマンに暖炉で火あぶりにされる。
 - ・同第9章では、友人のイーストとともにフラッシュマンと格闘し、五級生のディグズのサポートもあって彼を倒す。
- ②第2部第5章で、トムは年下の友人、ジョージ・アーサーに暴力を振るおうとする五級生のウィリアムズを制止し、彼とボクシングの試合をすることになる。

【引用7】

“I say, Scud,” said he at last, rousing himself to snuff the candle, “what right have the fifth-form boys to fag us as they do?”

“No more right than you have to fag them,” answered East, without looking up from an early number of *Pickwick*, which was just coming out, and which he was luxuriously devouring, stretched on his back on the sofa.

(中略)

“Do you know, old fellow, I’ve been thinking it over a good deal,” began Tom again.

“Oh yes, I know, fagging you are thinking of. Hang it all; but listen here, Tom –here’s fun. Mr. Winkle’s horse—”

“And I’ve made up my mind,” broke in Tom, “that I won’t fag except for the sixth.” (Hughes 134)

「ねえ、韋駄天」と、ロウソクの芯を切ろうと立ちあがりながら彼はついに言った、「五級の連中はなんの権利があつてあんなに僕らをこき使うんだろう。」

「君に彼らをこき使う権利がないのと同様、権利なんかないさ」と、イーストは『ピクウィック・ペーパーズ』の初期の巻から目を上げずに答えた。これは出版されたばかりで、彼はソ

ファーに仰向けになってのんびりとそれに読みふけていたのである。

(中略)

「いいかい君、僕はこの問題についてずいぶん考えてきたのだよ」と、トムはまた始めた。

「分かってるよ。奉仕のことだろう。あんなものくそ喰らえだ。でもトム、聞けよ……ここが面白いんだ。ウィンクル氏の馬が……」

「そして僕は決心したよ」と、トムは口をはさんだ、「六級生のため以外に奉仕はしないと。」

【引用8】

“Well, I hope so. But you’ve forgot one thing, what I want to leave behind me. I want to leave behind me,” said Tom, speaking slow, and looking much moved, “the name of a fellow who never bullied a little boy, or turned his back on a big one.” (Hughes 240)

「そうだといいが。しかし君はひとつ忘れてるよ。僕が後に残したいもののことをね。僕が後に残したいのは」と、トムは、深く心を動かされているようにゆっくり話した、「一度も下級生をいじめたことがなく、上級生に屈したこともない男の名だよ。」

- (2) トムと他の生徒との対立軸を構成するものは、つねに、年長か年少かである。これ以外に生徒どうしの対立の原因となるような要素は、作品中にほとんど示されない。

[8] ハリーは誰と闘うのか

(1) fagging の不在

ホグワーツには、トムが直面する最大の問題のひとつである「下級生の奉仕」(fagging)が存在しない。シリーズ全巻を通して、ハリーが上級生と対立したり、彼が上級生と下級生のいさかいに巻き込まれたりする場面はない。

【引用9】

Rowling also softens the darker side of public school life: there’s no victimization of younger students by older ones—nothing at all like the practice of fagging (older boys forcing younger boys to be their servants) as seen in *Tom Brown’s School Days*. Rather than an older boy as nemesis, like Flashman, Harry has to contend against one his own age, and he holds his own against Malfoy quite nicely from the start. (Steege 153)

ローリングはまた、パブリック・スクールの生活の暗い面をソフトに描いている。上級生による下級生への虐待はない。『トム・ブラウンの学校生活』に見られるようなファギング(上級生が下級生を召使のように働かせること)の習慣のようなものはまったくないのである。フラッシュマンのような上級生を宿敵とする代わりに、ハリーは同い年の敵と争わねばならない。そして彼は物語の冒頭から、まことに申し分なくマルフォイと渡り合う。

(2) ハリーが(学校内で)闘う相手

- ①マルフォイのような、魔法世界の旧家出身で、自分たちを「純血」とみなしている生徒たち
→ マグルの血をひく生徒たちを「穢れた血」(Mudblood)と呼んで差別する。

【引用10】

‘It’s about the most insulting thing he could think of,’ gasped Ron, coming back up. ‘Mudblood’s a really foul name for someone who was Muggle-born—you know, non-magic parents. There are some

wizards-like Mulfoy's family—who think they're better than everyone else because they're what people call pure-blood.' (*Chamber* 89)

「あれはあいつが思いつくいちばん侮辱的な言葉だったんだ」とロンは、戻ってきてあえぎながら言った。「穢れた血”はマグル出身者——つまり両親が魔法使いでないってことだよ——のすごく汚い呼び方なんだ。魔法使いの中には、マルフォイの一家みたいに、自分たちがいわゆる“純血”だからってんで、自分たちが誰よりも優れてると思ってる連中がいるのさ。」

②ドロレス・アンブリッジ

→ 『不死鳥の騎士団』で、魔法省の意向を受けてhogwartsに乗り込み、半巨人、人狼、ケンタウロスなど、魔法世界で差別を受けている者たちを学校から排斥しようとする。

③ヴォルデモートの勢力

→ 『死の秘宝』で、魔法省を乗っ取ったヴォルデモートは、hogwartsからマグル出身者を排除するための政策を打ち出す。

【引用11】

‘What’s Voldemort planning for Hogwarts?’ she asked Lupin.

‘Attendance is now compulsory for every young witch and wizard,’ he replied. ‘That was announced yesterday. It’s a change, because it was never obligatory before. Of course, nearly every witch and wizard in Britain has been educated at Hogwarts, but their parents had the right to teach them at home or send them abroad if they preferred. This way, Voldemort will have the whole wizarding population under his eye from a young age. And it’s also another way of weeding out Muggle-borns, because students must be given Blood Status—meaning that they have proven to the Ministry that they are of wizard descent—before they are allowed to attend.’ (*Hallows* 173)

「ヴォルデモートはhogwartsをどうしようとしてるの？」ハーマイオニーはルーピンに聞いた。

「すべての魔女と魔法使いの子どもたちに入学が義務づけられた」と彼は答えた。「これは昨日告知されたんだ。大きな変化だよ。これまで一度も義務化されたことがなかったんだからね。もちろん、イギリスの魔女と魔法使いのほとんどはhogwartsで学んできたわけだが、もし両親が望めば、自宅で教育したり留学させたりすることもできた。このやり方でヴォルデモートは、魔法世界に属する者すべてを幼少期から監視下に置くことになるだろう。そしてこれはマグル出身者を根絶やしにするためのもう一つの方策でもある。なぜなら、生徒たちは入学を許可されるには「血統証明」を受けなきゃいけない・・・つまり彼らが魔法使いの血を引いていることを魔法省に証明する必要があるんだ。」

(3) マルフォイとハリーの間には学年や年齢の違いはない。彼らの対立軸を形成するのは、マルフォイの血筋と、その血筋の者たちが抱いてきた価値観——つまり学校の「外」にある事情である。

〔9〕トムとハリーの闘う理由の違い

(1) 『トム・ブラウンの学校生活』で強調される、生徒の「同質性」

①ラグビー校の生徒の間に社会的な立場の違いはないように描かれている。

②彼らの立場の違いを生み出すものは、学年と年齢の差だけ。

- ③学校の外に存在する社会のさまざまな格差は、生徒たちの生活にほとんど影響しない。
- ④ブラウン家はあたかも、「階級差を気にかけない」一族であるかのように描かれる。

【引用12】

But, luckily, Squire Brown was full as stiff-backed as his neighbours, and so went on his way; and Tom and his younger brothers, as they grew up, went on playing with the village boys, without the idea of equality or inequality (except in wrestling, running, and climbing) ever entering their heads, as it doesn't till it's put there by Jack Nastys or fine ladies' maids. (Hughes 54)

しかし幸いなことに、ブラウン郷土は隣人たちと同じぐらい頑固だったので、自分のやり方を押し通した。そこでトムや彼の弟たちは、大きくなっても村の少年たちと遊び続け、平等とか不平等とかいう考えは少しもその頭に浮かばなかった（レスリングや駆けっこや木登りにおける優劣は別だが）。こうした考えは、くだらない連中や、お上品な奥方の侍女にでも吹き込まれないかぎり、けっして子どもの頭に浮かぶものではないのである。

(2) ハリーが闘う理由は、つねに学校の「外」から来る。

- ①ホグワーツにおける生徒たちの対立軸は、「純血」(pure blood)か、「混血」(half blood)か、「マグル出身」(Muggle-born)かによって構成される。
 - 生徒たちが属する「社会階級」に起因
- ②アンブリッジは、魔法省の意向を受け、ダンブルドアを排除して校長に就任する。彼女は、意向に従うマルフォイたち一部の生徒に、他の生徒を取り締まる特権を与える。
 - ホグワーツの生徒どうしの関係は、外的要因によって変更されうる。

【引用13】

'The what?' said Hermione sharply.

'The Inquisitorial Squad, Granger,' said Malfoy, pointing towards a tiny silver 'I' on his robes just beneath his prefect's badge. 'A select group of students who are supportive of the Ministry of Magic, hand-picked by Professor Umbridge. Anyway, members of the Inquisitorial Squad do have the power to dock points. . . so, Granger, I'll have five from you for being rude about our new Headmistress. Macmillan, five for contradicting me. Five because I don't like you, Potter. Weasley, your shirt's untucked, so I'll have another five for that. Oh yeah, I forgot, you're a Mudblood, Granger, so ten off for that.' (Order 551)

「何ですって？」と、ハーマイオニーは鋭く聞いた。

「審問部隊だよ、グレンジャー」、マルフォイは言い、ローブの監督生バッジのすぐ下にある小さな銀色の「I」の文字を指さした。「魔法省を支持する選ばれた生徒たちによる部隊さ。アンブリッジ教授みずから選抜したんだ。とにかく、審問部隊の隊員は減点する権限を現にもっている。だからグレンジャー、お前は新しい校長を侮辱したかどで5点減点。マクミランは俺に逆らったから5点。お前は気に食わないから5点だ、ポッター。ウィーズリー、シャツの裾が出てるぞ。だからもう5点減点だ。そうそう忘れてた。グレンジャー、お前は“穢れた血”だから10点減点だ。」

- ③ヴォルデモートが魔法省の実権を握ることにより、ホグワーツの制度は決定的に変わる。

↓

ハリーの批判や怒りは、単に目前の闘争の相手だけではなく、その闘争をもたらした「外」へ、すなわち社会の制度や因習へと向けられる。

[10] 「ハリー・ポッター」シリーズは学校物語か？

(1) 多くの学校物語が前提としていること

- ①学校は自律性をもった固有の組織であって、世の中の政治的状況から独立している。
- ②その規範や価値観は「伝統」であり、時代が変わっても本質的には変化しない。
- ③生徒たちは、学校という空間の中では対等で平等である。
- ④生徒たちは、学校で身につける規範や道徳によって、社会に役立つ人材となる。

(2) ローリングは、これらの前提をまさにピンポイントで突き崩す。

- ①政治的状況が学内に決定的な影響を及ぼす。
- ②政治の世界で誰が実権を握るかによって、学校の規範や価値観は大きく変化する。
- ③生徒たちの学内での立場は血筋や家柄によって決まり、彼らはけっして平等ではない。
- ④生徒たちが学校で身につける技能は「社会」の役に立ってはいない。それはもっぱらマグル、その他の弱い立場の者たちを支配し、魔法使いの特権を維持するために使われる。

↓

学校の「伝統」と呼ばれるものが、その時々権力者にとって都合のいいイデオロギーの投影にすぎないことを、この作品はまざまざと浮かび上がらせる。

(3) 「ハリー・ポッター」シリーズにとってhogwartsとは何か

- ①『死の秘宝』ではハリーはほとんどhogwartsにいない。彼の闘いの最も重要な部分は、結局、学校の外で遂行される。
- ②彼は学校の支援を得て闘うわけでもなく、学校のために闘うわけでもない。
- ③『トム・ブラウンの学校生活』の目的は、本質的にはラグビー校そのものを描くことである。それに対して、「ハリー・ポッター」シリーズはhogwartsを描くための作品ではない。

↓

hogwartsは、魔法世界で展開される複雑なパワー・ポリティクスの結節点のひとつとして、物語が進むにつれて次第に相対化されていく。

(4) このように「ハリー・ポッター」シリーズは、ある意味で、「学校物語」に対する究極のアンチテーゼである。

【参考文献】

- Adonis, Andrew, and Stephen Pollard. *A Class Act: the Myth of Britain's Classless Society*. London: Hamish Hamilton, 1997.
- Blake, Andrew. *The Irresistible Rise of Harry Potter*. London: Verso, 2002.
- Cherland, Meredith. "Harry's Girls: Harry Potter and the Discourse of Gender." *Journal of Adolescent and Adult Literacy* 52 (4) Dec. 2008: 273-82.
- Clark, Beverly Lyon. *Regendering the School Story*. London: Garland, 1996.
- Farrar, Frederic W. *Eric, or Little by Little: a Tale of Roslyn School*. London: A. & C. Black. 1858.
- Hughes, Thomas. *Tom Brown's School Days*. London: Blackie & Son, 1857.

- Pugh, Tison and David L. Wallace. "Heteronormative Heroism and Queering the School Story in J. K. Rowling's *Harry Potter* Series." *Children's Literature Association Quarterly* 31 (3). 2006: 260-81.
- Rowling, J. K. *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. London: Bloomsbury, 1997.
- . *Harry Potter and the Chamber of Secret*. London: Bloomsbury, 1998.
- . *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. London: Bloomsbury, 1999.
- . *Harry Potter and the Goblet of Fire*. London: Bloomsbury, 2000.
- . *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. London: Bloomsbury, 2003.
- . *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. London: Bloomsbury, 2005.
- . *Harry Potter and the Deathly Hallows*. London: Bloomsbury, 2007.
- Smith, Sean. *J. K. Rowling: The Genius behind Harry Potter*. London: Arrow, 2002.
- Steege, David K. "Harry Potter, Tom Brown, and the British School Story: Lost in Transit?" *The Ivory Tower and Harry Potter: Perspectives on a Literary Phenomenon*. Ed. Lana A. Whited. Columbia: U of Missouri P, 2002. 140-56.
- Walford, Geoffrey. *Life in Public Schools*. London: Methuen, 1986.
- ウォルフオード, ジェフリー, 『パブリック・スクールの社会学: 英国エリート教育の内幕』, 竹内洋, 海部優子訳, 世界思想社, 1996年.
- ヒューズ, トマス, 『トム・ブラウンの学校生活 上・下』, 前川俊一訳, 岩波書店, 1952年.
- ローリング, J・K, 『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団 上・下』, 松岡佑子訳, 静山社, 2004年.
- , 『ハリー・ポッターと謎のプリンス 上・下』, 松岡佑子訳, 静山社, 2006年.
- , 『ハリー・ポッターと死の秘宝 上・下』, 松岡佑子訳, 静山社, 2008年.

学校物語の伝統からみる

「ハリー・ポッター」シリーズ

菱田 信彦



御紹介にあずかりました菱田でございます。よろしくお願いたします。今日は、学校物語の伝統からみる「ハリー・ポッター」シリーズということで、講義をさせていただきます。

「学校物語」と「ハリー・ポッター」

「学校物語」は、school story というのだけれども、イギリスの伝統的なパブリック・スクール (public school) —— たいていは全寮制なのですが —— を舞台として、そこで学ぶ少年を主人公とする作品です。今日のこの講座の場所は、その「学校物語」の話をするには、誠に恰好な所でございます。パブリック・スクールですと、このホールのような雰囲気のある教室で授業をしまして、先生がギリシャ語の訳読を順に当てていき、答えられないと「後ろの列に移りなさい」などと言われてたりするのです。まさにこのような雰囲気で授業が行われているというようなイメージがあります。

今回、「ハリー・ポッター」の大体の設定ですとか、主要な登場人物について、皆さんが御存じであるという前提で話をさせていただきたいと思っております。「ハリー・ポッター」というのは御承知のとおり、ホグワーツという全寮制の学校を舞台にしています。その中でハリーは、もちろん勉強に苦労したりですとか、スポーツを楽しんだりですとか、寮同士の対抗戦に出たりするわけなのですが、このような要素の多くは学校物語から取られたものなのです。

もちろん作者であるローリングは、学校物語の伝統をよく知っていて、それを意識した上でそこから適宜題材を採りつつ、「ハリー・ポッター」の作品を作り上げたと考えられます。ところが、「ハリー・ポッター」の作品というのは、単に学校物

語を踏襲したものではなくて、ある点ではそれをひっくり返しています。読者が気付きにくいような形で、それをひっくり返していて、ある面から見ると、伝統的な学校物語が体現するような価値観に対する批判になっていると私は考えています。今日はその話をしたいと思っております。

イギリスの階級社会

レジュメに沿って話を進めていきますが、レジュメに入ります前に、イギリスの階級社会について、簡単に概念を確認しておきましょう。

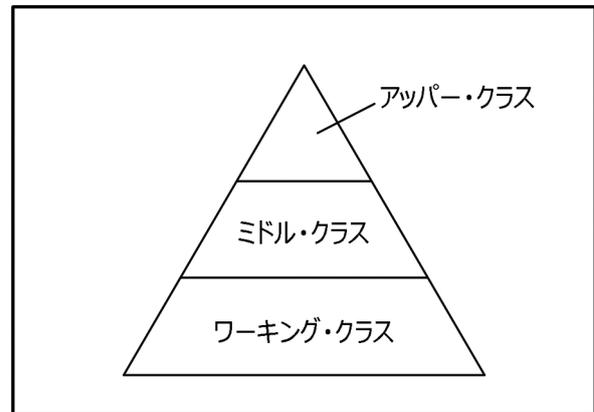


図1

イギリスの階級社会というのは、このようなイメージでよく説明されることがあります (図1)。一番上がアッパー・クラス (upper class) です。これは、貴族ですとか伝統的な大地主といった人々です。そして、真ん中あたりがミドル・クラス (middle class) です。これは、ある程度資産があって事業を展開しているか、あるいは医師や弁護士などの知的職業に就いているような人々です。一番下の、ワーキング・クラス (working class)、あるいはロウアー・クラス (lower class) と言われる

こともありますが、このような人々というのは、どこか工場などに雇われて、主として肉体労働を提供している人たちです。

このような人たちの違いというのは、単に収入が違うとか、財産があるかとか、そういうことではなくて、生活習慣から言葉遣いまで、まるで違うとされています。例えば、イギリスの人であれば、相手が一言話すのを聞いただけで、どの階級の出身であるか直ちに分かっていわれています。オードリー・ヘップバーンが主演した『マイ・フェア・レディ』という映画がありますが、あのイライザという女の子は、まさにこのワーキング・クラスでも底辺の方にいる花売り娘なのですが、ヒギンズ教授が行ったのは、そのイライザをアッパー・クラスの女性として通用するようにすることだったのです。そのためには、見かけをいくら磨いてもだめで、まず言葉遣いを洗練しないとアッパー・クラスの女性としては通用しないということになるのです。

このように、服装から言葉遣い、生活習慣まで全く違い、誰かが一言話ただけで、どの階級に属するか分かってしまいます。もちろん本人たちも、普段はあまり階級のことを口にしないのですが、自分がどの階級に属するかということはかなり意識しているのです。例えば、私はかつて家族を連れて1年間イギリスにいたことがあります。近所のお子さんがある家庭と仲良くなりまして、その子の家で誕生日パーティーをすることになったのです。そうすると、その子のお母さんは、自分の家と階級が同等か、あるいはそれより上の子を誕生日パーティーに呼ぶようと、大変そのことに心を砕いているのです。日本で、子どもの誕生日パーティーに友だちを呼ぶときに、相手がどの階級の出身か考えますか。それはちょっとあり得ないですよ。つまり、子どもの誕生日パーティーをするときにはまず考えるのが、呼ぶ人の階級である。それがイギリス社会であって、なかなか日本人にとって理解しにくいところがあるのですが、このようなイメージを、まずは押さえておいていただきたいわけです。

さらに、ミドル・クラスにもう一つ重要な分岐点があると言われます。つまり、ミドル・クラス

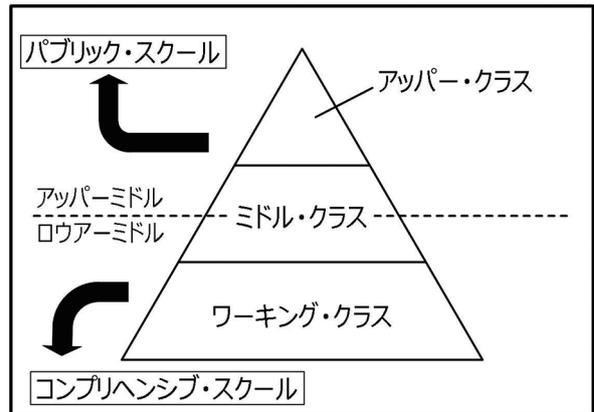


図2

の上半分がアッパーミドル・クラス (upper-middle class)、下半分がロウアーミドル・クラス (lower-middle class) です (図2)。どこまで細かく分けるんだとおっしゃるかもしれませんが、実はこの分岐点が相当重要な意味を持つのです。アッパーミドル・クラス以上の人、先ほどお話ししたパブリック・スクールに入ることができます。ところが、ロウアーミドル・クラス以下の人、コンプリヘンシブ・スクール (comprehensive school) といって、一般の子どもが通う公立学校に入ります。パブリック・スクールもコンプリヘンシブ・スクールも、日本でいうとだいたい中学校から高校までのいわゆる中等教育機関です。ローリングはコンプリヘンシブ・スクールの出身です。コンプリヘンシブ・スクール出身の彼女が、パブリック・スクールの舞台にしていると思われる「ハリー・ポッター」という作品を書いたわけです。このことに、既に相当意味があります。もちろん、パブリック・スクールに行った人はその後、オックスフォードやケンブリッジというような一流大学へ進み、そしてイギリスの政財界の中心的な位置を占めるようになります。その一方、コンプリヘンシブ・スクールに行った人は、いくら優秀であったとしても、どうしてもパブリック・スクールに行った人と社会的に同じ立場になるのは難しいという状況があります。この、コンプリヘンシブ・スクールに行くか、パブリック・スクールに行くかという問題は、もちろん経済的な問題もあるのですが、それだけでは決められないところがあるのです。それも時代によってだんだん変

わってきてはいますが、例えばワーキング・クラスに属する人が、たまたま事業を始めて大金持ちになったとして、それでは自分の息子をパブリック・スクールに入れられるかという、そういうわけではないのです。先ほども言いましたように、パブリック・スクールに行く階層の人と、ワーキング・クラスの階層の人では、普段の生活習慣から言葉遣いまで、まるで違います。そうすると、ワーキング・クラスの子どもがパブリック・スクールに行ったとすれば、これまでの生活も言葉遣いも服装も、自分とは全然違う生徒に囲まれることになって、早く言えば浮いてしまうのです。ですので、コンプリヘンシブ・スクールに通うことになるか、パブリック・スクールに通うことになるかというのは、ある程度生まれで決まるのであって、個人の努力や才能では、完全には越え切れない差異がこの両者の間にあると言ってよいのではないかと思います。このような形で、イギリスの階級について考える場合、どの学校に通うかということが非常に重要な問題になってきます。このことが、「ハリー・ポッター」シリーズの Hogwarts という学校の存在を理解するのに非常に有効です。

それではまず、レジユメの1ページ目 (p.80) の「ハリー・ポッターに描かれる『階級社会』』という部分から見ていきましょう。レジユメの内容を全て説明する時間はないと思いますので、特に話の流れに沿って重要だと思われるところを中心に見ていきます。

〔1〕ハリー・ポッターに描かれる「階級社会」

「ハリー・ポッター」には、このようなイギリスの階級社会というものが、ある程度再現されていると思っています。まず、魔法使いとマグル——魔法使い以外の人々ということ——は、同じ場所に住んでいます。例えば、ハリーの親友であるロンの一家は、オットリー・セント・キャッチボールという名前の場所に住んでいるのですが、これはイギリスの実在する地名をモデルにしています。実は、彼らはイギリスの普通の村に住んでいるのです。ですから、例えばハリーがロンの実家にいるときには、周りの大人たちは、子ども

たちが魔法を使うところを見られないように非常に気を遣います。つまり、魔法使いだけが全く別の世界に住んでいるわけではなくて、その家庭というのは、実は普通の人々が住む街の中にあたりするのです。それにも関わらず、魔法使いたちはマグル世界に対して全く無知、もしくは無関心です。唯一例外的なのは、ロンの父であるアーサーなのですが、この人がマグルのいろいろな技術に関心を示したり、それらに手を出したりするのは、魔法使いの中では非常に珍しいこととしていつも描かれています。

例えば、ロンは一般の村の中にある家に住んでいるにも関わらず、マグルの世界では写真は動かないということを知りません。そして、魔法世界には独自のスポーツがあって、マグル世界のスポーツは行われていません。魔法世界ではクイディッチという、箒に乗ってボールを追いかける独特のスポーツがあるのですが、それ以外に、例えば彼らがサッカーをやっているというようなことはないのです。

また、魔法世界にはマグル世界の飲食品は原則として流通していません。独特のお菓子が魔法世界にはあって、イギリスの子どもが普通に食べているようなスナック菓子は存在しないのです。また、Hogwartsの卒業生の就職先は基本的に魔法世界の中だけです。学校を出た後、一般の社会に戻って一般の社会で就職するということもあり得ないわけではないのですが、それは魔法使いにとっては非常に恥なことでありとされています。もちろん、マグルの人々にとってもこれは同様で、ごく少数を除いて、魔法世界の存在に気付いてもいません。このように、2種類の人々が同じ場所、同じ土地に住んでいるのに、お互いに生活習慣も食べるものも楽しむスポーツも全く違って、相手のことに関心を持ってもらえなければ、知ってもいない。これは、日本人にとっては非常に奇妙な状況のように思われます。ところが、実はイギリスの人にとっては、これは奇妙でも何でもないのです。イギリスの伝統的な階級社会というのは、まさにこのような社会だからです。同じ場所に、アッパーミドル・クラス以上の人とロウアーミドル・クラス以下の人が住んでいて、生活習慣

も、恐らく食べるものも楽しむスポーツも違っていて、お互いに相手のことを知りもしないし、関心もない。まさにこれがイギリス社会の在り方であって、「ハリー・ポッター」の世界は、それを如実に再現しているのです。

〔2〕階級社会のスポーツ、居住区域、教育

では、スポーツや居住区域などについて、もう少し具体的に見てみましょう。イギリスでは、階級によって楽しむスポーツが明確に異なると言われています。例えば、ポロというスポーツがあります。これは、馬に乗ってボールを打ち合うスポーツなのですが、よほど経済的に恵まれた特権的な人でないとできないとされています。そして、クリケットやラグビー、ゴルフなどは、中流階級から上流階級、それこそアッパーミドル・クラスより上あたりが普通に楽しむスポーツです。イギリスというとサッカー——イギリスではフットボール (football) と言います——というイメージがありますが、これはワーキング・クラスのスポーツであって、アッパーミドル・クラス以上の人がサッカーの試合に関心を示すことは、実はほとんどないのです。もちろん、今でこそサッカーというのは商業的にもてはやされていますから、多少知られているかもしれませんが、少なくともサッカーは伝統的に、ワーキング・クラスの人々が行うスポーツであるとされてきました。

先ほど言いました魔法世界のクィディッチというスポーツなのですが、これはポロといろいろな点で似ています。まず、ポロが乗馬と球技の技術を同時に要求されるのと同様に、クィディッチは箒に乗る技術と球技の技術を同時に要求されます。また、クィディッチは7人の選手がいて、7人全員にそれぞれの役割が明確に決まっています。例えば、スニッチと呼ばれる小さなボールを追いかけるシーカーであるとか、ゴールを守るゴールキーパーであるとか、そのような役割が明確に決まっているのです。これはポロでも同様です。ポロでは4人が1チームを組みますが、それぞれナンバー1、ナンバー2、ナンバー3、ナンバー4と名付けられていて、ナンバー1が最も攻撃的で、ナンバー4が最も守備的であるとい

うように、明確に役割が決められています。ですから、恐らくこのクィディッチは、ある程度ポロを意識して考案されたスポーツでないかと私は思っています。

魔法世界の人々は、クィディッチには夢中になっていますが、当然ながらサッカーのことはまるで知りません。それを明確に示すエピソードが、『ハリー・ポッターと賢者の石』にありますので、見てみましょう。なお、このレジュメの和訳は全て私がつけた訳なので、いろいろ至らないところもあると思いますが、こちらを主に読み上げるという形で、引き続き進めさせていただきます。これは、ロンがマグル出身の生徒である同室のディーン・トーマスと、サッカーについて議論をするところです。

ロンは同室のディーン・トーマスとサッカーについてすでに激しい議論をしていた。ロンは、ボールをひとつしか使わず、選手が空を飛んではいけないスポーツのどこがおもしろいのか分からない、と言った。(Harry Potter and the Philosopher's Stone, by J. K. Rowling, Bloomsbury, 1997, p.107)

例えば、イギリスの社会で、普段ポロに夢中になっている一人の少年が、サッカーが好きな少年をつかまえて、そんな馬にも乗らないスポーツなんてどこが面白いんだ、と言う場面をイメージしてみてください。ロンはそれと同じことをやっているのです。普段、クィディッチという魔法使いのスポーツに夢中になっているロンが、マグル出身のディーン・トーマスをつかまえて、そんな空を飛びもしないスポーツのどこが面白いんだと言っているわけです。これは恐らく、ロンとディーン・トーマスの間に階級差が存在するということをイメージさせるために、ローリングが意図的に挿入したエピソードだと私は思っています。

次に、居住空間の問題ということについて考えてみましょう。先ほど、魔法使いと一般の人々は同じ場所に住んでいるという話をしましたが、イギリスでもやはり階級の高い者と低い者が同じ土

地に住んでいるということがあります。むしろ、その方が一般的です。しかし、同じ町に住んでいても、その中のどの区域に家があるかということが、階級層をはっきり示す場合があります。例えば、同じ町中にハートフォード・ストリートとパーク・ストリートという通りがあったとして、ハートフォード・ストリートの方にはアッパーミドル・クラス以上の人が住み、パーク・ストリートの方にはロウアーミドル・クラス以下の人が住んでいて、ハートフォード・ストリートとパーク・ストリートでは、通りの雰囲気は全然違うということが現にあります。もちろん、それぞれの通りに住んでいる人たちは、お互いに全く関心がありませんし、そもそも知りもしませんので、交流がありません。こういうことは、別に昔がそうだったという話ではなくて、近代における郊外の新興住宅の発展に伴い、むしろそういう傾向が強化されるきらいがあります。次の文章は、アドニスとポラードという人たちがイギリスの階級社会について書いた本からの抜粋です。

階級や準階級はそれまでになく綿密に区分されるようになり、その結果単一の階級のみが属する「囲い地」が形成され、異なる囲い地の間ではお互いが知り合わないし口もきかないという状況が生じた。株式仲買人が住む、大きな車のある一戸建の家が並び、私立幼稚園がある一画の生活は、かつての地主の暮らしが村の救貧院の暮らしと異なり、紡績業者の住宅が彼の職人たちの小屋と異なっていた以上に、ホワイトカラーの二戸建住宅が並ぶ一画の生活と異なっていたのである。(A Class Act: the Myth of Britain's Classless Society, by Andrew Adonis and Stephen Pollard, Hamish Hamilton, 1997, p.182)

これは分かりにくいと思いますが、とにかく同じ町中にあっても、通りを一つ隔てるだけで全く違う生活習慣や価値観といったものが存在するということだと思っただけだと思います。

このようなイギリスの階級社会を形成する大きな要因の一つが、先ほどから申し上げていますように、教育なのです。イギリスの中等教育学校

(secondary school) について、レジユメの2ページ目 (p.81) にまとめました。まず、95パーセントは公立校に通います。この大半がコンプリヘンシブ・スクールで、これは11歳から16歳までの義務教育です。日本でいえば、小6から高1までです。原則として選抜はなく、そのコンプリヘンシブ・スクールの学区にいる子どもであれば、誰でも入学できます。大学に進みたいと思う者は、さらに2年間 sixth form——これは要するに高校2年から3年に当たります——で学ぶこととなります。この sixth form に進まないで、就職する道を選ぶ生徒も少なくありません。もう一つ、グラマー・スクール (grammar school) というものがありまして、公立校進学者の約10パーセントがグラマー・スクールに所属すると言われています。こちらは選抜制で、コンプリヘンシブ・スクールに比べますと、高度な教育をするという建前です。公立校に行かない残り5パーセントが私立校に行きます。この私立学校のことは、イギリスではインディペンデント・スクール (independent school) と言います。これは、11歳から生徒を受け入れているところもありますが、13歳から受け入れているところが多く、13歳から14歳を third form と言います。なぜ、third から始まるのかというと、11歳から (first form) と12歳から (second form) の教育課程を持っているところもあるので、13歳からを third form と言うのです。14歳から15歳が fourth form、15歳から16歳が fifth form、16歳から18歳の2年間は sixth form です。これは、コンプリヘンシブ・スクールの生徒が通う sixth form と年代的には共通しています。このようなやり方で教育が行われるのが私立学校なのです。

(3) パブリック・スクール (public school)

私が先ほどから話しておりますパブリック・スクールというのはそもそも何かということなのですが、public というのは「公」という意味ですが、このパブリック・スクールは公立学校ではありません。これは、伝統のある私立中等教育学校です。その多くは寄宿制を採っており、イギリスのジェントルマン階層の子弟を養成する学校として、深くイギリスの文化・社会の中に浸透しています。

パブリック・スクールに通う人、あるいは通った経験がある人というのは、実際にはごくわずかなのですが、パブリック・スクールの文化やイメージというのは、イギリス社会に広く浸透しています。パブリック・スクールを舞台としたテレビ番組などが広く視聴されていまして、パブリック・スクールに行かないような階層の人たちにも楽しまれている状況があるのです。ですから、パブリック・スクールはイギリス文化を形成する重要な要因の一つであると言えるでしょう。

しかし、パブリック・スクールとは何かということを決めるのは、それほど簡単な問題ではありません。そのことについて話しますと長くなりますが、レジユメの2ページ目 (p.81) の [3] (1) の④に書いてありますように、「イートン・グループ」、「ラグビー・グループ」と呼ばれる、誰もがあそこはパブリック・スクールだと認めるような主要パブリック・スクールは29校あると言われていました。この29校の主要パブリック・スクールに在籍する生徒は、同世代の0.5パーセントに過ぎません。ところが、例えば1984年9月に組閣された内閣では、22名の閣僚のうち15名が、これらの主要なパブリック・スクールの出身者でした。これは、この時だけ突出していたというわけではありません。むしろ、たいていの内閣は、これらの主要パブリック・スクールの出身者で構成されるのが通例なのです。このように、非常に少数ではあるのですが、イギリスの社会に、文化的にも政治的にも決定的な影響力を持っている一部の有名私立中等教育学校が、パブリック・スクールであるとお考えいただくとよいかと思えます。

パブリック・スクールは、イギリスの階級社会を構成するのに、非常に大きな役割を持っています。閣僚だけではなく、公務員、外交官、裁判官、また軍隊、英国国教会、銀行などのエリートが多くが、これらの主要パブリック・スクールの出身者なのです。したがって、パブリック・スクールは、私が先ほどから説明していますような、イギリスの階級差、階級社会、階級構造といったものを維持し、再生産するための重要な装置であるわけです。次の文章は、ウォルフォードという人のパブリック・スクールに関する本からの抜粋です。

パブリック・スクールは伝統的に、大学、特にオックスフォード大学とケンブリッジ大学との間に緊密なつながりをもつ。そしてこれらの大学を通じて、あるいは直接に、社会的地位の高い職業とのつながりをもっている。親たちは、息子たちをパブリック・スクールに入学させ、費用を支払うことによって、権力と名声をとまなう自分たちの階級構造内での地位をまちがいになく彼らに受け継がせようとしてきたのである。(Life in Public Schools, by Geoffrey Walford, Methuen, 1986, p.11)

ここで、ホグワーツはパブリック・スクールかという問題が生じます。これについては、研究者の間でも異なる見解があるのです。例えば、ブレイクという人は、ホグワーツは伝統的な意味でのパブリック・スクールではないと主張しています。その根拠は、まず入学試験がないということ、それから授業料がかからない——本などは買わなければいけないのですが——ということ、さらに、中国系やインド系など、さまざまなエスニシティの生徒が入学しているということなのです。例えば、ハリーのガールフレンドになるチョウ・チャンという女の子がいますが、この名前は明らかに中国系ですし、それから、パーバティという女の子はインド系の名前です。ですから、はっきりとは言及されませんが、この子たちは恐らく、いわゆるアングロ・サクソン系ではなくて、中国系やインド系の生徒だと思われます。このように、アングロ・サクソン以外にも、さまざまなエスニシティの生徒が入学しているということで——もちろん、実際のパブリック・スクールにもそのような生徒は入学しているのですが——、つまり多様なエスニシティの生徒が共に学ぶ場として描かれているという点で、ホグワーツはパブリック・スクールのイメージとは違うとブレイクは言っているのです。

ホグワーツが古典的な意味でのパブリック・スクールではないということをもう一度指摘しておきたい。ホグワーツは生徒の魔法の能力や両親の階級にもとづく選別を行わない。それは、

悪しき傾向のあるスリザリン寮の生徒たちを含め、魔法世界のすべての子どもたちのために、そして他にも学校が提供する教育にふさわしい能力をもつすべての者たちのために存在するのである。(The Irresistible Rise of Harry Potter, by Andrew Blake, Verso, 2002, p.107)

しかし、私はこのブレイクの見解は違って、ローリングはむしろhogwartsのパブリック・スクール性を隠蔽するために、殊更にこのように書いているのだと思っています。なぜかと言いますと、確かにhogwartsには入学試験がありませんが、希望者が入学できるわけではないのです。これは、コンプリヘンシブ・スクールとの決定的な違いです。hogwartsに入学できるかどうかということを決めるのは、学校側による一方的な選抜だけです。ある日突然、フクロウがhogwartsからの手紙を運んで来て、入学していいですよと言ってこない限り、絶対に入学できません。確かに、ハーマイオニーのようなマグルの子どもたちも入学しています。しかし、ハリーの母であるリリーの姉のペチュニアという人は——ハリーのことをいじめていた、例のおばさんです——、本当はhogwartsに入りたくて仕方がなく、自分もhogwartsに入れてくださいとダンブルドアに直接手紙を書くのですが、もちろん入学は許可されません。つまり、学校側によって選ばれない限り、どれほど努力しても入学できない。それがhogwartsという学校なのです。

さらに、hogwartsに入学した者と入学できな

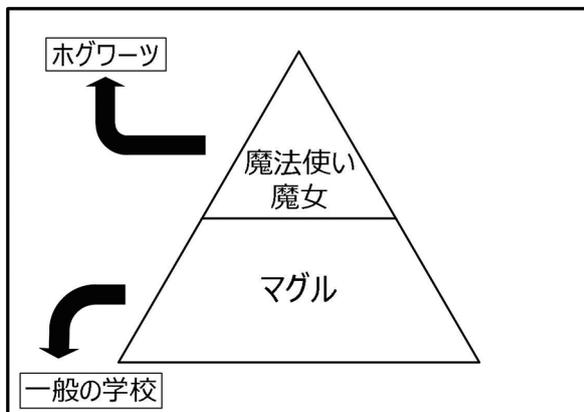


図3

かった者の間には、決定的な力の差が生じます。それは、リリーとペチュニアの関係を見ると非常に明らかです。つまり、hogwartsに入って魔法使いになってしまえば、事実上、マグルの人々を殺そうが、記憶を修正しようが、何でもやりたい放題なのです。もしそうしたいと思えば、そうできるだけの力を持つてしまうのです。

魔法使い (wizard) と魔女 (witch) という、魔法を使える人々の社会が存在する一方で、マグル社会というものが存在する。そして、魔法を使える人たちが行く教育機関がhogwartsであり、マグルの人たちは一般的な学校に行くわけです(図3)。つまり、学校側によって選ばれて、hogwartsに行けるか行けないかということは、この両者の力関係に決定的な影響を及ぼします。

実は、ローリングも教育に関して、この両者の差を体感するような経験をしています。ローリングの父は航空機工場に勤める技師で、大学は出ていませんでした。ですので、ロウアーミドル・クラスの一番下の方か、ひょっとするとワーキング・クラスか、そのあたりの階層の出身であったと考えられます。

ところが、ローリングの父は、自分が大学を出なかったために非常に苦労したという思いがあり、また、自分の娘は頭がよかったですから、何とか高等教育を受けさせたいと願っていました。ローリングはコンプリヘンシブ・スクールに通いましたが、もちろん、先ほど説明しましたような進学のための sixth form に進み、オックスフォード大学への進学を志して、大学受験のための A レベル試験を受験します。日本で言えばセンター試験のようなものだと思います。ところが、非常に好成績であったにも関わらず、結果は不合格だったのです。つまり、ローリングはコンプリヘンシブ・スクールから、本来パブリック・スクールの人が進むような大学であるオックスフォードに進もうとしたのですが、たいへん成績がよかったにも関わらず、不合格という結果になったわけです。これについて、ローリングを指導したある教員は、合格しなかったのは成績のせいではなく、彼女が公立学校出身であったからだと述べています。スミスという人が書いたローリ

ングの伝記から、その部分を引用します。

彼は、パブリック・スクールの卒業生どうし、また出身校との結びつきによって形成される学閥を糾弾する。「人が個人の資質ではなく、出自による特権によって評価される“古いイギリス”を終わらせるときがきています。伝統的な大学は女性やあらゆる階層出身の人々に門戸を開くべきです。」(J. K. Rowling: *The Genius behind Harry Potter*, by Sean Smith, Arrow, 2002, p.80)

ロウアーミドル・クラス以下の、コンプリヘンシブ・スクールに通うような階層に生まれた人は、たとえどんなに頭がよくて、どれほど努力しても、なかなかパブリック・スクールからオックスフォード、ケンブリッジへというルートに乗ることができない。それは、もともとパブリック・スクールからオックスフォード、ケンブリッジへと進むような人々が、自分たちの特権的な立場を維持するためにがっちりと手を組んでいて、このロウアーミドル・クラス以下の人々を、そのような教育の場から排除しようとしているからである。そのように、この先生は主張しているのですね。ローリング自身が実際に、恐らくロウアーミドルの下の方の家庭に生まれて、そこから高い教育を目指そうとしたのだけれども、コンプリヘンシブ・スクール出身者であるということによって、そこから排除されてしまうという経験を持っているということを押さえておいていただきたいのです。

ハリーのもう一人の親友として、ハーマイオニーという女の子が出てきます。ローリングはある場所で、ハーマイオニーは私の分身であるというふうに言っているのです。これはどういうことかと言いますと、ハーマイオニーはマグル出身の女の子で、父も母も魔法が使えませんが、彼女はたまたま非常な才能に恵まれ、ホグワーツへの入学を許可されます。そこで、非常な努力と、また本人の才能によって、どんどん頭角を現していくのです。ところが、彼女はホグワーツに入りますと、自分がマグル出身者で、もともと魔法使いの

一族出身ではないということ、さまざまな形で意識させられます。例えば、ロウアーミドル・クラス以下の子どもが非常に努力して、幸運にも恵まれてパブリック・スクールに入ったとしても、その場合、恐らく自分が本来パブリック・スクールに進むような階層の出身ではないということ、いろいろな形で意識させられて、そこでいじめられたり、仲間はずれにされたりといった経験をするはずなのです。ハーマイオニーはマグル出身者であるにも関わらず、ホグワーツという魔法使いの学校に進学することになって、まさにそういう体験をしています。このことから考えても、ローリングが、より高い教育機関を目指そうとして挫折した自分の経験をハーマイオニーに投影しているということは、まず間違いないと思われるのです。それが恐らく、ハーマイオニーは自分の分身であるとローリングが言う理由なのではないでしょうか。このように、ホグワーツは明らかにパブリック・スクールのイメージで書かれています。

「ハリー・ポッター」の世界において、階級差として機能しているのは、現実のイギリスのような、土地を持っているだとか、お金を持っているだとか、あるいは医者とか弁護士とかそういう職業に就いているだとか、そういったようなことではないのです。例えば、ハーマイオニーの両親は歯医者さんですから、それほど階級が低いわけではありません。そうではなくて、「ハリー・ポッター」の作品世界で階級差として描かれているものは、魔法使いの世界に属するか、それともマグルの世界に属するかという、この両者を分け隔てる決定的な差なのです。これはまさに、ロウアーミドル・クラス以下か、アッパーミドル・クラス以上かという、その差に相当していると考えられます。

先ほども言いましたように、パブリック・スクールは、ロウアーミドル・クラス以下の世界とアッパーミドル・クラス以上の世界を分け隔てるために、決定的な機能を果たす機関なのです。それと同じように、ホグワーツはマグルの世界と魔法使いの世界を分け隔て、この両者の間にある階級的格差を維持、あるいは再生産するために、恐らく最も重要な役割を果たしている機関なのです。つ

まり、ホグワーツに入ることができれば魔法使いの世界に属し、ホグワーツに入ることができなければマグルのままに留まる、そのような役割を果たしているわけです。どちらの世界に属するかということを決める選別機関がホグワーツなのです。これはイギリスの現実世界において、パブリック・スクールが果たしている役割とまさに重なります。したがって、ローリングは明らかにホグワーツをパブリック・スクールとして描いていると私は考えています。

〔5〕「学校物語」(School Story) の系譜

それでは、このようなパブリック・スクールを舞台として書かれた学校物語の系譜について、少し話しておきましょう。まず、学校物語とは何かということなのですが、主に19世紀後半から20世紀前半にかけて書かれた、パブリック・スクールの生徒を主人公とする作品です。その多くは、自由と規律、公正なスポーツマンシップと互いの尊重など、イギリスの紳士が身に付けるべき資質を伝えることを目的としています。このような作品というのは、イギリスの、特に子どもの本の中に伝統的にありまして、20世紀に入ってもしばしば書かれていました。代表的な作品を少し挙げておきましょう。

まず、最も有名な作品と思われるのが、トマス・ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』(*Tom Brown's School Days*)です。この作品には、自分より幼いアーサーという男の子が入寮してきて、その子が寝る前にベッドにひざまずいてお祈りをし続けるのを見て、トムがショックを受けるという場面があります。他の生徒たちは、アーサーが信心深い態度を取っているのを見て、ちょっとあざけるような様子を見せていますが、トムはその態度に非常に感銘を受けて、アーサーを守ってやろうという決意を固めます。この『トム・ブラウンの学校生活』という作品は、ラグビー校という、実在の有名なパブリック・スクールに入学したトムが、さまざまな友人たちとの交流を深めつつ、次第に紳士としての資質を磨き、身に付けていくというストーリーなのです。

もう一つ有名な作品として、F. W. ファラーの

『エリック、一步また一步』(*Eric, or Little by Little: a Tale of Roslyn School*)という作品があります。この作品は先ほどとは逆に、インド帰りの少年であるエリックが、イギリスのパブリック・スクールに入寮する話なのですが、そこでいろいろ挫折がありまして、たばこを吸うとか、お酒を飲むとか、悪い習慣を覚えてしまって、次第に墮落していき、最後は悲劇に終わります。『トム・ブラウンの学校生活』が前向きな作品だとしたら、『エリック、一步また一步』は正反対で、ひたすら後ろ向きの作品ですが、大変人気がありまして、この両者が代表的な学校物語であると言われているのです。

さらに、20世紀の人気のある作品として、フランク・リチャーズの「ビリー・バンター」(*Billy Bunter*)シリーズというものがあります。このビリー・バンターは本来脇役だったのですが、どんどん人気が出て、主役を食ってしまいまして、今ではこのストーリーは「ビリー・バンター」シリーズという名前で知られています。これは、1908年から1940年にかけて『マグネット』(*The Magnet*)という週刊誌に連載された作品です。また、イーニッド・ブライトンという人の『おてんばエリザベス』(*The Naughtiest Girl in the School*)という作品があるのですが、彼女はこれ以外にも、女の子の寄宿学校を舞台とする一連の作品を書いておりまして、それが20世紀における代表的な学校物語として知られています。

面白いのは、フランク・リチャーズもイーニッド・ブライトンも、パブリック・スクールに通った経験はないということです。すなわち、彼らは19世紀の学校物語の伝統を知って、それをある意味模倣する形で、20世紀の新たな学校物語を作り上げているわけなのです。このことは、パブリック・スクールに通うような階層ではない人々にとっても、この学校物語のイメージがいかに深く浸透していたかということを表しています。フランク・リチャーズの「ビリー・バンター」シリーズも、イーニッド・ブライトンの「おてんばエリザベス」シリーズも、どちらもパブリック・スクールに通うような階層でない家庭の子どもたちにも、非常に人気があつて、広く読まれているのです。

次に、クラークという人の、学校物語とは主としてどのような作品かということが書かれている文章を載せました。彼はむしろ、学校物語の伝統に対して少し批判的な立場を取っているような本を書いているわけなのですが、その冒頭で、伝統的な学校物語とはこういうものであるということをまとめているわけです。

イギリスの男子パブリック・スクールを舞台とする標準的なストーリーは、やがて一つの類型となった。主人公はごく普通の善良な少年で、とくに頭がよいわけではないが、スポーツには熱心である。われわれは彼が学校に到着し、入学早々いたずらをしたりもめごとを起こしたりするのを見る。彼は上級生に畏怖の念を抱き、すすんでファグ（この語は、まだ露骨に性的な意味をもっていなかった）として、上級生の学習室でフォークにパンを刺したパンを火にかざしてトーストにしたり、お茶の用意をしたりとささやかなサービスをする。

ファグというのは、後でまた出てきますが、下級生が上級生に対して、いろいろ身の回りの世話をするという習慣です。

やがて彼は進級して最上級生となり、彼自身畏怖される存在となって、たいてい監督生かクリケット・チームの主将をつとめる。授業の場面もあるが、せいぜい1～2段落で、その一方運動場の場面はたいてい何ページにもわたって続き、少なくとも1つの試合についてわくわくするような詳細な描写がある。スポーツ以外の肉体的試練もあるが、それはしばしば学校のいじめっ子との戦いで、主人公は、たとえそのガキ大将を倒せないとしても、雄々しく自分を貫く。その仇敵がおぼれかけているところを主人公が救うという場面もある。モラルに関する試練もあり、例えば試験問題を盗んだ疑いが誤って彼にかけられるが、彼はその責めを一身に負う。むち打ちの罰を受けたり、退学させられそうになったりするが、けっして真犯人のことを告げ口しない。そしてむしろ最後には彼の疑いは晴

れる。かくして、競争（スポーツ、いじめっ子との対決）と、仲間との連帯（スポーツ、告げ口をしないこと）との均衡がとられる。物語の最後では、主人公は卒業を前にして学校時代の楽しさと功業について懐旧にふけており、たいてい語り手が彼と友人たちのその後の運命について述べる。ある者は王室顧問になり、ある者は海軍大臣になり、ある者はザンジバルの司教になる——このように、この種の物語とイギリスの帝國的活動との結びつきが強調されるのである。（*Regendering the School Story*, by Beverly Lyon Clark, Garland, 1996, p.4）

まとめてみると、このようなイメージを持った一連の作品が、学校物語として知られているわけなのです。その代表的な作品のうちの二つが、先ほど紹介した『トム・ブラウンの学校生活』と『エリック、一步また一步』なのです。

〔6〕学校物語としての「ハリー・ポッター」シリーズ

これでお分かりいただけると思うのですが、「ハリー・ポッター」シリーズには、このような典型的な学校物語の要素がほぼ全てそろっています。まず、主人公がトラブルに巻き込まれたりいたずらをしたりする場面が、入学早々から数多く描かれます。そして進級すると、友人のロンやハーマイオニーが監督生になったり、ハリーがクイディッチのチームの主将になったりということが描かれます。もちろん、寮対抗のスポーツ競技ですとか、それ以外でも、グリフィンボール寮やスリザリン寮といった、ホグワーツの中の寮同士の張り合いがあるということは、物語の主要なテーマになっています。そして、学校内でいろいろ不当な行為が行われる場合は、ハリーは断固として、それに抵抗します。さらに、主人公がいわれのない疑いをかけられて、それを晴らさなければいけないという状況もしばしば描かれています。つまり、「ハリー・ポッター」はある意味で、20世紀後半以降に書かれた最も典型的な学校物語の一つであると言えます。

〔7〕トムは誰と闘うのか

ところが、実は『トム・ブラウンの学校生活』と「ハリー・ポッター」を比較していきますと、いくつか決定的な違いが見えてきます。それは、主にトムやハリーが、それぞれ誰と戦うのかということです。トムが誰と戦うのかというところを見ていきましょう。まず、自分たちに奉仕——ファギング (fagging) と言います——を強いる5級生のフラッシュマンです。トムが4級生の時に、5級生のフラッシュマンが、自分に奉仕することを強いるという場面があります。例えば、第1部第8章では、競馬の当たりくじを上級生に譲らなかったために、フラッシュマンがトムを暖炉で火あぶりにします。同じ第1部の第9章では、友人のイーストと共に、フラッシュマンと格闘し、5級生のディグズのサポートもあって、何とか彼を倒し、その問題が解決します。これは『トム・ブラウンの学校生活』の中でも主要なエピソードです。

さらに、第2部第5章で、トムは年下の友人ジョージ・アーサーに暴力を振るおうとする5級生のウィリアムズを制止し、彼とボクシングの試合をすることになります。このアーサーというのは、先ほどお話した、ベッドの横にひざまずいていた子です。トムは、自分がジョージ・アーサーの保護者であると任じまして、彼をいろいろな場面で守ろうとし、また、そのジョージ・アーサーから大変よい影響を受けるという展開があります。このように、トムが戦う相手は基本的に上級生なのです。その点に関して、印象的な場面を紹介いたします。これは、トムと友人のハリー・イーストが話し合っている場面で、「韋駄天」というのはハリー・イーストのあだ名です。

「ねえ、韋駄天」と、ロウソクの芯を切ろうと立ちあがりながら彼はついに言った。

「五級の連中はなんの権利があつてあんなに僕らをこき使うんだろう。」

「君に彼らをこき使う権利がないのと同様、権利なんかないさ」と、イーストは『ピクウィック・ペーパーズ』の初期の巻から目を上げずに答えた。これは出版されたばかりで、彼はソ

ファーに仰向けになってのんびりとそれを読みふけていたのである。

(中略)

「いいかい君、僕はこの問題についてずいぶん考えてきたのだよ」と、トムはまた始めた。

「分かっているよ。奉仕のことだろう。あんなものくそ喰らえだ。でもトム、聞けよ…ここが面白いんだ。ウィンクル氏の馬が…」

「そして僕は決心したよ」と、トムは口をはさんだ。「六級生のため以外には奉仕をしないと。」(Tom Brown's School Days, by Thomas Hughes, Blackie & Son, 1857, p.134)

6級生というのは、パブリック・スクールのラグビー校の最上級生のことでして、学校のためにさまざまな役職を負っているのです。その見返りとして奉仕をさせる権利があるのです。ですから、6級生が自分たちに奉仕を要求するのは正当なだけけれども、6級生ではない5級生のフラッシュマンが自分たちに奉仕せよというのは不当である。だから、自分はそれに断固として抵抗するというのが、トムがここで言っていることなのです。このようにトムは、学内で行われている不当な行為に対して抵抗するために立ち上がりますが、相手は上級生なのです。もう一箇所、これは卒業が近くなってからのことなのですが、トムがアーサーと話し合っていて、自分のこれまでの学校生活を少し回顧している場面を紹介いたします。

「そうだといいが。しかし君はひとつ忘れてるよ。僕が後に残したいものものをね。僕が後に残したいのは」と、トムは、深く心を動かされているようにゆっくり話した。「一度も下級生をいじめたことがなく、上級生に屈したこともない男の名だよ。」(Tom Brown's School Days, p.240)

つまり、トムにとって学校の中で問題なのは、常に上級生か下級生ということなのです。彼が問題にするのは、下級生をいじめるかどうか、そして、上級生に服従するか、抵抗するか、という点なのです。彼の問題意識のベクトルは常にそちらを向

いているのであって、それ以外に『トム・ブラウンの学校生活』という作品の中で、他の生徒と対立する要因になるようなことは、ほとんどないのです。これが、「ハリー・ポッター」シリーズと非常に違うということは、「ハリー・ポッター」の話をお読みの方にはお分かりいただけると思います。

(8) ハリーは誰と闘うのか

まず、「ハリー・ポッター」には、レジュメの7ページ目 (p.86) にも書きましたが、ファギングがありません。つまり、 hogwarts にはトムが直面する最大の問題の一つである下級生の奉仕が存在しないのです。また、シリーズ全巻を通して、ハリーが上級生と対決したり、上級生と下級生の諍いに巻き込まれたりする場面はありません。つまり、「ハリー・ポッター」シリーズ全7巻を通じて、ハリーは一度も上級生とトラブルを起こしていないのです。もちろん、下級生をハリーがいじめるということは当然ないのですが、下級生に対するいじめが問題になることも、基本的にはありません。このことについて、ステイジという人が少し論じていますので、御覧ください。

ローリングはまた、パブリック・スクールの生活の暗い面をソフトに描いている。上級生による下級生への虐待はない。『トム・ブラウンの学校生活』に見られるようなファギング（上級生が下級生を召使のように働かせること）の習慣のようなものはまったくないのである。フラッシュマンのような上級生を宿敵とする代わりに、ハリーは同い年の敵と争わなければならない。そして彼は物語の冒頭から、まことに申し分なくマルフォイと渡り合う。（“Harry Potter, Tom Brown, and the British School Story: Lost in Transit?” *The Ivory Tower and Harry Potter: Perspectives on a Literary Phenomenon*, by David K. Steege, University of Missouri Press, 2002, p.153）

もちろん、ファギングというのはショッキングですので、ローリングがそれを避けたということ

は、あり得なくはありません。ただし、私はローリングがこれほど『トム・ブラウンの学校生活』をはじめとする学校物語の伝統に沿って作品を作っているにも関わらず、上級生への下級生による奉仕の強要の場面を全く書かなかったということは、恐らく明確な意図があつたことだと思っています。単にそれは、少しイメージがよくないから外したという趣旨のものではなく、恐らくファギングを描かなかったことが、ローリングが「ハリー・ポッター」の中で描きたかったことに決定的に影響しているのではないかと考えています。

では、学校の外で闘うヴォルデモートなどの相手はひとまず置いておくことにして、学校物語の伝統に沿って、ハリーが学校内で戦う相手は誰なのかということを考えてみましょう。

まずは、マルフォイのような、魔法世界の旧家出身で、自分たちを純血 (pure blood) とみなしている生徒たちです。例えば、マグルの血を引くハーマイオニーなどを、穢れた血 (mudblood) と呼んで差別しています。ハリーが他の生徒と対立するポイントとして、最もよく現れるのがこれなのです。つまり、ハーマイオニーのようなマグル出身者を差別する純血の生徒たちとの戦いが、最もよく起こるパターンです。マルフォイがハーマイオニーを穢れた血と呼んだことについて、ロンがマルフォイと衝突した直後の場面をお紹介します。

「あれはあいつが思いつくいちばん侮辱的な言葉だったんだ」とロンは、戻ってきてあえぎながら言った。「“穢れた血”はマグル出身者——つまり両親が魔法使いではないってことだよ——のすごく汚い呼び方なんだ。魔法使いの中には、マルフォイの一家みたいに、自分たちがいわゆる“純血”だからってんで、自分たちが誰よりも優れてると思ってる連中がいるのさ。」 (*Harry Potter and the Chamber of Secrets*, by J.K. Rowling, Bloomsbury, 1998, p.89)

これがまず第1の対立ポイントです。そしてもう一人、『不死鳥の騎士団』で、ハリー

たちが激しく対立するのが、ドロレス・アンブリッジという魔法省から派遣された教員です。この人は、最終的にダンブルドアを追い出して、自分がホグワーツの校長になってしまう人なのですが、魔法省の意向を受けてホグワーツに乗り込み、特にハグリットのような半巨人やルーピンのような人狼——いわゆる狼男です——とかケンタウロスなど、魔法世界で差別を受けている人たちを学校から排斥しようとしています。そして、学校の中でもさまざまな新しい規則を作ったり、生徒たちの活動を禁止したりするので、ハリーたちは、それに対して激しい抵抗運動を展開します。

そして最後は、間接的ではありますが、学校内に入り込んでくるヴォルデモートの勢力です。最終巻の『死の秘宝』でヴォルデモートは魔法省を乗っ取るわけですが、法令を発布して、ホグワーツからマグル出身者を排除するという政策を打ち出します。これは、ハーマイオニーがマグル出身者をホグワーツから追い出すという一件について、ルーピンに聞いている場面です。

「ヴォルデモートはホグワーツをどうしようとしているの？」ハーマイオニーはルーピンに聞いた。

「すべての魔女と魔法使いの子どもたちに入學が義務づけられた」と彼は答えた。「これは昨日告知されたんだ。大きな変化だよ。これまで一度も義務化されたことがなかったんだからね。もちろん、イギリスの魔女と魔法使いのほとんどはホグワーツで学んできたわけだが、もし両親が望めば、自宅で教育したり留学させたりすることもできた。このやり方でヴォルデモートは、魔法世界に属する者すべてを幼少期から監視下に置くことになるだろう。そしてこれはマグル出身者を根絶やしにするためのもう一つの方策でもある。なぜなら生徒たちは入學を許可されるには『血統証明』を受けなきゃいけない…つまり彼らが魔法使いの血を引いていることを魔法省に証明する必要があるんだ。」
(*Harry Potter and the Deathly Hallows*, by J.K. Rowling, Bloomsbury, 2007, p.173)

これまでは、マグルの出身者でも、魔法の才能があると学校側に認められれば、ホグワーツに入學することができました。ところが、ヴォルデモートはそれを一切禁止して、魔法使いの血を引いていない子どもたちがホグワーツに入ることを一切阻止しようします。つまり、この両者を分ける壁を絶対的なものにして、マグルの人々が魔法使いの世界に入ってくることを阻止することが、ヴォルデモートの最大の目的の一つなのです。この目的を達成したいがために魔法省を乗っ取り、ホグワーツを乗っ取ったように見えます。つまり、たった一つの目的のためだけに、あれほどの大騒ぎを引き起こして、大勢の人を殺し、大変な戦いを生じさせたというように見えるところがあるのです。ですから、そのようにホグワーツに入り込み、マグルを排除して、ホグワーツを魔法使いの一族出身の者たちだけのものにしようとするヴォルデモートの勢力と、ハリーたちは戦うことになるのです。

先ほどのマルフォイの話に戻りますが、マルフォイとハリーの間には学年や年齢の違いはありません。ですから、彼らの対立は、上級生だから下級生をいじめるとか、下級生が上級生に反抗するとか、そういうことではないのです。彼らの対立軸を形成するのは、マルフォイの血筋とその血筋の者たちが抱いている価値観、つまり、学校の外にある事情であるわけです。

『トム・ブラウンの学校生活』のラグビー校における対立点というのは、まずフラッシュマンがいて、トムがいて、アーサーがいるわけですが、彼らの間における対立は、学年が違うということによる対立です。それ以外に彼らの立場の違いを示すようなものは一つもありません。つまり、どちらの家柄が上か下かとか、どのような階層の出身であるとか、そのようなことは一切対立の要因としては書かれていないのです(図4)。フラッシュマンは多少お金持ちらしいので、上の階層の家の子どもかという気がするのですが、その一方で、もしかしたら成金の息子ではないかというようなイメージもあって、そのあたりのことは決してはっきり書かれておらず、大きな対立点にはなっていません。

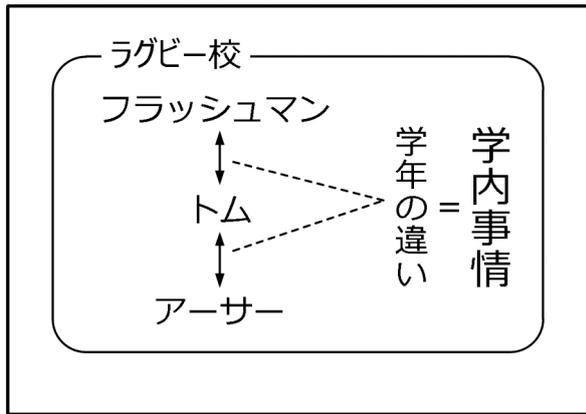


図4

ところが、 hogwarts では、マルフォイとその取り巻きと、ハリーやロン、ハーマイオニーの間に学年の違いはありません。彼らの対立軸を構成するのは、純血の人々と、混血 (half blood) の人々と、マグル出身者の人々の立場の違いです。すなわち、彼らの対立点は常に学校の外からやってきます (図5)。これは、学校物語のパターンを踏襲しつつ、ローリングが学校物語とは違う要因として書いている決定的なポイントの一つです。このことをはっきりさせるために、恐らくローリングは上級生の下級生に対する奉仕の強要を描かなかったのです。

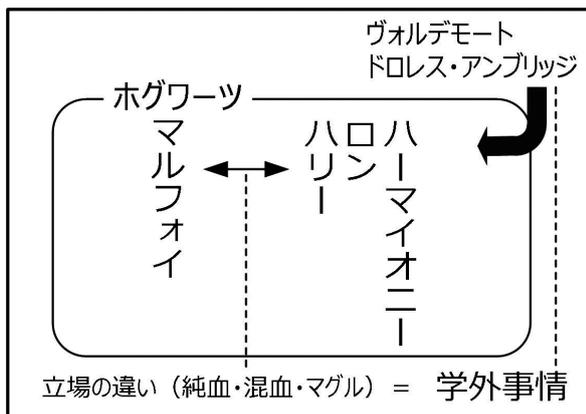


図5

(9) トムとハリーの闘う理由の違い

このように、トムとハリーは闘う理由がはっきり違うといえますか、対立するポイントが明確に違います。『トム・ブラウンの学校生活』では、生徒の同質性が強調されます。つまり、ラグビー校

の生徒の間に社会的立場の違いはないように描かれています。フラッシュマンもトムもアーサーも、どの階層の、あるいはどのような家の出身であるかということは、あまりはっきりとは語られていません。アーサーの父が牧師で、あまり裕福ではなかったということは書かれるのですが、それがストーリーの中で決定的な要因にはなっていないのです。そして、先ほどから言っていますように、彼らの立場の違いを生み出すものは学年と年齢だけ、つまり、彼らの対立点となるのは、学内の事情のみなのです。また、学校の外に存在する社会のさまざまな格差は、生徒たちの生活にはほとんど影響しません。ラグビー校の生徒は特権階級の出身であって、もちろん学校の周囲には、そのような特権階級ではない、もっと貧しい人々が大勢住んでいるのですが、そのような形で社会に格差が存在するという事は、少なくとも作品のストーリーにはほとんど影響しないのです。たまに生徒が外に出て行って、近所の農家の人とトラブルを引き起こしたり、あるいは、通りかかる馬車にいたずらをしたりと、そういうことはあるのですが、そのような学校の外の人々との関係が、学内で何か問題になったり、あるいは生徒たちの対立点を構成したりするということはありません。いわば、ラグビー校の外には、世界など存在しないかのような書き方をされているのです。実際、学内にいない人々で、ストーリー上重要な役割を果たすのは、トムの両親やアーサーの母親ぐらいなのです。ですから、あたかもラグビー校という特別な空間の外には世界など存在せず、何かこの生徒たちの間で対立が起こるとしたら、それは学内の事情で立場が違うということによるものである、という書き方をされます。

さらに、作品冒頭ではトム・ブラウンの家であるブラウン家が、あたかも階級の存在を気にしない家系であるような書き方がされています。その部分をご紹介します。トムが、スクワイア (squire) という郷士・地主階級の息子であるにも関わらず、近所の村の子どもたちと遊んでいるということが問題になったところからの引用です。

しかし幸いなことに、ブラウン郷士は隣人たち

と同じくらい頑固だったので、自分のやり方を押し通した。そこでトムや彼の弟たちは、大きくなっても村の少年たちと遊び続け、平等とか不平等とかいう考えは少しもその頭に浮かばなかった（レスリングや駆けっこや木登りににおける優劣は別だが）。こうした考えは、くだらない連中や、お上品な奥方の侍女にでも吹き込まれないかぎり、けっして子どもの頭に浮かぶものではないのである。（*Tom Brown's School Days*, p.4）

つまり、トムにはもともと、階級格差だとか、自分の階級が上だとか、そのような考えはまるでないのであって、そういう考え方は、世の中の偏見に満ちた大人たちが子どもたちに吹き込むから生まれるのだというような書き方をしているのです。もちろん実際は、そんなことはあり得ないのであって、いくらトムが気兼ねなく村の子どもたちと遊んだりしても、村の子どもたちやその両親の方は、トムに対して非常に気を遣っていたに違いないのです。そのような、実際にトムと周辺の村の人々の間にある社会的格差というものに目を向けず、そこから生じる緊張関係を一切書かず、特に、ラグビー校の中では、そのような社会的格差における対立、社会的格差が対立要因になるということが一切ありません。これが実は『トム・ブラウンの学校生活』の学校物語の大きな特徴であるだけではなく、学校物語というものを貫き通すイデオロギーの一つなのです。あたかも、周囲の社会のそういう政治的事情に影響されない純粋な空間であるかのように学校を描き、その中には社会的格差による違いなどなくて、あるのは学年という違いだけであるという書き方です。ローリングは学校物語のパターンを踏襲しつつ、まさにそのところを徹底的に崩しています。これが、今回私がお話したいことの最大のポイントなのです。もう少し、そのあたりを見ていきましょう。

これに対して、ハリーが戦う理由は常に学校の外からやってきます。これは先ほどからお話している通りです。hogwartsにおける生徒の対立軸は、純血か混血か、もしくはマグル出身であるかによって構成されます。つまり、彼らの対立は学

内事情ではなく、常に学校の外から来る要因によって決定されるのです。そして、『不死鳥の騎士団』という作品には、非常に重要な登場人物としてドロレス・アンブリッジが出てきます。この人は魔法省の意向を受けてhogwartsに乗り込んできて、そこで行われている授業を、魔法省に都合のよいように作り変えようとしています。魔法省は、hogwartsのトップであるアルバス・ダンブルドアという偉大な魔法使いの影響力を弱めたいという意向があって、そのためにドロレス・アンブリッジを送り込み、hogwartsを管理させることによって、ダンブルドアの動きを封じようとするのです。このように、全く学外の政治的事情によって、アンブリッジが乗り込んできて、それまでであった学校のやり方を次々と変えていくのです。例えば、いろいろあるのですが、典型的なのは、魔法省の意向に従うマルフォイら一部の生徒たちに、他の生徒を取り締まる特権を与えることです。その部分を御紹介しましょう。これは、マルフォイたちがアンブリッジの意向を受けて、*Inquisitorial Squad* という、審問部隊のようなグループを構成して、自分たちが他の生徒たちを取り締まることになったということを得意げに話している場面です。

「何ですって？」とハーマイオニーは鋭く聞いた。

「審問部隊だよ。グレンジャー」、マルフォイは言い、ローブの監督生バッジのすぐ下にある銀色の「I」の文字を指さした。「魔法省を支持する選ばれた生徒たちによる部隊さ。アンブリッジ教授みずから選抜したんだ。とにかく、審問部隊の隊員は減点する権限を現にもっている。だからグレンジャー、お前は新しい校長を侮辱したかどで5点減点。マクミランは俺に逆らったから5点。お前は気に食わないから5点だ、ポッター。ウィーズリー、シャツの裾が出ているぞ。だからもう5点減点だ。そうそう忘れてた。グレンジャー、お前は“穢れた血”だから10点減点だ。」（*Harry Potter and the Order of the Phoenix*, by J. K. Rowling, Bloomsbury, 2003, p.551）

減点というのは、寮対抗のポイント合戦みたいなものがありまして、このように、日頃の行いによって得点をもったり、あるいは減点されたりして、その総合点で一年間の寮の順位が決まるという制度があるのです。これは、寮同士の対抗意識を燃やす生徒たちにとっては非常に重要なことでして、毎年、寮同士でいかにポイントを稼ぐかという競争が行われ、その結果が学期の最後に発表されるということになっています。例えば、第1巻『賢者の石』では、ハリーたちの活躍で、最後にグリフィンドール寮がポイント合戦に勝利するところが非常に印象的な場面として描かれます。本来、これは教員が生徒に対して、ポイントを与えたり減点したりするものであって、生徒同士で減点し合うというのはいり得ないのです。ところが、アンブリッジはそここのところを作り変えてしまって、一部の生徒、それも、自分が代表している魔法省の意向に従う、自分にとって都合のよい生徒だけに、他の生徒に点を与えたり減点したりする特権を与えてしまいます。つまり、それまでのhogwartsの伝統的な制度を、自分の意向に沿って大きく変えてしまうということをアンブリッジは行うわけです。

さらに、先ほど言いましたように、ヴォルデモートの意向を受ける魔法使いたちが最終的にhogwartsに乗り込んできて、支配的立場になります。そうすると今度は、一部の生徒にポイントを与えとか、そういった生易しいことではなくて、今度は、例えばハーマイオニーのようなマグルの出身の生徒を一切hogwartsに入学させないという根本的な制度の改定が行われるのです。はっきりと書かれてはいませんが、マグル出身で魔法の才能を示す子どもを、一旦どこかに集めて、hogwartsに入学させずに始末してしまうというような可能性さえ、少し示唆されるところがあります。つまり、ヴォルデモートが外側から権力を振るい、自分の意向を代行するものをhogwartsの支配的な立場として送り込むことによって、それまでのhogwartsの制度が根本から変わってしまうのです。そのようなことが、最終巻の『死の秘宝』で起こります。もちろん、ハリーはそれに対して闘争を仕掛け、抵抗していく立場に立つのです。

ラグビー校においてトムが問題にするのは、常に上級生と下級生の関係だけです。もう後1～2年で卒業するという時にトムが思うのは、自分は上級生に決して屈しなかったし、下級生を決していじめなかったということです。トムにとって、自分の学校生活で最も重要なポイントは上級生と下級生の関係なのです。ところが、ハリーの怒りは、学内で対立しているマルフォイやアンブリッジだけではなくて、そういう争いをhogwartsにもたらした学外事情へと常に向かいます。つまり、ハリーが学内で引き起こす闘争、あるいは抵抗運動というのは、単にその学内事情に対応するだけではなくて、そのような学内での諍いを起こした外の世界に対する批判であり、怒りであり、抵抗になっていくのです。ハリーやロン、ハーマイオニーらの怒りが、学校の外側へ向かい、そこに存在する社会の制度や因習を批判するものになっていく。そのことは、『トム・ブラウンの学校生活』には決してないポイントです。もちろん現代的作品であるから、そういう要因があるのは当たり前だと考えることもできるのですが、ローリングはかなり意識的にその部分に変更を加えているのだと思われるのです。

(10)「ハリー・ポッター」シリーズは学校物語か？

最後に、そもそも「ハリー・ポッター」シリーズは学校物語なのかという話をしたいと思います。これまでのまとめのような感じですが、多くの学校物語が前提としていることがいくつかあります。一つは、学校は自立性をもった固有の組織であって、世の中の政治的状況から独立しているということです。先ほどから言っていますように、『トム・ブラウンの学校生活』では、ラグビー校というのは、外の世界に影響されない純粋な空間であるかのように描かれています。そして、その規範や価値観は伝統であり、時代が変わっても本質的には変化しないということも挙げられます。これは多くの学校物語で繰り返し語られることです。学生は入れ替わり、世の中の制度も変わっていくのだけれども、その学校を構成する規範や価値観というのは「伝統」であって、時代が変わったからといって簡単に変わるものではない

い、時代が変わっても通用する、いわば普遍的な価値観なのだということが強調されます。さらに、生徒たちは、学校という空間の中では、対等で平等であるということもまた、前提の一つです。立場の違いというのは、学年や年齢の違いであって、それ以外の社会的要因は関係がなく、一旦ラグビー校の中に入ってしまったら、どんな学生も対等で平等であるということは極めて重要なポイントなのです。学校物語というのは、学生同士のフェアな関係、あるいはスポーツにおけるフェアプレーの精神というものを強調します。学生が身に付けるべき重要な資質の一つとして、フェアプレー精神、つまり、常にフェアであるということをお教わります。ところが、学校に入ってきた瞬間から、社会的な事情によって学生の立場が違ふ、例えば純血であるか混血であるか、あるいはマグル出身かによって、学校の中での扱われ方が違ってしまふとなれば、そもそもフェアプレーも何もなくなってしまいます。つまり、フェアであるということをお学校物語の重要な価値観として打ち出すためには、学校の中においては、生徒同士は対等で平等であるということが大前提なのです。ですから、何度も同じことを話しますが、生徒の立場の違いというのは、学年の違いだけであるということが非常に強調されます。

そして、生徒たちは学校で身に付ける規範や道徳によって、社会に役立つ人材になるということです。多くの学校物語の最後では、生徒たちが卒業して、政府なり、軍隊なりのしかるべき地位に就いたとか、あるいは、植民地に行つて、これこれの役割を果たしたとか、そういった後日談がつくことが普通です。こういったことが、学校物語を構成する大前提となるポイントのうちのいくつかなのです。

ところが、「ハリー・ポッター」を学校物語と比較しつつ、つぶさに見ていきますと、ローリングが、まさにこれらの前提をピンポイントで崩しているということが分かってきます。まず、政治状況が学校に決定的な影響を及ぼします。そして、政治の世界で誰が実権を握るかによって、学校の規範や価値観が大きく変わります。ついこの間まで、生徒を取り締まる権限がなかった者に、突然

その権限が与えられたりするわけです。そして、生徒たちの学内の立場は、血筋や家柄によって決まり、彼らは決して平等ではないわけです。ハーマイオニー、ロン、ハリーとマルフォイの対立は、もちろんこの血筋の関係があるのですが、この対立は彼らの間だけにあつたわけではなくて、この hogwarts が始まって以来、純血であるか混血であるか、もしくはマグル出身であるかということは生徒たちの関係を定める重要なポイントになっていたことが、いろいろな場面で語られます。つまり、入学してきた時点で、生徒は決して平等ではないのです。

次のことについては、説明するとまた時間がかかりますが、実は hogwarts の生徒たちが学校で身に付ける技能は、社会の役に立ってはいません。例えば、「ゲド戦記」という魔法使いの少年の話は御存じでしょうか。この作品には、ロークという学校が出てくるのですが、魔法の才能のある者たちは、そのロークで学んで、その後いろいろな島に行つて、一般の人々と暮らすのです。そこで、病人の治療をしたり、道具を直してやったり、あるいは敵からその村人を守ったりだとか、そういったことをして一般の人々のために尽くします。ところが、hogwarts を出て魔法の力を身に付けた生徒たちが、一般社会に入つて、そこで一般の人々のために、病人を治してやったり、あるいはいろいろな物を直してやったりと、何か人の役に立つことを行う場面は一つもありません。hogwarts の卒業生は、全く魔法使いの社会のためだけに生きていくのであつて、マグルの世界、一般の人の世界には自分の存在を知られないようにしはしますが、そのマグルの人々のために、自分の魔法を使って役に立とうという意識は、彼らの頭の中には微塵も浮かばない、そういう描き方をされているのです。実際、hogwarts の生徒たちの就職先というのは、魔法省であるとか、魔法の病院であるとか、魔法の銀行であるとか、そういったところであつて、彼らが一般の社会に分け入つて、一般の人々のために魔法を使うということは、およそあり得ないものとして描かれています。これは要するに、生徒たちが hogwarts で身に付ける技能というのは、社会に役立つ技能というので

はなくて、魔法使いの人々とマグルの人々の間にある格差を維持・強化して、魔法使いのマグルに対する支配を維持するという目的のためにしか使われていないように見えるのです。これは実際に、パブリック・スクールでの教育がイギリスの社会において、パブリック・スクールに進むような特権的な人々と、それ以外の一般の人々との間にある格差を維持・強化するために使われているということ、まさに反映していると思われま

す。このようにローリングのホグワーツの描き方をつぶさに見ていきますと、学校の「伝統」と呼ばれるものが、その時々権力者にとって都合のよいイデオロギーの投影に過ぎないということ、まざまざと見せられることになってしまいます。これは、まさに学校物語がひたすら隠蔽しようとしてきたことなのです。学校というものは、純粋な空間でもなく、平等な空間でもなく、普遍的な空間でもなく、その時々権力者の手によって都合のよいように変えられるイデオロギー装置に過ぎない。これは、学校物語を書いた人が絶対に言って欲しくなかったこと、何が何でも隠蔽しておきたかったことであるはずで

す。すなわち、ローリングが描くホグワーツの在り方は、ある意味で、学校物語に対する究極のアンチテーゼなのです。そもそも、「ハリー・ポッター」シリーズにとってホグワーツは何かということ、もう一度考えてみてもよいかもしれません。レジユメの10ページ目(p.89)の[10] (3)のところですが、まず『死の秘宝』では、ハリーはもうほとんどホグワーツにはいません。結局、彼の闘いの最も主要な部分は学校の外で遂行されます。彼は学校の支援を得て闘うわけでもなく、学校の名誉のために闘うわけでもありません。実際、『死の秘宝』においては、学校はヴォルデモートの影響を受けて、彼の都合のよいように運営されていますので、一部の教師や生徒を除けば、基本的にはハリーの敵側に回るのです。

そしてもう一つ、『トム・ブラウンの学校生活』の目的は、本質的にはラグビー校そのものを描くことです。『トム・ブラウンの学校生活』の主演は、本当はラグビー校なのです。トム・ブラウンという少年は、そのラグビー校を描くための実例の一つとして登場するに過ぎません。だからこそ、ト

ム・ブラウンという非常に平凡な名前になっているのです。彼は、ある一人の生徒の実例に過ぎず、トマス・ヒューズが描きたいのは、ラグビー校そのものなのです。

一方で、「ハリー・ポッター」シリーズはホグワーツを描くための作品でないことは明らかだと思います。ホグワーツは、魔法の世界で展開される複雑な権力闘争、パワー・ポリティクス

の結節点の一つに過ぎません。作品の話が進めば進むほど、ホグワーツという存在は、物語の中で次第に相対化されていきます。いつもハリーを支え、守ってくれる絶対的な存在ではなくて、特にダンブルドアが亡くなった後は、ホグワーツとは、そのような権力闘争が展開される場の一つに過ぎないということが、ますます明らかにされていくのです。

このように、ローリングは「ハリー・ポッター」において、学校物語の伝統的なパターンを踏襲しながら、実はその学校物語が描こうとした価値観に対して、決定的な批判を突き付けています。学校物語が象徴するような特権的な人々のための教育機関のイデオロギーが、そこに属することのできない者を支配するための装置として使われてきたということ、ローリングはホグワーツの描き方を通して突き付けているように思われるのです。これはまた、ローリング自身が、特権的な人々のための教育を目指したにも関わらず、自分がそのような高い階級に属していなかったために拒否されたという思いから来るものでもあるのではないかと思います。ですから、「ハリー・ポッター」シリーズの中に描かれるホグワーツの在り方は、学校物語の構成を踏襲しているように見えつつ、実はさまざまなポイントで、それに対する決定的なアンチテーゼとして機能していて、恐らくそれが、学校物語の構成を採用したときのローリングの基本的な意図だったのだろうと私は思っています。

まだほかにもお話ししたいことがいろいろあるのですが、ここまでにごさ

せていただきたいと思います。ありがとうございます。

(ひしだ のぶひこ 川村学園女子大学文学部国際英語学科教授)

「学校物語の伝統からみる『ハリー・ポッター』シリーズ」紹介資料リスト

(本館) → 国立国会図書館東京本館で所蔵

デジタル化図書 (館内) → 「国立国会図書館のデジタル化資料」でデジタル化資料を閲覧可能 (館内限定)

電子ジャーナル (館内) → 電子ジャーナルを閲覧可能 (館内限定)

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号	備考
1	A Class Act: the Myth of Britain's Classless Society	Andrew Adonis and Stephen Pollard 著	Hamish Hamilton 1997	所蔵なし	
2	The irresistible rise of Harry Potter	Andrew Blake 著	Verso 2002	YZ-B124	
3	Harry's Girls: Harry Potter and the Discourse of Gender (Journal of Adolescent & Adult Literacy 52(4) 2008 所収)	Meredith Cherland 著	International Reading Association Inc. 2008		電子ジャーナル (館内)
4	Regendering the School Story	Beverly Lyon Clark 著	Garland 1996	所蔵なし	
5	Eric, or Little by little: a tale of Roslyn School	Frederic W. Farrar 作	A. & C. Black 1858	所蔵なし	
	Eric, or, Little by little: a tale of Roslyn School	Frederic W. Farrar 作	New ed. Hamilton 1971	VZ1-397	
6	Tom Brown's School Days	Thomas Hughes 作	Blackie & Son 1857	所蔵なし	
	Tom Brown's school days	Thomas Hughes 作	Macmillan 1889	VZ1-28	
	トム・ブラウンの学校生活. 上	トマス・ヒューズ 著 前川俊一 訳	岩波書店 1952	933-ch89t-M (本館)	デジタル化図書 (館内)
	トム・ブラウンの学校生活. 下	トマス・ヒューズ 著 前川俊一 訳	岩波書店 1952	933-ch89t-M (本館)	デジタル化図書 (館内)
7	Billy Bunter of Bunter Court	Frank Richards 作	Howard Baker 1969	VZ1-908	
8	Billy Bunter in the land of the Pyramids	Frank Richards 作	Howard Baker 1969, c1932	VZ1-909	
9	Billy Bunter and the Greyfriars pretender	Frank Richards 作	Greyfriars Press 1971, c1932	VZ1-910	
10	Billy Bunter and the terror of the form	Frank Richards 作	H. Baker 1970, c1932	VZ1-911	
11	おてんばエリザベス	ブライトン 作 佐伯紀美子 文	ポプラ社 1986. 1	Y8-3040	
12	おてんばエリザベスのすてきな夢	ブライトン 作 佐伯紀美子 文	ポプラ社 1986. 6	Y8-3494	
13	おてんばエリザベスのすてきな友だち	ブライトン 作 佐伯紀美子 文	ポプラ社 1987. 3	Y8-4104	

学校物語の伝統からみる「ハリー・ポッター」シリーズ

14	Heteronormative Heroism and Queering the School Story in J. K. Rowling's Harry Potter Series. (Children's Literature Association Quarterly 31 (3) 2006 所収)	Tison Pugh and David L. Wallace 著	Johns Hopkins University Press 2006	YZ91-A14	
15	Harry Potter and the philosopher's stone	J. K. Rowling 作	Bloomsbury 1997	Y8-A4722	
	ハリー・ポッターと賢者の石	J. K. ローリング 作 松岡佑子 訳	静山社 1999. 12	Y9-M99-228	
16	Harry Potter and the chamber of secrets	J. K. Rowling 作	Bloomsbury 1998	Y8-A4723	
	ハリー・ポッターと秘密の部屋	J. K. ローリング 作 松岡佑子 訳	静山社 2000. 9	Y9-N00-108	
17	Harry Potter and the prisoner of Azkaban	J. K. Rowling 作	Bloomsbury 1999	Y8-A4724	
	ハリー・ポッターとアズカバンの囚人	J. K. ローリング 作 松岡佑子 訳	静山社 2001. 7	Y9-N01-133	
18	Harry Potter and the goblet of fire	J. K. Rowling 作	Bloomsbury 2000	Y8-A4725	
	ハリー・ポッターと炎のゴブレット. 上巻	J. K. ローリング 作 松岡佑子 訳	静山社 2002. 11	Y9-N03-H59	
	ハリー・ポッターと炎のゴブレット. 下巻	J. K. ローリング 作 松岡佑子 訳	静山社 2002. 11	Y9-N03-H60	
19	Harry Potter and the order of the phoenix	J. K. Rowling 作	Bloomsbury 2003	Y8-B6834	
	ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団. 上巻	J. K. ローリング 作 松岡佑子 訳	静山社 2004. 9	Y9-N04-H325	
	ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団. 下巻	J. K. ローリング 作 松岡佑子 訳	静山社 2004. 9	Y9-N04-H326	
20	Harry Potter and the Half-Blood Prince	J. K. Rowling 作	Bloomsbury 2005	Y8-B3747	
	ハリー・ポッターと謎のプリンス. 上巻	J. K. ローリング 作 松岡佑子 訳	静山社 2006. 5	Y9-N06-H228	
	ハリー・ポッターと謎のプリンス. 下巻	J. K. ローリング 作 松岡佑子 訳	静山社 2006. 5	Y9-N06-H229	
21	Harry Potter and the deathly hallows	J. K. Rowling 作	Bloomsbury 2007	Y8-B6901	
	ハリー・ポッターと死の秘宝. 上巻	J. K. ローリング 作 松岡佑子 訳	静山社 2008. 7	Y9-N08-J336	
	ハリー・ポッターと死の秘宝. 下巻	J. K. ローリング 作 松岡佑子 訳	静山社 2008. 7	Y9-N08-J337	

22	J. K. Rowling: The Genius behind Harry Potter	Sean Smith 著	Arrow 2002	所蔵なし	
	J. K. ローリングその魔法と真実：ハリー・ポッター誕生の光と影	シヨーン・スミス 著 鈴木彩織 訳	メディアファクトリー 2001. 11	KS129-G15 ※	
23	Harry Potter, Tom Brown, and the British School Story: Lost in Transit? (The Ivory Tower and Harry Potter: Perspectives on a Literary Phenomenon 所収)	David K. Steege 著	University of Missouri Press 2002	YZ-B180	
24	Life in public schools	Geoffrey Walford 著	Methuen 1986	FC34-A7 (本館)	
	パブリック・スクールの社会学：英国エリート教育の内幕	G. ウォルフオード 著 竹内洋, 海部優子 訳	世界思想社 1996. 12	FB64-G5 (本館)	
25	The Heirs of Tom Brown: the English School Story	Isabel Quigly 著	Oxford University Press 1984, c1982	所蔵なし	

結び

川端 有子

皆さん、2日間の長い時間、話を聞いていただい
てどうもありがとうございます。菱田先生から現代の、本当に今連載が終わったばかりの「ハ
リー・ポッター」という作品が、伝統的な学校物語の枠組みを使いながら、それに批判を向けている
というお話がありました。実は、現代の作品というのはそのようなものが結構多くて、気が付いて
いないけれどもよく見てみると、伝統的な形を使いながらもその伝統を突き崩す、というような
形に持ってきているものが多いのです。

階級の話随分詳しくしていただきましたけれども、そのことで私が初めに話したイギリス
児童文学の歴史にもう一つ付け加えることが出てきたと思います。と言いますのは、先ほど菱田先生
がホワイトボードに書かれました、階級についての三角形の絵¹がありましたけれども、イギリス
の児童文学というのは、全てミドルクラス以上の人たちが書き、ミドルクラス以上の人たちが読
むものだったということなのです。そのことはほとんど意識されないで、当たり前のようにずっと
続いてきているのですけれども、20世紀の半ばくらいから労働者階級の作家が、労働者階級の子
どもたちに作品を書くようになり、これが結構画期的なことだったのです。さらに、その辺りの労働
者階級の作家の中でも、オックスフォードやケンブリッジではありませんけれども、大学を出て、
教育を受けて、そして作家になった、というような人が出てきます。その最初の世代というのが、
『ふくろう模様の皿』(The Owl Service)を書いたアラン・ガーナー(Alan Garner)、そして『海辺の
王国』(The Kingdom by the Sea)などを書いたロ

バート・ウェストール(Robert Westall)です。この人たちは労働者階級の出身でありますけれども、
勉強して大学を卒業し、そして自分の出自の階級の文化とは一度縁を切る、という形でなくて
は、大学へ行って作家になることができなかったわけです。そしてその後、自分の故郷に帰り、自
分の出自の文化ともう一度手を結び直すというような、そういう非常な苦勞を乗り越えなければなら
なかったということがありました。アラン・ガーナーの『ふくろう模様の皿』のウェールズ出身の少年の苦悩や、ロバート・ウェストールの『海
辺の王国』のハリーという少年が、自分よりも上の階級の男性ととても仲が良くなって親子関係を
結んだにも関わらず、自分の産みの親が生きていたために、また下の階級に戻らなければならな
かった、というような物語は、階級制度のあるイギリスという社会を考えないと理解のできないこ
とでもあるのです。もちろん、それを抜きにしても『ふくろう模様の皿』というのは非常に面白い
お話ですし、『海辺の王国』も感動的な物語です。けれども、今示されましたような、階級制度とい
うことが背景にあるということを考えれば、いろいろなことの謎が解けていくと思います。

昨日、私が話しました中でも、『若草物語』というのはアメリカの話でしたけれども、19世紀
のボストンですので、かなりイギリスの文化を強く受けたところなのです。それで、マーチ家の人
たちが、お金がない、ドレスがない、と、貧乏であることをすごく嘆きながらも、どうして女中さん
がいたのか、ということをも日本人は必ず不思議に思うわけです。貧乏で、貧乏で、クリスマス
のプレゼントもなくていやだ、と言いながら、貧しい人たちのところへバスケットを持って施し
に行くのはどうしてなのか。それは、オールコットの書いたマーチ家の人たちは、牧師という
職業に就くミドルクラスの人たちだからであって、牧師という尊敬されるミドルクラスの家庭
の体面を維持するだけのお金がない、という状態だったということなのです。このように少し古
い作品になりますと、その社会背景ということを理解すると、さらによく分かってくるというこ
とがあると思います。

1 p. 91参照

文学史という観点で、1日目には家庭小説の系譜、そして冒険小説の系譜を見ていきました。冒険小説の主人公たちも、実はミドルクラスやアッパーミドルクラス出身のいいところの坊ちゃんたちだったわけですし、それがさらに、労働者階級の子どもたちが冒険するような話が出てくるのは、20世紀の後半になってからだというような事実も見て取れるかと思います。2日目は、もう少し夢の世界のような、創作フェアリーテイルのお話も聞かせていただきまして、伝承の民話の世界が、短編の空想的な物語として続いている系譜のお話もしていただきました。日本では、昔話というのは、西洋の昔話とは少し違うような形であるかと思いますが、それでもその日本版おとぎ話というようなものが、私としては宮沢賢治から安房直子というようなところに続いているのではないかと、というふうに考えています。そして、菱田先生のお話で、もう一つの大きな要因である階級というものが明らかになったかと思えますけれども、学校物語というものの定義について御質問がありました。これは、人によって解釈が違うところかと思いますが、狭い定義としては、菱田先生が定義されたように、19世紀の半ばから20世紀の初め、特権階級の通ったパブリック・スクールを舞台にした物語となりますが、それでも、学

校というのが子どもたちにとって非常に大きな日常の場であるということには、古今東西を問わず変わらないことかと思えます。学校の中での生徒同士の関係、先生と生徒との関係、そして、学校と外の社会との関係といったようなものを描く作品というのは、現代でも非常に多くあるわけで、この辺りまでも含め、広い意味で学校物語として考えれば、その伝統というのは広がりつつ、今でもそれなりの形を変えて存在していると考えてもよいと思います。そしてその時に、学校というものがあるときは権力者の権力装置になるということも、私たちは覚えておかなければいけないのではないのでしょうか。このように私は菱田先生のお話を聞きながら考えていました。

今回の話は専らイギリスを中心に、その歴史ということを考えてきました。イギリスの翻訳を多く受け入れることから出発してきた、現代の日本の児童文学の在り方というものをもう一度考えてみる。また、その翻訳の受容ということを考えてみる。そのきっかけとなればよかったと考えております。2日間、本当にありがとうございました。

(かわばた ありこ 日本女子大学家政学部児童学科教授、国立国会図書館客員調査員)

結び

「結び」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号	デジタル化
1	ふくろう模様の皿	アラン・ガーナー 作 神宮輝夫 訳	評論社 昭和47	Y7-2919	
2	海辺の王国	ロバート・ウェストール 作 坂崎麻子 訳	徳間書店 1995. 4	Y9-2656	

レジュメ

参考資料紹介

「黄金期のイギリス挿絵画家から日本の童画作家へ」

国際子ども図書館資料情報課長

西尾 初紀

黄金期のイギリス挿絵画家から日本の童画作家へ：新・絵本の愉しみ

1. 画集・事典・研究書

2. 3人の挿絵画家たち

- ・アーサー・ラッカム 1867-1939
- ・チャールズ・リケッツ 1866-1931
- ・ウォルター・クレイン 1845-1915

3. 忘れられた日本の挿絵画家たち

- ・岩田専太郎 1901-1974
- ・渡辺与平 1889-1912
- ・名越国三郎 1887-?

関連年表

▶イギリス

名前	本名	生年-没年
ジョン・テニエル	John Tenniel	1820-1914
フレデリック・サンズ	Frederick Sandys	1832-1904
ウォルター・クレイン	Walter Crane	1845-1915
ランドルフ・コールデコット	Randolph Caldecott	1846-1886
ケイト・グリーンナウェイ	Kate Greenaway	1846-1901
セルウィン・イメージ	Selwyn Image	1849-1930
ヘイウッド・サムナー	George Heywood Samner	1853-1940
ロバート・アニング・ベル	Robert Anning Bell	1863-1933
ローレンス・ハウスマン	Laurence Housman	1865-1959
チャールズ・リケッツ	Charles de Sousy Ricketts	1866-1931
ベアトリス・ポター	Helen Beatrix Potter	1866-1943
アーサー・ラッカム	Arthur Rackham	1867-1939
フランク・ブラングウィン	Frank William Brangwyn	1867-1956
チャールズ・ロビンソン	Charles Heath Robinson	1870-1937
オーブリー・ビアズリー	Aubrey Vincent Beardsley	1872-1898
ウィリアム・ニコルソン	William Nicholson	1872-1949
ゴードン・クレイグ	Edward Gordon Craig	1872-1966
ポール・ウッドロフ	Paul Vincent Woodroffe	1875-1954
ジェシー・キング	Jessie Marion King	1875-1949
エリック・ギル	Arthur Eric Rowton Gill	1882-1940
エドモンド・デュラック	Edmund Dulac	1882-1953
ハリー・クラーク	Harry Clarke	1889-1931

▶日本

近代図案の先駆者

杉浦非水	すぎうら ひすい	1876-1965
橋口五葉	はしぐち ごよう	1880-1921

竹久夢二とその周辺

竹久夢二	たけひさ ゆめじ	1884-1934
藤森静雄	ふじもり しずお	1891-1943
恩地孝四郎	おんち こうしろう	1891-1955
田中恭吉	たなか きょうきち	1892-1915
渡辺与平	わたなべ よへい	1889-1912
亀高(渡辺)文子	かめたか ふみこ	1886-1977
名越国三郎	なごし くにかぶろう	1887- ?

幻想挿絵作家

水島爾保布	みずしま におう	1884-1958
岩田専太郎	いわた せんたろう	1901-1974
竹中英太郎	たけなか えいたろう	1906-1988

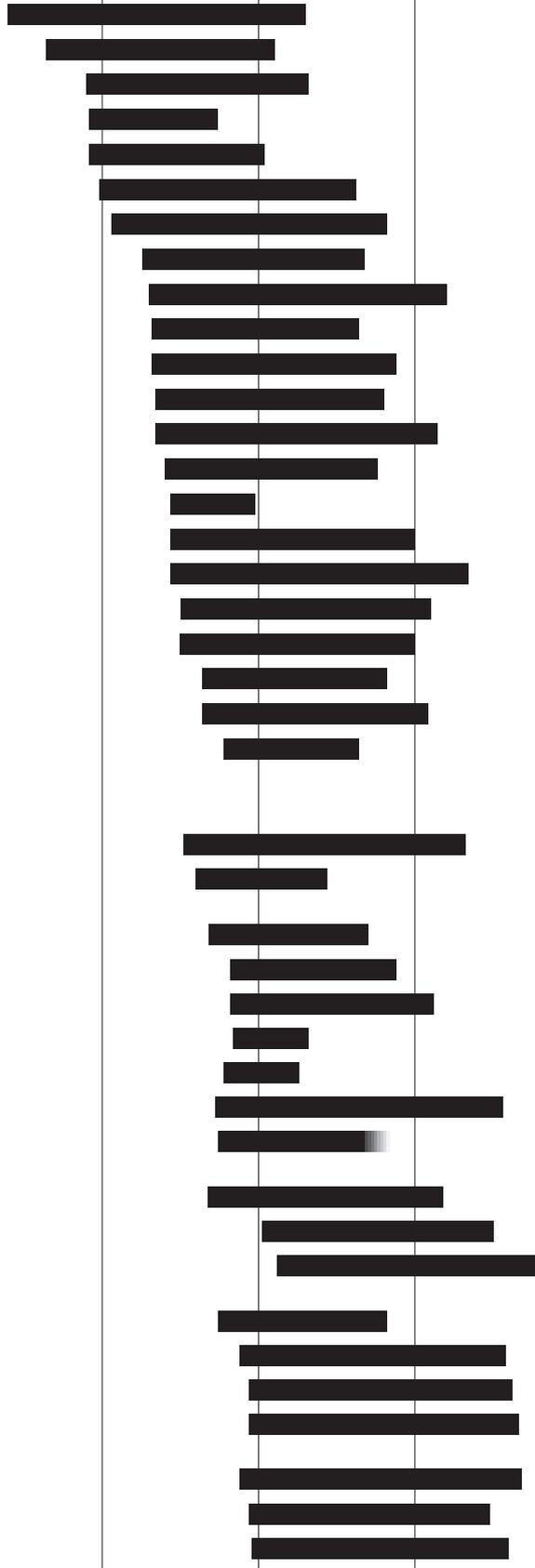
化粧品会社デザイナー

小村雪岱	こむら せつたい	1887-1940
矢部季	やべ すえ	1893-1978
山名文夫	やまな あやお	1897-1980
山六郎	やま ろくろう	1897-1982

童画作家

武井武雄	たけい たけお	1894-1983
初山滋	はつやま しげる	1897-1973
蓆谷虹児	ふきや こうじ	1898-1979

1850 1900 1950



参考資料紹介
黄金期のイギリス挿絵作家から
日本の童画作家へ
新・絵本の愉しみ
西尾 初紀



本講座について

平成18(2006)年度に、「絵本の愉しみ—イギリス絵本の伝統に学ぶ—」というテーマで児童文学連続講座を行いました。その続編として今回は、絵本に限らず挿絵全体を俯瞰して取り上げます。

1. 画集・事典・研究書

19世紀の後半から20世紀の初頭にかけてのイギリスは、絵本に限らず、挿絵の黄金期と呼ばれています。荒俣宏さんの『妖精画廊』や、ケルト文学者の井村君江さんの『妖精美術館』、それから平成18(2006)年度の連続講座の監修者をお願いした吉田新一先生の訳による『〈子どもの本〉黄金時代の挿絵画家たち』、また、海野弘さんの『おとぎ話の幻想挿絵』といった本が出ています。

どれもなかなか美しい本で入門には最適なのですが、この時代の挿絵画家の全貌を見渡すのに重宝する本としては、*The Dictionary of 19th Century British Book Illustrators* (19世紀の英国の挿絵画家たち)と、その姉妹編である *The Dictionary of 20th Century British Book Illustrators* (20世紀の英国の挿絵画家たち)があります。1981年に *Dictionary of British Book Illustrators and Caricaturists 1800-1914* という本が出ており、それが好評だったために、増補改訂版としてこの2冊が刊行されようです。

絵本論に関しては、大阪国際児童文学館の三宅興子先生がお書きになった『イギリス絵本論』と『イギリスの絵本の歴史』があります。前者は、先生がいろいろなところで発表された論文を一冊に集めたアンソロジーで、後者は通史になっています。

今回は絵本に限らず挿絵全体を俯瞰したいと思いましたので、もう2冊を参考にさせていただきました。一つは海野弘さんの『世紀末のイラストレーターたち』で、もう一つは『英国アール・ヌーヴォー・ブック：その書物デザインとイラストレーション』です。どちらも大体19世紀末から20世紀初頭の挿絵画家について書かれた研究書です。

平成18(2006)年度の児童文学連続講座では、ベアトリクス・ポター (Helen Beatrix Potter) やランドルフ・コールデコット (Randolph Caldecott) などを取り上げましたが、今回は先に述べた本などを参考に、新たに三人の画家についてご紹介します。

2. 三人の挿絵画家たち

アーサー・ラッカム 1867-1939

アーサー・ラッカム (Arthur Rackham)、最近はその本も日本で出版されるようになったので、御存じの方も多いと思います。ファンタジーとリアリティが混然一体になった、子どもも妖精も共存する不思議な世界を描く人です。リストに御紹介したような研究書が出ていますので、彼についての詳細はそれらを参考にさせていただきたいと思います。

今お話をしているこの場所で、19世紀後半から20世紀前半にかけて刊行されたアメリカの児童雑誌『セント・ニコラス』(St. Nicholas)の小展示(「セント・ニコラス：世界の子どもたちが集った雑誌」)を行います。¹その下調べを行っている際に見つけ

1 2012(平成24)年12月4日(火)から2013(平成25)年2月3日(日)まで開催。参考：「『セント・ニコラス：世界の子どもたちが集った雑誌』展」『国際子ども図書館の窓』13(2013.9)p.43-45



図1



図2

してぜひ頼んでみたいという思いがあったのかもしれません。これらの絵が、雑誌のための描き下ろしなのか、それとも既に発表していたものの使い回しなのかについても、調べがつかないのですが、興味を持たれた方にぜひ研究していただきたいと思います。

ズラミート・ヴェルフィング (Sulamith Wülfing 1901-1989) というドイツの画家も、ラッカムと画風がよく似ているのでぜひこの機会に紹介したかったのですが、今回は名前を挙げるだけに留めます。

チャールズ・リケッツ 1866-1931

チャールズ・リケッツ (Charles Ricketts)、挿絵画家としてよく知られた存在ではありませんし、絵本作家という認識もあまりされていないと思います。イラストレーターとしての活動期間も、19世紀末の10年間くらいなので、本国でも画集はあまり出ていませんが、この人を取り上げたのは、オスカー・ワイルド (Oscar Fingal O'Flahertie

たのですが、ラッカムはイギリスの画家であるにも関わらず、このアメリカの雑誌の表紙 (図1) と口絵 (図2) を手掛けています。残念ながら、雑誌の表紙は製本するときに外してしまうことが多かったので、一体いつから描き始めて、何号分描いたかということの確認が得られないのですが、口絵に関しては、「セント・ニコラス」が初めて口絵をカラー印刷にしたときのトップバッターがアーサー・ラッカムでした。なぜ、わざわざイギリスの画家に頼んだのか。アメリカにも彼の名声は知れ渡っていたので、雑誌のカラー化に際

Wills Wilde 1854-1900) の第2童話集『柘榴の家』 (A House of Pomegranates) の挿絵を担当しているからです (図3)。オスカー・ワイルドの第1童話集は有名な『幸福な王子』 (The Happy Prince) です。第2童話集自体あまり知られていません



図3

が、実はリケッツはオスカー・ワイルドの本を他にもいくつか手掛けていて、有名な『ドリアン・グレイの肖像』 (The Picture of Dorian Gray) の装丁も彼が手掛けています。その後、詩集『スフィンクス』 (The Sphinx) の装丁も担当しましたが、遅れてピアズリーが挿絵を完成させた『サロメ』 (Salomé) が先に刊行されてしまったので、ピアズリーの二番煎じのような評価をされてしまい、もう出版社の思惑に振り回されたくないと思ったのか、リケッツはその後自分で自費出版社を立ち上げたりするのですが、結局、20世紀に入ると、挿絵を描くのをやめて舞台美術の世界に入っています。活動期間が短く挿絵画家としては不運でしたが、先ほど挙げた二つの研究書では、どちらも彼についての章を設けて解説しています。

ウォルター・クレイン 1845-1915

ウォルター・クレイン (Walter Crane) は、御存じの方も多いでしょう。先に挙げた二人より一世代上の人です。図4はワイルドの第1童話集の『幸福な王子』に収録された「わがままな大男」の挿絵です。図5は、トイブックと言われる子ども向けのカラー印刷の小冊子の『三匹のくま』に収められたシンデレラの絵です。シンデレラの靴が片方脱げていて、そのガラスの靴を持って探し回っている王子の姿が見えます。



図4

ウォルター・クレインについては、児童文学の



図5

世界では絵本作家として扱われているのですが、絵本を専業にしていたわけではありません。最近になって、画集と研究書が出ました。*Walter Crane : the Arts and Crafts, Painting, and Politics, 1875-1890* は研究書で、アーツ・アンド・クラフツ運動 (Arts and

Crafts Movement) の後継者であり、油絵も描き、社会主義運動にも身を投じた彼の全体像を解き明かそうとしている本です。*The Art & Illustration of Walter Crane* は画集で、主に絵本の再録なのですが、油絵や壁紙デザインなども収録しています。

『世紀末のイラストレーターたち』の中で、クレインについて、海野弘さんが興味深いことを書いておられます。

[彼の] デイティールへの情熱は建築デザイナーたちの注意をひき、クレインは、家具や壁紙などのデザインをたのまれるようになる。1876年に出版された『赤ん坊のオペラ』は子どもの本としては大変な成功を取めた。つづけて子どもの本をたのまれていたが、いそがしくてのぼしていたところ、1877年のクリスマスに「赤ん坊のオペラの姉妹編」というキャッチフレーズで、ケイト・グリーナウェイの『窓の下』がルートリッジから出版され、クレインをびっくりさせた。

絵本の依頼は多数あったけれど、専業絵本画家でない彼は忙しかつたのでそれどころではなかった、ということがここから分かります。

The Art & Illustration of Walter Crane という本の表紙に描かれている絵 (図6) は、浜辺に打ち寄せている波の白い波頭が、白馬の群れになっていて、海の神のネプチューンがその手綱を引いているという油絵です。ロックのレコード・ジャケットにこの絵が流用されていて、クレインというと、この絵を思い浮かべる人も多いようです。



図6

図7は「セント・ニコラス」のイギリス版の表紙です。ラッカムの場合は、絵そのものが忠実にアメリカでカラー印刷されたのですが、それよりも前のクレインの時代は、版下を直接やり取りするということがまだできなかつたのか、これは、アメリカ版の表紙をクレ

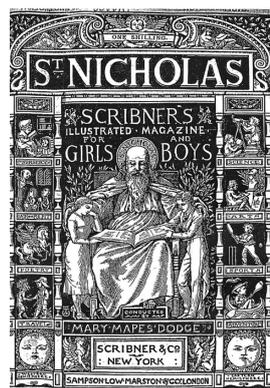


図7

インが模写したものです。文字は活字で起こすことができたけれど、絵についてはイギリスで独自に描き起こさなければならなかつたため、細部に器用なクレインに依頼がきたのではないかと推測されます。

他にも黄金期の挿絵画家についての本が、最近次々と出版されています。フランス生まれで、イギリスで活動したエドモンド・デュラック (Edmund Dulac) について『神秘なる挿絵画家エドモンド・デュラック』が出版され、それから先月末には、スコットランド出身のジェシー・キング (Jessie Marion King) について書かれた『流線の挿絵画家ジェシー・キング』が出版されたばかりです。100年を経た今日、黄金期の挿絵作家についての関心が高まっていると言えます。

3. 忘れられた日本の挿絵画家たち

次に、イギリスの影響を受けたと思われる日本の画家について見ていきます。リケッツのところでは触れましたが、オスカー・ワイルドの『サロメ』という、詩編であり、戯曲でもある作品の挿絵を描いたのがオーブリー・ビアズリー (Aubrey

Vincent Beardsley)です。児童文学の話で、このようなエロスとグロテスクとデカダンが漂った絵を紹介すると、嫌悪感をもよおす人もいるかもしれませんが、この時代のイギリスの挿絵画家で、日本によく紹介され、一番知られたのは彼だけと言っても過言ではないと思います。関川左木夫さんという英文学者がその影響を調べられ、『ピアズレイの芸術と系譜』や『ピアズレイと日本の装幀画家たち』—こちらは展覧会の図録を兼ねているようです—という本を書いておられます。今のようインターネットで画像がすぐ見られるわけではないこの時代、ピアズリーの影響がどのように日本に伝わったか、『サロメ』などの本を誰が手に入れて回し見る機会があったのか、関川さんは推理をされています。ただ、大正期から昭和期の初めにかけての日本の挿絵画家が皆、本当にピアズリーの挿絵を見て、それをまねたかどうかは確認がありません。

話が少し横道にそれますが、明治18年頃、あの坪内逍遙が『小説神髓』を書いた後、その理論に基づいた新しい小説を実践しようとして、『当世書生気質』を書きました。好評だったので、17巻まで出版されました。それを読んでいた洋画家が添えられていた挿絵を見て、文明開化の時代に合った文章を書くのなら絵の方もそうでなくては



図8



図9

いけない、と申し出て洋画風の絵を描いた(図8=第5巻)のですが、この新機軸の評判が意外に悪く、たった二回で降板してしまいました。この時代の挿絵というのは、いわゆる引き目鉤鼻の浮世絵の影響から逃がられず、髪は洋風ザンバラになっても顔は

浮世絵風表現で描かれた絵(図9=第13巻)しか受け入れられなかったのです。明治10年代までは、まだ洋風の表現で描いた絵というものを見る機会があまりなかったのですが、明治30年ぐらいになって、ようやく洋画風の描き方にも抵抗がなくなり、ピアズリー風の描き方の絵が受け入れられるようになったのは、まさにこの時代だったからでしょう。

この時代の画家で一世を風靡したのは、御存じの竹久夢二です。彼がピアズリーの影響下にあるというのは、牽強付会と思われるかもしれませんが、やはり日本独自の浮世絵の流れを汲んだ輪郭線で囲まれた絵でありながら、洋風な表現を取り入れたという点では、この時代を象徴しています。竹久夢二は、当時の日本の挿絵画家に影響を与えて、数々のフォロワーを生んだわけですが、彼自身も、アールヌーヴォーの影響を受けたのではないかと論考をした、下関市立美術館で行われた展覧会の図録が『竹久夢二と日本のアールヌーボー』です。具体的に夢二のどのような絵が、ピアズリーっぽいと言われたかという例が挙げられており、落谷虹児や初山滋、武井武雄など、童画ではよく知られた画家の作品についても、前述の関川さんの著書の中で、ピアズリーの影響があると推察されるものが例示されています。

児童文学の話をするならば、本当は落谷虹児や武井武雄のことについて触れるのが本筋でしょうが、これらの人については研究書も画集もたくさん出ていますので、今回は忘れ去られてしまったような、取り上げられる機会の少ない人たちを紹介します。

岩田専太郎 (1901-1974)

大正から昭和にかけて、爆発的な人気を誇った挿絵画家です。1974年に亡くなって、1977年頃に画集がたくさん出たのですが、それから30年は、ほとんど忘れ去られた存在になっていました。最盛期には本当に売れっ子で、吉川英治の『鳴門秘帖』や、映画の脚本なども書いた川口松太郎とのコンビでよく知られており、笹沢左保の『木枯し紋次郎』の挿絵も書いています。しかし、今や笹沢左保を知る人も少なくなり、ましてや挿絵を描

いた彼のことなど、ほとんど忘れ去られてしまったような状態でした。1999年に、コレクターの方が私設の美術館を設立され、2006年には、高島華宵や竹久夢二などの作品を集めた弥生美術館で回顧展が開かれました。それに連動して『岩田専太郎：挿絵画壇の鬼才』が出版されて、ようやく再認識されたという感があります。

その間も、そして現在も、東京のとあるスーパーではレジ袋に岩田専太郎のデザインを使い続けておられます。なぜこのスーパーが彼のデザインを使っているのかは、推測ですが、社長が、百貨店の包装紙のように、いつかは有名な画家に自社のデザインを頼みたいという思いを抱いておられたのでしょう。それぐらい専太郎の絵が庶民の憧れであった時代があったのです。

渡辺与平 (1889-1912)

渡辺与平、彼の作品は竹久夢二の作品とよく似ています。ピアズリーと同じく結核に苦しみ、わずか24歳で亡くなってしまいます。その当時から竹久夢二のライバルと言われていた人なので、もし生き残っていたら、人気を二分したかもしれません。この当時、デザイン、イラストという言葉はなく、小さな挿絵は「コマ絵」と呼ばれていたのですが、彼のコマ絵はあまりに好評で、画集(図10)として出版されるほど人気を博しました。彼の作品は著作権が切れていますので、デジタル化された作品を、国立国会図書館のホームページから全ページ御覧いただくことが可能です。

ちなみに、彼はもともと宮崎姓でしたが、同じ画塾に通っていた女流画家の渡辺文子と結婚し、渡辺姓を名乗りました。与平が早くに亡くなったため、文子も画才がありましたから、彼のコマ絵



図10

の仕事を引き継いだようです。1981年に出版された『日本の童画』全13冊の第5巻で加藤まさを、須藤しげると並んで、渡辺文子を取り上げられています。彼女は、与平と同じような絵を描いてしばらく生活費を得たのち、船長と再婚して神戸に移り住み、その地で洋画家・亀高文子として名を残しました。

名越国三郎 (1887-?)

名越国三郎も竹久夢二に似た絵を描いた人です。生前は彼も売れっ子だったようで、岩田専太郎や、今日は御紹介できませんでしたが竹中英太郎と並んで、江戸川乱歩の小説の挿絵を描いていますので、ミステリーファンの人には知られた存在です。名越国三郎については、生没年不詳の謎の画家とされていますが、『竹久夢二と抒情画家たち』の中に、1887年鳥取の生まれで、与平と同じく京都市立美術工芸学校を卒業し、大阪毎日新聞に入ったという記載がありました。戦後もしばらく活動を続けていたようです。情報の洪水インターネットでは生没年不詳扱いなのに、本の狭間に経歴が載っていたということで、少し考えさせられるところがありました。

彼もいろいろな本に挿絵を描いていて、それらを集めた『初夏の夢』という画集(図11)が出ています。これも、デジタル化された画像を国立国会図書館ホームページから御覧になれます。

参考資料



図11

最後に参考資料をいくつか御紹介いたします。一つは『名作挿絵全集』全10巻、代表的な挿絵画家の代表作を採録した本で、もう一つは『図説絵本・挿絵大事典』、全3巻の事典です。

後者の第1巻のまえがきに興味深いことが書かれています。

この方面ではかなり日本の先を行くイギリス児童文学界などの動向を見ても、絵入り刊本の歴史は人々の最も関心の深い分野の一つとなっていて、それをふり返る歴史書が数多く出版されている。日本の場合は、歴史そのものは決して見劣りしないのだが、それを通覧できる資料があまりにも少ない。それが400年の伝統を誇る日本の児童書史を取り巻く現状かと思うと、いかにもさびしいという感じがいなめない。

ここから分かることは、油絵などを描いた人の経歴については美術家辞典に掲載されたりして、調べる手立てに恵まれているが、挿絵画家については、この名越国三郎のように生没年不詳という扱いになってしまいがちで、どうしてもページの間に挟まったまま埋もれてしまう人が多いということです。その点で、インターネット時代になってもイギリスと日本では状況の格差が縮まっていなようです。

国立国会図書館でもデジタル化を進めており、

著作権保護期間が満了した、または著作権処理が済んだ資料については、インターネット上で中身を御覧いただける機会がこれから増えますので、ぜひともこのデジタル化資料を利用して日本の挿絵画家たちの研究をする方が、イギリスに劣らないぐらいに増えれば、と願っています。

<http://kindai.ndl.go.jp/>

国際子ども図書館のホームページに、絵本ギャラリーというコーナーがあります。この中の電子展示会『絵本は舞台』では、クレインの「赤ん坊のオペラ」と、それに続く三部作を全て御覧いただけます。クレインに限らず、コールデコットやケイト・グリーンアウェイ (Kate Greenaway) の作品も収録されています。『ユーゲントシュティルと絵本画家たち』では、クレインの「シェークスピアの庭の花たち」や「暦の仮面舞踏会」を御覧いただくことが出来ます。

<http://www.kodomo.go.jp/gallery/index.html>

また、18世紀～20世紀のイギリスの児童書のコレクションである「イングラム・コレクション」のデジタル化を進めております。2013年度内にはインターネット上で公開する予定です²。

(にしお はつき 国際子ども図書館資料情報課長)

² 2013年4月23日から、電子展示会「ヴィクトリア朝の子どもの本：イングラムコレクションより」の提供を開始。
<http://www.kodomo.go.jp/ingram/index.html>

「黄金期のイギリス挿絵画家から日本の童画家へ」紹介資料リスト

(本館) → 国立国会図書館東京本館で所蔵

※ → 国立国会図書館東京本館にも所蔵

デジタル化図書 (インターネット) → 「国立国会図書館のデジタル化資料」でデジタル化資料を閲覧可能 (インターネット公開)

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号	備考
1	新編妖精画廊	荒俣宏 編著	光風社出版 1994. 10	KC482-E530 ※	
2	妖精美術館	井村君江 監修	ビレッジプレス (発売) 2007. 11	KC16-J1815 ※	
3	〈子どもの本〉黄金時代の挿絵画家たち	リチャード・ダルビー 著 吉田新一, 宮坂希美江 訳	西村書店 2006. 8	KC482-H586 ※	
4	おとぎ話の幻想挿絵	海野弘 解説・監修	パイインターナショナル 2011. 9	KC482-J479 ※	
5	The dictionary of 19th century British book illustrators and caricaturists	S. Houfe 著	Rev. (ed.) Antique Collectors' Club 1996	YZ2-A34	
6	The dictionary of 20th century British book illustrators	A. Horne 著	Antique Collectors' Club c1994	YZ2-A35	
7	イギリス絵本論	三宅興子 著	翰林書房 1994. 10	KC511-E103 ※	
8	イギリスの絵本の歴史	三宅興子 著	岩崎美術社 1996. 8	KC511-G20 ※	
9	世紀末のイラストレーターたち	海野弘 著	美術出版社 1976	KC482-22 (本館)	
10	英国アール・ヌーヴォー・ブック：その書物デザインとイラストレーション	ジョン・ラッセル・テイラー 著 高橋誠 訳	国文社 1993. 4	KC482-E392 (本館)	
11	アーサー・ラッカム	アーサー・ラッカム [画] 大瀧啓裕 監修・解説	改訂版 河出書房新社 (発売) 2005. 11	KC16-H1531 ※	
12	挿絵画家アーサー・ラッカムの世界	新人物往来社 編	新人物往来社 2011. 5	KC482-J322 ※	
13	挿絵画家アーサー・ラッカムの世界. 2	新人物往来社 編	新人物往来社 2011. 9	KC482-J370 ※	
14	St. Nicholas : a monthly magazine for boys and girls, Vol. 40, no. 7		Parien, Conn. [etc.] Educational Pub. Co. [etc.]	Z57-A5	
15	St. Nicholas : a monthly magazine for boys and girls, Vol. 41, no. 2		Parien, Conn. [etc.] Educational Pub. Co. [etc.]	Z57-A5	
16	Walter Crane : the arts and crafts, paintings and politics, 1875-1890	Morna O'Neil 著	Yale Univ. Press [2010]	YZ-B2686	
17	Art & Illustration of Walter Crane	Jaff A. Menges 編	Dover Publications 2010	YZ-B2685	

黄金期のイギリス挿絵作家から日本の童画作家へ：新・絵本の愉しみ

18	神秘なる挿絵画家エドモンド・デュラック = EDMUND DULAC	エドモンド・デュラック [画] 海野弘 解説・監修 マール社編集部 編	マール社 2011. 12	KC482-J417 ※	
19	流線の挿絵画家ジェシー・キング	ジェシー・キング [画] 海野弘 解説・監修 マール社編集部 編.	マール社, 2012. 11	KC482-J516 ※	
20	ピアズレイの芸術と系譜	関川左木夫 著	改訂版 東出版 1980. 11	KC311-7 (本館)	
21	ピアズレイと日本の装幀画家たち	原美術館 編纂	阿部出版 1983. 4	KC16-E222 (本館)	
22	竹久夢二と日本のアール・ヌーボー		下関市立美術館 1984. 4	KC16-E2025 ※	
23	竹久夢二と抒情画家たち	細野正信 著	講談社 1987. 12	KC229-E6 (本館)	
24	夢二ロマン版画：大正の哀愁	中右英 著	改訂版 里文出版 1994. 8	KC229-E251 (本館)	
25	岩田専太郎：挿絵画壇の鬼才	松本品子, 弥生美術館 編	河出書房新社 2006. 1	KC229-H151 ※	
26	愛らしき少女：ヨヘイ画集	渡辺与平 著	実業之日本社 大正2	児乙部13-H-1	デジタル化図書 (インターネット)
27	日本の童画. 第5巻 (加藤まさを須藤しげる 渡辺文子)		第一法規出版 1981. 10	KC511-52 ※	
28	初夏の夢	名越国三郎 著	洛陽社 大正5	327-903 (本館)	デジタル化図書 (インターネット)
29	名作挿絵全集. 第4巻 (昭和戦前・少年少女篇)		平凡社 1979. 10	KC482-76 ※	
30	図説絵本・挿絵大事典. 全3巻 (図説日本の児童書四〇〇年)	川戸道昭, 榎原貴教 編著	大空社 2008. 11	UG2-J1 ※	

講師略歴（五十音順、敬称略）

芦田川 祐子（あしたかわ ゆうこ）

英国レディング大学にて PhD（学術博士）を取得。川口短期大学勤務を経て、現在は文教大学文学部英米語英米文学科准教授。メタフィクション（物語についての物語）やおとぎ話批評の理論について研究。

編著書 『英語圏諸国の児童文学 I—物語ジャンルと歴史』（共著）、『乳幼児の保育と教育—子どもの最善の利益を求めて』（共著）

論文 「お伽噺批評と書かれた声」（『Tinker Bell』52号）等

川端 有子（かわばた ありこ）

関西学院大学大学院博士課程満期退学、英国ローハンプトン大学にて PhD（児童文学）を取得。愛知県立大学外国語学部を経て、現在は日本女子大学家政学部児童学科教授。日本イギリス児童文学学会会長、国立国会図書館客員調査員（平成24年度～）。

編著書 『本を読む少女たち：ジョー、アン、メアリーの世界』、『少女小説から世界が見える：ペリーヌはなぜ英語が話せたか』、『「もの」から読み解く世界児童文学事典』（共編著）等

菱田 信彦（ひしだ のぶひこ）

筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科単位取得退学。川村学園女子大学文学部教授。イギリス小説、英米児童文学、文学批評理論、とくに児童文学作品における階級・ジェンダー・人種表象について研究。

訳書 『ファンタジー文学入門』（共訳）

論文 「ティモシイのだいじなコート——アーサー・ランサム作品における階級表象」（『Tinker Bell』55号）、「ハリー・ポッターと英国階級社会」（『Tinker Bell』51号）等

水間 千恵（みずま ちえ）

名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士課程修了。博士（文学）。財団法人大阪国際児童文学館、國學院大学文学部勤務を経て、現在は川口短期大学こども学科専任講師。冒険小説、児童文学における性や家族について研究。

編著書 『女になった海賊と大人にならない子どもたち—ロビンソン変形譚のゆくえ』（日本児童文学学会奨励賞受賞）、『「もの」から読み解く世界児童文学事典』（共編著）、『世界児童文学百科現代編』（共編著）等

Beginning and Development of British Children's Literature:
Domestic Novels, Adventure Stories, Literary Fairy Tales
and School Stories

Transcript of the ILCL Lecture Series on
Children's Literature, 2012
Contents

Foreword	Kazuko Sakata	3
Introductory Notes		4
Introduction: History and Genres of British Children's Literature		
	Ariko Kawabata	6
Works in the genre of Charlotte Mary Yonge's <i>The Daisy Chain</i> (1856)		
	Ariko Kawabata	15
Food in Daniel Defoe's <i>Robinson Crusoe</i> and Other Adventure Stories		
	Chie Mizuma	32
Literary Fairy Tales: From their Origin to the Present		
	Yuko Ashitagawa	57
The Harry Potter Series as Seen from the Tradition of School Stories		
	Nobuhiko Hishida	80
Conclusion	Ariko Kawabata	112
Reference Books - The Golden Age of British Children's Book Illustration: British and Japanese Illustrators	Hatsuki Nishio	115
About the Speakers		125

平成24年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録
「イギリス児童文学の原点と展開：家庭小説・冒険小説・創作童話・学校物語」

平成 25 年 10 月 15 日 発行

編集・発行 国立国会図書館国際子ども図書館
〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話 03-3827-2053 FAX 03-3827-2043
印刷・表紙デザイン 株式会社 丸井工文社
〒107-0062 東京都港区南青山7-1-5

I S B N 9 7 8 - 4 - 8 7 5 8 2 - 7 5 3 - 5

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。本誌のPDF版を国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) でご覧いただけます。なお、訂正があった場合は、ホームページ上に掲載いたします。



リサイクル適性 (B)

この印刷物は、板紙へ
リサイクルできます。